

日本人の爲に氣を吐くこと萬丈であります。方便などは印度支那に於ては必要だけれども、日本人には要らない、いさなり法華經八年の機の如くに純圓の最大の教に接觸する國民であると言ふ。

純圓の機と教と國とを知らず

之を以て之を思ふに、淨土の三師は震旦權大乘の機に超えず。法然に於ては純圓の機、純圓の教、純圓の國を知らず。

實に徹底的であります。法然はグジャ／＼言つたけれども、それは純圓と云つて、純然圓滿なる最高の教を知らない。日本の國民は一番完全なる教に來たる人である。

實機に權法を授く

權大乘の一分たる觀經等の念佛を、權實をも辨へざる震旦の三師の釋、之を以て此國に流布せしめ、實機に權法を授けたり。

眞實の教を得べき國民に對して、方便の教を授けたる非難、此の意味を了解すれば愉快な事であります。權と云ふのは方便であります、眞實の教を奉ずる所の

機——機と云ふのは人と云ふも同じことであるから、完全なる教に行くべき國民に對して、方便淺薄なる宗教を授けた、それは何事であるかと云ふのであります。日本人の天職と云ひ、日本人の本分と云ひ、日本の前途には最も良き宗教、最も善き思想を與へなければならぬ。然るに、

醍醐を去つて蘇味を與ふ

實機に權法を授け、純圓の國を權教の國と成し、醍醐を嘗むる者に蘇味を與ふるの失誠に甚だ多し。

國民を輕視す

醍醐と云ふのは、一番良い味であります。最高の御馳走を與ふべき所の國民に、粗末な乞食に遣るやうな御馳走を食はすものである。醍醐と云ふのは乳の階級でありまして、乳の極く良い所の上等なる乳を飲まさればならぬ國民に、まづいまい水の水の混つたやうな乳を飲ましたと云ふのであります。醍醐一實の教——一番上等な味、醍醐を嘗むべき者に對して蘇味を與ふるとは何事であるかと云ふのが、此の御文章の結文であります、誠に振つて居るのであります。之を日蓮聖人

が悪口言つたと云ふ日本人は、餘程のたはげ者である、能く讀んで見るが宜い、明かに書いてあるのであります、是だけ反證を擧げて「サアどうだ」と云ふ所の議論なのであります。そこで正當に答辯する事が出来ないから、之に報ゆるに悪口と怨嗟と讒言と、様々の卑屈なる手段を以て報ゆるのであります。

所が今日では日蓮宗の人などでも「どうもさう云ふ事は餘り酷すぎる」なんと云ふ者がある、そんな事を言ふのは師敵對である。一體近來の研究者は氣が弱い、俺は日蓮主義者だと云つても、どうも言ふことが生ぬるい、さうして「餘りそんな事を言つたら人が怒る」と云ふ、人が怒るのは此方の言ふ事が徹底しないからである、徹底すれば怒る者はない、生ぬるくやるから怒る人が出来るのである。それは「純圓の國を權法の國と成し」と云ふ、こんな言葉ではちよつと分らぬけれども、完全なる教を立て、立派な思想を有つて世界の文明を指導すべき國民は、方便淺薄なるものを與へて濟むかと大聲疾呼するのである。悪口でも何でも無い、

生ぬるし

聖人八陣の論法

道善房との再會

法華經を信ずべき國民に向つて方便淺薄なる宗教で満足さす事は出来ないぢやないか、幾ら大きな聲で叫んでも怒る者はあるまい。怒られると云ふのは此方の議論が徹底せぬからである、日蓮主義の折伏と云ふものは、其處を味ひつゝ進むことが必要である。説法者が説法しても、唯だむやみに眞言は亡國だ、念佛を信ずれば地獄へ眞逆様だ、そんな事はかり言ふから悪口になる、日蓮聖人の論陣と云ふものは八陣の論法である、隙は一點もない、正攻法を以て四十二瓏の大砲でどんどん進んで行くから、敵はどうにも斯うにもならない。グズ／＼して居る中にすつかり四方から包圍してワーツとやつてしまふ、それは實に痛快である。

それから十月になりましてから、師匠道善坊が花房の蓮華寺に來訪をせられた。一旦は勘當同様にして清澄山を去らしめたけれども、師弟の情誼厚くして道善坊が窺に訪ねて無事を祝せられた。その時に日蓮聖人は之に報ゆるに十分の信念を以てした、永年親切に導いて戴いて師の思召に依らないで新らしき主張をすると

云ふやうな事は洵に濟まぬやうであるけれども、其處には如來の本懐と云ふものがあるのである、今日師の前途を助けるのも日蓮であると云ふことを徹底的に師匠に述べられた。道善坊は實はモウ一遍戻つて清澄山の住職でもやつて呉れるかと思つて、内々動かしに來たのであるけれども、日蓮聖人の思想は中々動かない、此の機會を逸してはならぬから師匠道善坊を教化しなければならぬと云ふので、諄々と説かれた、そこで老僧弱つてしまつて、其の時分に精神がすつかり動かされてしまつた。成程日蓮と云ふ者は偉い者だ、俺の弟子ではない、特別な者だと云ふので、大いに尊敬を拂ふやうになつたと云ふことが、日蓮聖人の筆に依つて書かれて居ります。今までは日蓮の云ふ事は少し激し過ぎるとか、間違つて居るとか思つて居られたが、さう云ふ心はすつかり無くなつて、流石は偉い者だと感心するやうになつた、けれども寺を捨て、出るだけの勇氣が無かつた。日蓮聖人はそれを慨嘆して居る、師匠は洵に有難い人だけれども、清澄山を捨て、出るだ

道善房内
心動く

日向の隨
身

けの勇氣がなかつた、師匠だけの力を以ては成佛覺束ない、日蓮が法華經を行じた功德の全部を道善坊に回向する、さうすればお師匠さんも助からぬ事もあるまいと云つて追善に捧げたのであります。

その時に男金實信の子が弟子となりました、是が後年の日向上人であります。日向上人は論議の方に長ずると云ふので、問答が大變上手だつたのであります。民部阿闍梨と稱し、佐渡房と呼んで居りました、六老僧の一人になつて後年身延の後をお繼ぎになるのであります。この人が文永元年の十月に於て日蓮聖人のお弟子になつた、六老僧の中では大分後に弟子になられた人であります。これ悲母の蘇生と云ふ一段を終りまして、次は小松原刀杖の一節であります。

八 小松原の刀杖

小松原法
難の聖訓

法然善導等がかきをきて候ほどの法門は、日蓮は十七八の時よりし

小松原の刀杖

りて候ひき。このごろの人の申すもこれにすぎず。結句法門は、かなわずしてよせてたゞかひにし候也。念佛者は數千萬かたうど多く候也。日蓮は唯一人かたうどは一人もこれなし。今までもいきて候は、ふしぎ也。今年も十一月十一日、安房の國東條の松原と申す大路にして申酉の時數百人の念佛者等にまちかけられ候て、日蓮は唯一人、十人ばかりものゝ要にあふものは、わづかに三四人也。いる矢はふる雨のごとし、うづ太刀はいなづまのごとし。弟子一人は當座にうちとられ、二人は大事のてにて候。自身もきられ打れ、結句は命に及びたりしが、いかが候ひけん、うちもらされて今までいきてはべり。いよいよ法華經こそ信心まさり候へ。第四の巻に云く、而此經者如來現在猶多怨嫉況滅度後。第五の巻に云く、一切世間多怨難信等、云云。(南條書)

これは名高い話であります、やはりこの年の十一月十一日であります。即ち

文永元年房州へ歸られた時からの出來事でありまして、房州から今度は復鎌倉の方へ赴かうと云ふお考の時なのであります。

十一月十一日、聖人は弟子と信者十人ばかりをお供として小松原を通られた。併しお供の中、物の用に立つ者は三四人とありまして、腕利の擊劍など出來る者は三四人、あとは坊さんでも弱い者で、信者とても役立つ者は無かつた。其の場合に彼の地頭景信——これはモウ法然上人の念佛に固定して居りまして、法然上人の念佛者は中々日蓮聖人を敵視したものであります、どうしても積年の怨、日蓮を殺さんければ蟲が納まらぬと云ふので、聖人が小松原を通過せられる事を知つて、百人ばかり、郎黨を驅り催ほし、時を計つて小松原の中に伏れて居つて斬付けるのであります。時間は文永元年十一月十一日申酉の刻とありますから、丁度午後四時から六時の間、日暮であります。十一月の四時から六時と云ひますと、日脚の短い頃でありますから、モウ四邊は少し薄暗くなつて、一陣の寒い風

鏡忍房の戦死

乗観、長英の重傷

聖人の刀瘡

工藤吉隆の戦死

日玉上人と日妙上人

がサツと小松原を吹き渡る頃、ガサ／＼と落葉ふみしだいて現はれたのであります。不意の事であり中々の激戦でありまして、弟子の鏡忍房と云ふ者は即坐に戦死したので、日蓮聖人は之を憐れんで日曉と云ふ名を贈られた、鏡忍房は確に力は強かつたのであります。それから乗観、長英と云ふ二人の弟子は非常に重傷を受け、日蓮聖人も亦眉間に三寸の疵を受けられたと云ふのであります。又丁度其處へお迎ひに参りました檀越天津の城主工藤吉隆は大いに戦つて、遂に深手を負ふて小松原に於て討死を遂げました、日蓮聖人は非常に吉隆の志を感ぜられて、俗人の儘であつたのでありますけれども、直に日玉上人の號を贈られました。丁度彼の乙御前の母が日妙上人の號を贈られたと同じことで、出家したのではないけれども、その志に酬いて、俗人の儘法華經の爲に討死した爲に日玉上人の號を贈られたのであります。乙御前の母は佐渡が島へ遙々聖人を訪ねたに就て、出家はして居らんけれども、日妙上人の號を贈られた。形が坊主であつてもものらくら

上人號の賞賜

忠吾、忠次の護衛

市が坂岩窟の療治

坊主では感心出来ない、頭を剃らぬでも精神さへ其處にあれば宜しいのである。四條金吾が出家しやうとする時分に、日蓮聖人は之を止められて「何も頭を剃らぬても宜しい、俗人の儘法華經の爲にお盡しなさい、宮仕を法華經と思召せ、頭を剃つてどうする」と言はれた。何も坊主が悪い譯ではありませぬけれども、さう云ふ形式的の事でない。工藤吉隆は小松原の法難に斃れたので、俗人の儘、その志は酬いられたのであります。國家で言へば金鷄勳章とか大勳位を贈るやうなもの、日蓮聖人は日玉上人の御名を以て之に報いたのであります。それからこの吉隆の家臣に北浦忠吾、忠次と云ふ二人の兄弟がりましたが、其の二人が日蓮聖人を助けて、さうして清澄山の方にお送りしたのであります。其の途中に於て小湊から一里ばかり北に當る所の、市が坂といふ所に岩窟があります。此の市が坂の岩窟に於て日蓮聖人は疵の療養をせられたのであります。さう深い疵ではなかつたのでありますけれども、眉間に三寸の疵と云ふのであります

すから、斬り所が悪い、その儘何處へ行くことも出来ませぬから、市が坂の岩窟に這入つて療治を爲さつた。併し疵は癒えても生涯その痕を残したので「瘡痕を印す」とありまして、生涯日蓮聖人の眉間には遭難の疵が残つて居つたのであります。

景信の狂死

一方東條景信の方は、日蓮聖人が叱咤せられたと謂ひますが、その光景はどうでありますか、馬から落ちてそれから熱病を發しまして、日ならずして狂ひ死に死んだのであります。これは恐らくはさうでありませう、日蓮聖人のやうな正義を主張する人を罪も無いのに暗殺しやうと謀り、兎にも角にも眉間に傷を附けたのであり、加之鏡忍房を殺し吉隆を殺した罪としては、景信は安々生きて居る譯には參りませぬ、これは思ふより靦面にのたうち返るやうな苦みを受けて、如何にも法華行者を迫害した佛罰の恐ろしさを示して、彼れは死んだに相違ないと思ひます。

南條氏への消息

法華實況の聖訓

この時の法難の有様は、遺文録に依りますと、一層壯烈に現はれて居ります。これは南條兵衛七郎殿御書でありまして、餘り法難後時日を経過しない時に書かれた御手紙であります、其の終の所に出て居ります。

今年も十一月十一日安房國東條の松原と申す大路にして、申酉の時數百人の念佛者等に待ちかけられ候て、日蓮は唯一人十人ばかり、ものゝ要にあふものは僅かに三四人也、射る矢は降る雨の如し打つ太刀は電光の如し、弟子一人は當座にうちとられ二人は大事の手にて候、自身も斬られ打たれ、結句は命に及びたりしが、いかに候ひけん撃ちもらされて今まで生きて侍へり。いよいよ法華經の信心こそまさり候へ。第四の卷に云く、此經は如來の現在すら猶ほ怨嫉多し、況んや滅度の後をや。第五の卷に云く、一切世間怨多くして信じ難し等云々。日本國に法華經よみ學びする人これ多し。人の妻とらばひぬすみ等にて打はらるゝ人は多けれども、法華經の故にあやまたるゝ人は

日蓮が弟子
日蓮が弟

一人もなし。されば日本國の持經者はいまだ此の經文にはあはせ給はず。唯だ日蓮一人こそよみはべれ、我不愛身命但惜無上道是也。されば日蓮は日本第一の法華經の行者也。もしさきにたゞせ給はゞ梵天、帝釋、四大天王、閻魔大王等にも申させ給ふべし。日本第一の法華經の行者日蓮房の弟子也とならせ給へ。よも芳心なき事は候はじ。但し一度は念佛、一度は法華經となへつ、二心ましまし、人の聞にはばかりなんどだにも候はゞ、よも日蓮が弟子と申すとも御用ゐ候はじ、後にうらみさせ給な。

斯うあります。實に日蓮聖人の文章は適切痛快であり、法難の光景は此の文章を読めば分るのでありますが、終りに止めがさしてある。日蓮の本當の弟子であるならば、當り前ならば地獄へは行かぬけれども、何か名前でも混線して地獄の帳簿が間違つて、閻魔大王の所に引張り出されても「太郎兵衛、お前は何をして此處へ來た」と云ふ時分に、「私は日蓮聖人の弟子旦那である」と、斯う言へと云

地獄の道
を塞ぎぬ

ふ。さうなれば閻魔大王が冠を取つて「これはこれは失禮を致しました」と云つてお辭儀をすると云ふ。これは一ヶ所や二ヶ所に言うてあるのではない、日蓮聖人は至る處に之を言うて居られる。日蓮が弟子旦那と名乗つて行けば、閻魔大王の前へ行つても、決して無禮な取扱は爲さらぬと云ふ、それは餘程強い信念である。面白半分や冗談でさう云ふことを言ふのではない、佛様の方に行けば優遇されるのは當然であるが、間違つて地獄へ行つても、日蓮の弟子旦那と名乗つたならば、決して不都合の事はさせぬ、それだけ日蓮の行動は地獄にまで響き渡つて居ると云ふことを信じて居る、えらい事でありませぬ。或は無間地獄の道を塞ぎぬと云つて、日蓮が先きに行つて門を閉めて、地獄へは、やらぬと云ふやうな勢がある、之を唯だ文章と見ずして、宗教的の信念を加へて讀んだならば、燃ゆるが如き精神が活躍して居るのであります。日蓮が弟子旦那と名乗つてお出でになつたらば、決して粗末な取扱をされるやうな事はない、「よも芳心なき事は候はじ」

とある、芳心と云ふのは、親切にして呉れる事でありまして、例へば戰場などに
 行つて不自由で困つて居る時に、聯隊長なら聯隊長が懇意の者であつて、さうし
 て聯隊長から軍曹か何かに添書か名刺でも貰つて行つて御覧なさい。『お前は何
 だ』私はこの方の紹介です』と云つて聯隊長の名刺でも出さうものならば、『ウッ
 さうか、此方へ這入れ』忽ち優待される。閻魔大王が『其奴を捕へて来』と云
 つた時に、『私は日蓮の弟子旦那でございます』と云はうものならば、閻魔大王『ハ
 ハッ』と平伏してしまふ。所がそれは一心に法華經を信ずる者の話であつて、一
 遍は念佛を唱へ、一遍は法華經を唱へると云ふやうな二心があつてはいかぬ、『二
 心ましまして人の聞くに憚りなどだにも候は』——此處が大事な所です、『あ
 なた何宗ですか』と人に問はれた時分に『私は法華經を信心して居ります』と云
 ふのは一寸工合が悪いナンと云ふので、『イヤ私は別に宗教と云ふものは知らな
 い』それでもあなた統一閣に行くぢやないか』イヤあれはその……行くと云つて

二心を誠
む

旗色鮮明

も一寸通り掛つたから寄つたのです』そんな事ではいかぬと云ふ、これは現今の
 代には最も良い薬であると思ふ。若しさう云ふ風にして人が聞いては耻かしいと
 か云ふやうな事で、發表する事を避けたり、時々は念佛も唱へると云ふやうな事
 をして居つては、日蓮が弟子だと云つても駄目だ、それは現世に活動する時分に
 日蓮主義を標榜する事を耻らうて『君は日蓮主義か』と云へば『イヤ日蓮主義ぢ
 やない、僕はモット広い』なんと言ふ、さう云ふ者は閻魔大王の前に行つて日蓮
 の弟子だと云つても、『貴様は偽者だ』とやられてしまふ。如何にも此の教訓が生
 生として居ります。

南條書の
要點

これは即ち十二月十三日に南條氏に賜はつた御遺文の一節でありまして、南條
 氏の病を搞うて、さうして信仰を勧められたのであります。この中に就ていさ少
 し詳しく申したい事がある。

釋迦如來
の三徳

法華經の第二の卷に、釋迦牟尼如來の主師親の三徳と云ふことが説いてある、

佛を忘るの罪過

小松原の刀杖

一八四

釋迦如來は我等の爲に師匠でもあり、親でもある、主人でもある（無論これは精神的に言ふのであります）其の尊い主師親三徳の佛を打忘れて行くこと云ふことは、大變不都合な事であるといふことを十分お説きになりました、それから假令この法華經を千部萬部寫したり、一念三千の觀法をやつたりしても、法華經の敵を見てそれを攻むる事をしないならば、何の利益もない。例へて見れば朝廷に仕へる人が十年二十年御奉公をしても、君に敵なす者が現はれた時に、それを取つて押へることもしないやうな者であるならば、左様な者は何の褒美も貰ふことが出来るものでない、法華經に仕へると云ふ事は、法華經の敵が現はれた時には、其の法華經の主張に敵する者を打碎くと云ふことをしなければならぬ。一體人は悪いと云ふ事が事實表面に現はれて居る事は誰でも分る、人を叩くと云ふ事が善いか悪いかと云ふことは、面倒に教へなくても分る、泥棒する事が善いか悪いかと云ふことは、澤山教へなくても誰でも知つて居る、併し善い事だと思つて間違つて

小善に付
起す
大惡を

居る事は、教を立てる上に大いに注意すべき所である。「善はたゞ善と思ふほどに、小善に付て大きな惡を起すことがある」——これが面白い事でありませう。これは日蓮主義の大いに説かねばならぬ所でありまして、小善な善い事をする積りで大きな惡い事をするといふ事がある。それはどう云ふ事を指すか、例へば社會主義にしても、社會救済と云つて互に親切を盡し合ふと云ふことは惡い事ではない、併し個人々々の親切を知つて、國家の恩惠を忘れるのは、惡い事になる、個人が相盡しさへすれば、政治も國家も法律も要らぬと云ふ、個人が親切にすると云ふ善の爲に、國家の大善と云ふものを破つて居るのであります。或は妻子を可愛がる爲に親を忘れる、妻を愛するといふ事は善いけれども、女房に親切な爲に親を忘れる、それはいかぬ。其の善い事とそれから他の大きな善い事との關係と云ふことに於て人が迷ふ、思想問題と云ふのは畢竟それである。思想問題に就て、泥棒をするが善いか、忠義をするが善いかと云ふやうな問題は別に起らぬけれど

小松原の刀杖

一八五

も、小善に付て大惡を犯すことがある、それは大いに注意すべき事である。さうして又國を知らなければならぬ。これは此の御文章にもある通り、橋てさへも所が變ればからたちになる、心のない草木すらさうであるから、心ある人間と云ふものは、所に依つて變化するものである。殊に日本には法華經が適すると云ふことは、彌勒菩薩の文と云ひ、又多くの人が皆さう言つて居る。されば必ず教を弘めると云ふには、國を鑑みて弘めなければならぬ。彼國によりし法なればとて必ず此國にもよかるべしとは思ふべからず。宗教を立てる者が、斯う云ふ考をはつきり言うて居るのは、實に少ない事でありませぬ。外の國に宜かつたからと云つて、日本にもその儘宜しいと云ふ譯にはいかぬ、日本は日本の國に適する教を取らなければならぬ。今頃そんな事を言ひ居る人は少しあるけれども、日蓮聖人は六百年の昔に於て、

法は必ず國をかながみて弘むべし。彼國によりし法なればとて、必ず此國

にもよかるべしとは思ふべからず。ビチツと簡單明瞭に道破されて居る、これ以上に言ひ方はありません、實に明晰なる主張である。

さうして念佛宗などの議論は、日蓮聖人が研究せずして言ふのかというところではない。

法然、善導等が書置きて候ほどの法門は、日蓮は十七八の時より知りて候き。この頃の人の申すもこれに過ぎず。

これは慢心して言ふのではありませぬ、日蓮聖人の學問見識の一切から見たならば、實にこれは當然の事である。さうして今頃の念佛者がどう斯う言つても、善導、法然が云ふたより變つた事はない、そんなものは何だと云ふ勢であります。それから、

結局は法門は、かなわずして寄せてたゝかひにし候也。

實に面白い、思想法門の議論では逆もかなはぬから、大勢でワーツと寄せて喧嘩をして来る、腕力で叩きつけてしまはうとするのである。

念佛者は數千萬かたうど多く候也。日蓮は唯だ一人かたうどは一人もこれ無し。今まで生きて候は不可思議也。

而してこの次に續くのが、前(九頁)に掲げました所の、

今年も十一月十一日安房國東條の松原と申す大路にして云々。

と續くのであります。

斯くして日蓮聖人は國を鑑みて法は弘めなければならぬ、法然、善導等の議論は十七八歳にして十分に知つて居ると云ふことを斷言しました。これも上の空で言ふのではありませぬ。責任を帯びて明言するのであります。是等は能く味はなればなりませぬ。日蓮聖人が徒に十七八と云ふのではない、ちやんと十七八の時に自分が研究して、鎌倉で大阿と云ふ和尚に會つて十分研究を盡した、所が

念佛者は多勢

夙に其の非を看破す

結局詰らないものであつたので、それを捨てたのであります。

この當時念佛は餘り偏頗な事を言ふ、日蓮聖人は餘り激しく言ふというので、天台一流の坊さん達は、先づその中間を取つて「そんなにやかましく言はぬでも宜い、法華も佛教、念佛も佛教、皆宜しい、そんな偏頗な事を言はぬでも宜し」と云つた、その時に日蓮聖人がそれに酬いた言葉があります。丁度これはこの時分に言つた事でありますから一寸申加へて置きます。これは「題目彌陀名號勝劣事」と云ふ、題目と念佛の勝劣に就て書いて居られる御文章で、この時分の御著作であります。

念佛と法華とは一體の物也。されば法華經を讀むこそ念佛を申すよ。念佛を申すこそ法華經を讀むにては侍れと思ふ事に候也と、斯の如く仰せらるゝ人、聖道の中にあまたをはしますと聞ゆ。

聖道とは、天台とか眞言とか云ふことであります。念佛無間と云ふことは餘り激

名號の勝劣

權實雜亂を誡む

し過ぎる、又法然のやうに法華經を嫌はぬても宜い、斯う云ふやうな事を今でも
やはり學者は言ひます。

随つて檀那も此義を存じて、日蓮並に念佛者を嗚呼がましげに思へる也。

淨土もいかぬ、日蓮もいかぬと云ふ。それに對して日蓮聖人が酬いた言葉は、

先づ日蓮が是程の事を知らぬと思へるははかなし。

此の一言であります、そんな事を考へずに日蓮が此の法華經の傳道に従事したと
思ふかと、酬いたのであります。好い加減な事を言ふ人には、私は何時でも此の
文章を引いて酬いてやるので實に痛快である。

佛法漢土に渡り初めし事は後漢の永平也。渡りとゞまる事は唐の玄宗皇帝開

元十八年也。渡れるところの經律論五千四十八卷譯者二百七十六人。其の經

經の中に南無阿彌陀佛は即南無妙法蓮華經也と申す經は一卷一品もあはしま

はざる也。(中略)妙法蓮華經は能開也。南無阿彌陀佛は所開也。能開所開

法華經は
能開

を辨へずして、南無阿彌陀佛こそ南無妙法蓮華經よと物知がほに申し侍べる
也。日蓮幼少の時、習ふところの天台宗眞言宗に教へられて、此義を存じて
數十年の間ありし也。是れ存外の僻案也。(中略)是れこそ謗法となる根本に
て侍べれ。

斯うあります。決してそらで言ひ居るのでもなければ、考が無くして言ひ居るの
でもありません、すつかり考へて熟した思想を以て徹底的に戦つて居るのであ
る。

九 龍口の法難(上)

一昨日御
書

一昨日、見參に罷入り候の條悦び入り候。抑も人の世に在る誰か後
世を思はざらん。佛の出世は専ら衆生を救はんが爲なり。爰に日
蓮比丘と成りしより旁々法門を開き、已に諸佛の本意を覺とり、早く

龍口の法難(上)

出離の大要を得たり、其の要とは妙法蓮華經是れなり。一乘の崇重三國の繁昌、儀眼前に流る、誰か疑網を貽さん哉。而るに専ら正路に背いて偏へに邪途を行ず、然る間聖人國を捨て、善神願を成し、七難並び起つて四海閑かならず。方今世悉く關東に歸し、人皆土風を貴む。就中日蓮生を此の土に得たり、豈に吾國を思はざらん哉。仍つて立正安國論を造つて、故最明寺入道殿の御時、宿屋の入道を以て見參に入れ畢んぬ。而るに近年の間多日の程、犬戎派を亂だし、夷敵國を伺ふ。先年勸へ申す所、近日普合せしむるもの也。彼の太公の股の國に入りしは、西伯の禮に依り、孤良の秦の朝を量りしは、漢王の誠を感ずればなり、是れ皆時に當つて賞を得たり、謀を帷帳の中に圖らし、勝を千里の外に決せし者なり。夫れ未萌を知る者は、六正の聖臣也、法華を弘むる者は、諸佛の使者也。而るに日蓮悉くも、鸞嶺越林の文を開いて、鴉王烏瑟の志を覺とり、剩へ將來を勸へたるに、粗ば普合することを得たり。先哲には及ばずと雖も、定んで後人には稱なる

文永二年、日蓮聖人御年四十四歳、此の年少し御病氣があつて那須野の温泉に

べきもの也。法を知り國を思ふの志、尤も賞せらるべきの處、邪法邪教の輩、譏謔言するの間、久しく大忠を懷いて、未だ微望を達せず、剩へ不快の見參に罷入ること、偏へに難治の次第を愁ふるもの也、伏して准みれば、泰山に昇らずんば、天の高きを知らず、深谷に入らずんば、地の厚きを知らず、仍つて御存知の爲に、立正安國論一卷之を進覽す。勸へ載する所の文は、九牛の一毛なり、未だ微志を盡さざるのみ。抑も貴邊は當時天下の棟梁也、何ぞ國中の良材を損せん哉、早く賢慮を回らして、須らく異敵を退くべし、世を安んじ國を安んずるを、忠と爲し、孝と爲す矣。是れ偏へに身の爲に之を達せず、君の爲め佛の爲め神の爲め一切衆生の爲めに言上せしむる所也。

文永八年九月十二日
謹 上 平左衛門尉殿
蓮

(一昨日御書)

野州總州
の宣教

天變地天

三位日行
と法門可
申鈔

龍口の法難(上)

一九四

お出でになりましたが、御病氣は直ぐ平癒いたしましたので、下野から上總、下總の方に亙つて彼方此方御布教をなされました。此の年の八月十七日に至つて大地震がありました、又十二月に至つては彗星が出現して、而も毎夜引續いて出ると云ふやうなことで、天變地妖並び臻ると云ふ有様でありました。

翌文永三年、聖人四十五歳の時に至りまして益々布教を盛んになさつて、弟子の日行と云ふ方は法華經を京都の方にお弘めになるやうになりました。日行と云ふ人は中々偉い方であり、辯論の達人な人でありましたが、京都の方に行つて布教するのに、餘り折伏では法華經が弘まらぬから、日蓮聖人のなされ方は少し強過ぎる、自分は柔かに法華經を弘めて見やうと云ふやうな事を申しまして、又京都に行つた爲に少し思想も變化を生じまして、今申せばハイカラ坊さんのやうになりました。その時に日蓮聖人が之を誡められたる所の御文章をお遣はしになりました、法門可申鈔と云ふ表題で御遺文の中に現はれて居りますが、それはど

釋尊中心
と三徳有
縁

う云ふ事を書いて居られるかと申しますれば、法華經を弘める者は飽までも釋迦牟尼佛を中心にして、釋尊の三徳有縁と云ふこと——釋迦如來が吾々の精神的の主師親、即ち主人であり師匠であり親である、宗教と雖も此の節義を忘れてはならぬ、宗教の通弊として他人も自分の親も同じやうな感じを有つたり、廣く者を愛するのだから差別があつてはならぬ、一切平等ちやと云ふやうな事ばかり言ふけれども、其處に迷を生ずるのである。人間親を持つて生れた時には、自分の親が少々馬鹿でも仕方がない、太郎兵衛の子はやはり太郎兵衛に對して孝行をしなければならぬ、一つ氣の利いた親を極めてやらうナンと言つて、勝手に親を取替へることは出来ない。田舎から出て來て居る女學生が、阿母さんが國から來て東京見物するのに、一緒に廻るのは體裁が悪いと云ふ、親の方は田舎者であるし、自分はハイカラ女學生であるから、電車に乗つても一緒に道連れでないやうに、知らぬ顔をして横を向いて居ると云ふやうな事は、是は最も悪い事である。私は

龍口の法難(上)

一九五

犬などを見て非常に感心することがある、穢ない乞食見たやうな人が犬を飼ふ、すると其の犬は、自分の主人が檻褸を纏うた乞食見たやうな風をして居つても、其の人が来い〜と言へば、喜んで尾を振つて飛んで行く、どんな立派な紳士であり淑女であると云ふやうな人が、来い〜と言つても振向きもしないで、穢ない乞食のやうな者でも自分を養つて呉れる者の方へ飛んで行く、彼處に如何にも清い所の徳性が現はれて居る、人間は愧づべき所があると、私は時々考へるのであります。日蓮聖人が法門可申鈔に於て言はれたのは、この意味であります、遺文録六百二十頁を御覽になれば、その事が詳しく説かれてある、佛敎を學んで釋迦牟尼佛の三徳を忘れて、他の佛なり菩薩なりに心を寄せると云ふことはいかぬ、この點を極力主張せよ、其處に割引をしたり、匙加減をしたり、人の顔色を見たりしてはいかぬ、日蓮の門弟が法華經を弘めると云ふのは、此の釋尊の主師觀三徳を高調力説するにあると示されてある。

今日は日蓮聖人の弟子が皆さう云ふ事をやらなくなつてしまつて、何を中心にして法華經を宣傳して居るのか、旗色が頗る不透明なことになつて居る、惑れむべき者であります、彼等は何を學んだのでありますか、日蓮聖人の御遺文をどう讀んだのでありますか。さうして此の御書の終りに至つては、更に國家の問題を説きになつて、日蓮の敎を弘むる者は、唯だ超越的な宗教の事ばかり言つてはいかぬ、現實の國家と結び付けて考へて行かなければならぬと仰せられて居る。それは立正安國論に於て仰しやつたが如くに、國が亡び人が滅びてしまつては、佛敎が何處に存するか。どうかすると云ふと宗教家は己れの敎に忠實ならんが爲に、國家を忘れ、人生を忘れる、さう云ふ者が澤山ある。其の宗旨が弘まり、法が弘まりさへしたならば、國家とか生ける人と云ふ者を眼中に置かない、それが爲に色々間違つた事を捏ね出して、斯う言うた方が宗旨が盛んになる、斯う言ふた方が都合好く發展すると云ふやうに、商賣でもするやうな積りて、宗教を弘める者

がある。宗教は商賈ではありませぬ、人の爲なり、國の爲なり、求めるものにあらずして與へんが爲に、宗教と云ふものは起つて居るのであります。寺を建てる爲でもなければ、宗派を拵へる爲でもない、そんな譯のものではない、それは其の教を信ずる者が集まつて寺が出来たり、團體が出来れば、教と云ふものは求むる所があるのではない。であるから國家が衰頹する、人々が不幸に陥ると云ふのを餘所に見て、宗旨を弘めても何にもならぬ。故に日蓮の教は立正安國である、正しき法を立て、國を安らかにする、此の意味を飽まで主張しなければならぬと云ふことを、お示しになつたのであります。

それから翌年文永四年、聖人四十六歳、此の歳八月十五日に至つて聖人の御母清原氏、即ち梅菊女は御死去なされたのであります。前に一度歿られたけれども、聖人の熱誠なる御祈念に依つて蘇られて、それから四年の壽命を保つて文永四年に死なれたのであります。此の時に日蓮聖人は非常に母の死を悲まれた、聖人は

母の逝去
哀憫

既に四十六歳になつて居られるし、又一方には大きな法の戦を始め居られるけれども、母の死と云ふことに就ては聖人の心は非常な感動を受けて、哀悼措かずと云ふ有様でありました。聖人が母を懐はれる精神の事は、御遺文の中到处に現はれて居る。親鸞上人などは「親の爲に一遍も念佛申さず」ナンと言つて、それを誇のやうに言つて居るが、それはどう云ふ意味で言ふにしても、言草が悪い事でありませぬ、俺は親の爲に一遍も念佛言はぬと云ふやうな事は、如何に其の解釋が巧み出来ても不可ぬ。日蓮聖人などは「母を思へば涙抑へ難し」と仰せられた、實に忠孝の倫理と云ふものを極力主張して居るのであります。其の最も能く現はれて居るのは、刑部女房御返事でありまして、遺文録の一九八八頁に説かれて居る御文章であります。

父母の御恩は今初めて事あらたに申すべきには候はねども、母の御恩の事殊に心肝に染みて貴くおぼえ候。飛ぶ鳥の子をやしなひ地を走る獸の子にせめ

母を思ふ
聖訓

られ候事目もあてられず、魂もさえぬべくおぼえ候。其につきても母の御恩
忘れがたし。

と言つて母の恩をズツと説かれる。父母の恩の辱けない事は今更新らしく言ふま
でもない事であるが、其の中に於て殊に母の恩最も重しと云ふ事を言はれる、類
が無いこととあります。お父様の方が有難い〜と云ふことは、誰でも言ふので
ありますが、母の恩最も重しと云ふことを言はれるのが、日蓮聖人の大切な所て
あります。是は大事なこと、是から後に婦人問題がやかましく起りましたも、
婦人の権力であるとか、政治上の参政権であるとか、職業の上にて男子と競走
すると云ふやうな事は、時代の進歩に従つて進んで行くのは、止むを得ぬ事であ
りませうけれども、今日日本に於て婦人の立場を明かにするには、どうしても
母の恩と云ふものゝ大切なる事を力説すれば過ちが無くして、さうして婦人は實
際の幸福を得るのであります。私は常に言ふのである、婦人一生の幸福と云ふも

母の恩と
婦人問題

子婦人と孝

のは、産んだ子が母を大切にしていけるか、して呉れぬかと云ふ一事で岐れるので
あります、親不孝の子が出来て、阿母さんなどは何でもない者だと云ふやうな事
を言出したら、其の母親は總ての幸福と云ふものは奪はれてしまふのでありま
す。一生懸命骨を折つて大きくした所の子供が「母親ナンと云ふものは借物だ、
腹は借物だ、何でも無いものである」ナンと云ふやうな事を言ひ出したならば、
母の立場と云ふものは無いのであります。故に日蓮聖人は「母の恩殊に重し」と
云はれる、それから尙ほ段々懐妊中の親の苦勞、生れてから子供の間、世話して
呉れた事、すべて母親の手に依つて成長したと云ふ母の恩を詳細に説いて、其の
終りの所に斯う云ふ工合にお書きになつて居る。

親は十人
の子を養人

親は十人の子をば養へども、子は一人の母を養ふことなし。
母親は十人の子を産んでも、貧乏であつても其の十人の子供を世話をして、母親
は十人の子供を大きくするほどに可愛がつて心配をするけれども、其の十人の子

供が寄つて一人の母親をさへ養ふのを邪魔にすると云ふやうなことになるのである、此の言葉は實に子が親に對する所の心得を教へられた大事な教訓であります。斯くして日蓮聖人は阿母さんの死に際會して非常な哀慟を爲さつたのであります。

大師講と
師恩

同年の十一月二十四日に至りまして、天台大師の爲に大師講と云ふものを營まれたのであります、之を恒例として生涯日蓮聖人は十一月二十四日に大師講と云ふものを營まれました。身延にお這入りになりましたも、身延に初めて小さな草庵が出来た時に、祝典を開かれた事を書かれた地引御書にも、一番初に天台大師の事を仰せられて居る。

身延草庵
創立の聖訓

坊は十間四面にまた廂さして造りあげ、二十四日に大師講並に延年、心のごとくつかまつりて、二十四日の戌亥の時御所に集會して三十餘人をもつて一日經書さまいらせ、並に申酉の刻に御供養すこしも事ゆゑなし。坊は地びき山

づくりし候しに、山に二十四日一日もかた時も雨ふる事なし。

普請中は幸に雨天もなく、二十四日掛つて御草庵が出来上つた、立派な普請では二十四日位では出来ぬけれども、地均しから一切で二十四日掛つて草庵を造り上げた、其の間一日も雨降ることなく二十四日に出来上つたから、直ぐお祝に二十四日に大師講を營んだと、お書きになつて居る程、日蓮聖人は天台智者大師の御恩の忝けない事を記念せられて居つたのであります。或る法華の坊さんは、天台智者大師なんて何だ、天台とは引繰返つて居る事か、天台の「てん」の字は顛倒のてん(顛)の字だらうと、云ふやうな事を書いて居る。それは偉い學者のやうに言つて居るが飛んでもない學者である、さう云ふものではない。日蓮聖人は天台智者大師より優れたる教義を發揮せられて「彼は迹化、此は本化」と云ふことは間違ないけれども、師の恩と云ふものを忘れずに記念なさると云ふことは、洵に大事な教訓になつて居るのであります。其の事を適切にお書きになつて居るのは、身

天台を嘲
けるの愚

延御書であります。

實に佛になる道は、師に仕ふるには過ぎず。妙樂大師の弘決四、云若有弟子一見師過者、若實若不實其心自壞。失法勝利云云。文の心は、若し弟子あつて師の過を見れば、若は實にもあれ若は不實にもあれ、已に其心有るは身自ら法の勝利を壞り失ふ者也云云。

即ち師匠に對する恩を心得ると云ふことが、佛道修行の中には最も大事なことで、假令師匠は少々悪い事があつても、師匠の科を擧げて之を毀けると云ふやうな事はいけな。誤解した人間は、悪い事を悪いと云ふのは正直ではないかと云ふやうな事を言ふ人があるが、それは皆間違つて居る。儒教の方でも「子は父の爲に隠し、父は子の爲に隠す、直きこと其中に在り」と云ふ、其の直いと云ふのは人間の直情と云ふ、本當の人間の道徳性と云ふものは、親の悪口を言つたり、師匠の悪口を言つたりするやうな事の出来るものでないのである。眞直でありさへすれ

師恩深重の聖訓

ば宜いと云ふやうな事で、親を裁判所に訴へたり何かして、親の方が悪いのだから……と云ふやうな事を言つたり、或は苟にも「俺は別に産んで呉れとも言はぬのに、親が勝手に産んで、子供の時分は着物を着せたり何かして玩具にしたのである。綺麗にして人の中に持つて行つて、私の子はこんなに綺麗だと云つて自慢する爲に玩具にしたのである、學校へやつたのも自分が年取つた時分に子供に養つて貰はうと思つてやつたので、ナニ親だつて別に有難いことはない」と云ふやうな事を言ふ人がある。私等の知つて居る相當の教育を受けた人でもさう云ふ事を時々言ひます、冗談で言ひ居るのかと思つて、少し此方から優しい顔をして段々聴くと云うと、冗談ではない、本氣で言つて居る。「私は産んで呉れと言つた覚えがありませぬ、親が勝手に産んで置いて、さうして今になつて孝行をせよと云ふやうな要求をするのは、不都合です」と云ふやうなことを言ふ、それは人間の清い徳性が濁ると云ふと、さう云ふ間違つた事を言ひ出すのであります。故に

雪山善財の芳園

習はぬ經は讀めぬ

日蓮聖人は身延記に於て、極力師匠の恩と云ふことを説かれて居る。縦し師匠に缺點があるにしても、さう云ふ事を世の中に言ふ者は、必ず現在にそれだけの報を受ける、其の代り師匠に對する恩義を思ふてやるならば、必ず其の中に法の勝利と云つて勝れたる利益が、師匠に對する恩義を思ふ中に自ら含まれて居るものである。さうして雪山童子が半偈の爲に身を捨てた因縁を擧げ、又善財童子が色善知識を訪ねて廻られた、是は華嚴經に二十卷にも亘つて説いてある事であり、非常に立派なお方であります。世間にも「習はぬ經は讀めぬ」と云ふことがあつて、何事でも師匠がなければいかならぬ事でありませうけれども、殊に佛法と云ふやうな大きな事になりますと、師匠様が無かつたならば、どうしても本當の信仰と云ふものは得られないのである。餅は餅屋と云ふことがあるから、餅を擣くのもやはり餅屋の方が上手である、それは素人でも少し巧者ならば骨折つて擣けば擣けぬ事はない、巧くは行かぬけれども擣ける、けれども佛法の教と云

法の勝利

檀王の千歳給使

ふやうなものを、餅つくより易い事のやうに思つて、俺が親て俺が極めたと云ふやうに言つて居る者が大分澤山あるが、殊に法華宗にはそれが多いのである、色書いた物を私の所などにも寄越す者がある、豪さうに色々を言つて大行者見たやうな事を言ふけれども、それは皆餅の擣き損ひであつて、逆もうまく行かぬ。故に諸君が書物を讀まれるのも宜いけれども、説教演説を聴かされると云ふ事が一番捷徑である、一番間違ない事である。教は聞かなければならぬ、其處にはどうしてもお師匠様が要るのである、故に其の師に據りさへしたならば、全く法の勝利と云つて勝れた利益を得られるものである、提婆品を見ても、師匠を求むるが爲に王様が鼓を撃つて、さうして阿私仙人と云ふのに仕へて、或は山に行つて薪を取り、水を汲み、身を以て敷物の代りにしてまでも、眞の法を求むるが爲の故に苦勞を厭はなかつた事が、提婆品に出て居る。師匠に對する場合に於ては、如何にしても其の恩は報ぜられぬ位のものであつて、一句の法を教へて貰つた恩

を百年千年兩方の肩に脊負つて御奉公をしても、其の恩には報いられぬものでありと云ふ程に、日蓮聖人は説かれて居る。此の精神を以て、天台智者大師に依つて、自分は法華經の有難い意味合が分つて、更に天台以上の教義を開發せられたけれども、併し天台智者大師の法華玄義、文句、止觀、之に依つて聖人の法華經觀と云ふものも、大いに助けられて居るが故に、生涯天台智者の恩を忘れぬやうに、大師講と云ふものを營まれたのであります。

天台の教理と日蓮主義

又天台智者大師の教義は日蓮聖人と違ふ所があるけれども、永久に日蓮主義と天台の教理の關係と云ふものは、密接なるものであるを忘れてはならぬ、日蓮聖人は本尊の中に、南無天台大師、南無傳教大師として、永久に安置せられて居る。然るに法華の坊さんでありながら、天台とは頗大ぢや、引繰返つて居るのであると言ふは大間違である。併し教義上に於ては又本化獨特の見地を忘れぬやうにして行かなければならぬ、是は文永四年十一月二十四日初めて大師講を修せられて

漢原寺の新築日頂の得度

より、恒例として最後臨終の前年に至るまで、日蓮聖人は之を守られたのであります。

それから此の年に上總の漢原氏が寺を建てました、是は此邊に於て日蓮主義の寺が建つた中で最も早い方でありませう。それから日頂と云ふ方が得度をせられた、後に六老僧の一人になられますが、是は彼の乙御前と云ふ方の兄弟であります。それは後年日蓮聖人を佐渡が島に訪ねて行つた婦人があります、これは富木殿の後妻になられた人で、日頂上人と云ふのは其の婦人の連子であります。大變に偉い方でありませうから、年は行かなかつたけれども、六老僧の一人に加へられた。聖人滅後弘安七年、聖人の三回忌の時に、鎌倉に法論があつて日頂上人は其の法戦に當つて居つたが爲に、三回忌の法要に出席が出来なかつた。其の事を富木殿が大いに怒つて勘當をしたと云ふので、泣銀杏の因縁と云ふことを言ひます、日頂上人が銀杏の樹の下で悄悄と泣きながら、此經難持を讀んで、銀杏の樹をグルグ

泣銀杏の傳説

ル廻つて居つたと云ふやうな事を言ひますが、そんな事はあつたか無かつたか分らぬ。それを大變良い事のやうに言つて、師匠の恩と云ふものは重い、法論は何時でも出来る、聖人の三年忌は再び来ないからと云つて、富木殿が怒つて勘當したと云ひますが、私は信じない。法戦と云ふことも大事なことで、惟ふに日頂上人が泣銀杏の下で泣いて此經難持を讀んでグル／＼廻つたナンと云ふことは、技巧に過ぎた話で、是は嘘だらうと私は思ふ。師匠の恩を説くならば、そんな事を言はないでも、前に言つた通りちやんと日蓮聖人は立派な教訓を與へられて居る。さうして其の御恩報じと云ふことは、年忌に出席するとかせぬとか云ふ位の事ではありませぬ、師匠の御恩を忘れぬやうにして行くと云ふ事は、日蓮聖人の精神を繼いで行さへすれば宜いのでありますから、法戦と云ふ事が軽くて、此の年忌の法要に出席するのが重いか否かは、一個の問題であります。斯様な傳説を餘りに誇大する必要はない、あつても宜しいけれども、そんな事は無くても宜しい、

モツと理義鮮明なる事を以て日蓮主義は將來發揚するやうに、私は希望するのであります。私が今述べつゝある日蓮聖人の正傳は、現在の思想に鑑みてハテをかしいなと云ふやうな事は、一つも言ひませぬ、そんな事は言はないでも日蓮聖人の光は十方に輝いて居るのであります。泣銀杏の因縁を語らんければ、日蓮主義は師匠の恩の話が出来ぬと云ふことは、少しも無いのであります、そんな事はどうでも宜い。又日頂上人が叱られて勘當されたからと云つて、泣いて銀杏の樹の下を廻る程の人でもなからう、そんな事で彼れ此れする人は決して眞に六老僧に選ばれる人でないと思ひます。又六老僧に選ばれた人が僅か二年経たぬ内に富木殿から勘當されると云ふ、富木殿は何でありますか、如何に偉いからと云つても、六老僧は日蓮聖人に代つて一般を統率する人である、それを勘當すると云ふ権利はない。斯様な詰らぬ事を言うて行き居ると、彼方へ行き當つたり此方へ行き當つたりして駄目であるから、そんな事は軽い事として置かれるが宜しいので

蒙古牒狀の到來

牒狀の文意

あります。

翌文永五年に至りまして、日蓮聖人が御年四十七歳、即ち八十九代龜山天皇の御宇であります。此の間の正月十八日に於て、初めて蒙古の牒狀が日本に來たのであります。其の牒狀と云ふものは、文面は穩かのやうであるけれども、要するに其の趣旨は、日本が大元蒙古に對して臣下の禮を取つて貢をしない限りには日本の國を襲ふべきの由を、告げて來た所の書面でありませう。大分長い文書でありませうが、其の中の主として引掛つて居ると思ふ所を、少し抜抄して見ませう。是は既に朝鮮を攻取つた後に寄越した書面であります。

高麗の君臣は、咸く載せて來朝す。義は君臣なりと雖も、歡は父子の若し。朝鮮の方はモウ大元蒙古に對して貢を持つてやつて來て、其の關係は君臣であるけれども、大切に可愛がつてやるから、實際は親子のやうな有様だ、計るに王の君臣も亦已に之を知らん。高麗は朕が東藩なり、日本は高麗に密

邇し、開闢より以來亦將に中國に通せんとなす。朕が躬に至つて一葉の使無く、以て和好を通ぜず、尙ほ恐らくは王の國、之を知ること、未だ審らかならざるか。

日本は朝鮮に近い所であるから、此の間まで高麗と云ふ國は獨立して居つたけれども、大元の爲にやられて屬國になつて居ると云ふことは、既に御承知であらう、今では高麗と云ふものは、此の大元の東の隣になつて居るのである。日本は高麗に近い所であるのみならず、昔から日本は支那に對して頭を下ぐべき關係に居るものであつて、時には貢をしやうと云ふやうな事もあつたのである。然るに自分の世になつてからは、一遍も使が來ない、又一遍も貢も持つて來ない、是は恐らくは大元蒙古の勢力と云ふものを未だ御承知がないのであらう——「審らかならざるか」と云ふことは、非常に意味のある事で、此の大元蒙古の勢力がどう云ふものであるかと云ふことが、本當に膽に染みないのでありませうと云ふやうな、

牒狀に對する處置

嫌な威し文句を並べてやつて來たのであります。之に對して問題の起りましたのは、鎌倉に於ても京都に於ても、此の手紙に對して返事をやるべきか、やるべからざるかと云ふこと、即ち返牒の有無、それから此の使節を斬るべきか、生かして還すべきかと云ふ問題であります。そこで一統の役人に對して意見を徴した所が、各々意見が區々になつて極らぬ。京都に於ては公卿の會議が開かれましたけれども中々極らぬ、併し大體は返牒はやらぬ、使は殺さないうて還すと云ふことに、京都の意見がなつて居りました、鎌倉の方もやはりさう云ふ考でありました。そこで此の使と云ふのが、九州の筑前の博多の少し向ふの今津と云ふ港に上つて來たのであります、其の今津に滞在して居ります所の使と云ふものは、每晚其處等の地理を調べまして、一々それを圖面に作つて、他日日本に戰に來る時の準備をして居つたのであります。其の事は八幡愚童記と云ふ書物に出て居る。是は元寇の役の事を書きました有力なる参考の書物が二つあります、一つは竹崎季

元寇の態

元寇の參

八幡愚童記の記録

長と云ふ人の書いた繪巻物と、一つは此の八幡愚童記と云ふものが有力なる参考書である、それに續いて第三の参考書と云ふものは、日澄上人の書かれた日蓮註畫讚が有力なる参考書になつて居る。其の第二の有力なる参考書である八幡愚童記に、此の時の光景が書いてある。

その牒使等(牒狀を持つて來た使)夜々見めぐりて、筑紫の地理、船津、軍庭(軍をする場所)足懸(船から兵隊を上げる揚陸地點)逃路(負けた時に陣を退く場所)等に至る迄、ことごとく圖し、又あいあふ人のやうすを相し、(さよろりさよろり日本の奴はどう云ふ人間かと云ふやうな事を見る)所のあないをしるしなどして、(彼方此方何か印になるやうな物を建てたり何かして)諸事はかりすまして返りけり。此のち來ける使どもも又々しかしけり。

此の後に云ふのは七遍使が來て居ります、文永十年に於て初めて戰に來ますが、文永五年からそれまで七回も使を寄越して居るが、どの使も唯だ來て歸つたので

元使來たる前後七回

ない、皆日本の地理を研究し、人情を研究し、軍備を研究し、戦の準備をして歸つた。

外寇の警告

斯う云ふ牒狀が来て上下騒いで居る頃に、日蓮聖人は「安國論由來」をお書きになつて、法鑿房に與へられました。其御文章に據れば、既に是まで色々天變地妖があり、それに就て日蓮は立正安國論を作つた、是は必ず他國侵逼難と云つて、他の國から日本の國が襲はれるやうな事がある、ウカ／＼しては居れない、それに就ては國民の精神を鍛え上げ、法を正しくし、國の軍備を整へて行かなければならぬと云つて上下に警告を與へた、それは文應元年の事である、今より數ふれば既に九年前に方つて日蓮聖人は其の事を言つて居る、何の爲に日蓮は立正安國論を書いて、日本の國が危いぞと云ふ警告を與へるかと云へば、是れ偏に國士の恩を報ぜんが爲なりと、仰せられて居る。唯だ佛教が有難い／＼と云つて、佛教の效能ばかり教へる爲に日蓮聖人は働いたのてない、國士の恩と云ふものを報じな

社會救済と貧民の暗味

ければならない、假令耶穌教をやらうが、佛教をやらうが——耶穌教をやつたら基督が有難いとか、佛教をやれば佛教ばかりが有難いと思つては駄目である、國士の恩と云ふものを日本人は忘れてはならない。是は日蓮聖人の偉い所でありませす。今でも救世軍なども社會事業をやつて洵に結構であるけれども、どう云ふ考へやつて居るのであるか、何時ぞやも「日本國をブースに献ず」と云ふやうな旗を樹つて、救世軍の信者が新橋のステーションに出て居つたが、どう云ふ意味で書いたか知りませぬが、縁起の悪い事を書いたものである。歳暮に五十錢ばかりの餅を貰つて、五十錢でさう云ふ縁起の悪い事を書くやうになつては駄目である。救世軍が餅を呉れると云ふ、其の錢は彼の往來の鍋へ入れた錢である、其の錢は誰が入れたか、即ち日本の國家の擁護の下に商工業を營んで得た錢ではないか。それが分らないで、救世軍が餅を持つて來て來れる爲に、如何にも神様は有難い、ブ

律國賊の
意義

イスは有難い、基督は有難い、日本の國家は何も呉れない——と斯う言ふ、五十錢の餅でスツバリ大和魂を賣つて國家の感恩を忘れる、安いものである。さう云ふ人間が居るか居らぬかと云ふことは、調査して御覽なさい、幾らでも居る、五十錢の餅で國家を忘れるやうな馬鹿者が出來居るのであります。さう云ふ事は一つの社會事業であるから宜いやうに見えるけれども、併し日蓮聖人は律國賊論を叫んだ、其の當時の律宗は何をやつて居つたか、良觀房を初めとして、或は行倒れの人間を助けてやつたり、癩病人の世話をしてやると云ふ、社會事業をやつて居るけれども、内には勤王の大義を忘れ、外は蒙古の來襲に對しても備ふる所がない、唯だ貧乏人が可哀相だと云つて小さな社會事業を以つて道徳なりと考へて、勤王の大義を忘れ、國家の興廢を忘れて居るから、其處で律國賊と云ふことを言はれたのであります。然るに六百年後の今日未だ日本人がそれが分らぬでは、餘りに遲鈍であります、唯だ阿彌陀様が有難い、ブリスが有難い……そんな事はか

四恩の報
答

亡國と破
法

り言つて居つては駄目であります。

佛教徒は必ず四恩に報答すべきであります、佛恩の忝けない事は勿論であるけれども、同時に國家の恩を忘れてはならぬ。尙ほ此の事は「安國論由來」にはつきり仰しやつて居る、日蓮が何故國家の事を大事だ——と言ふかと云へば「若し此の國土を毀り壞たば、復佛法の破滅も疑ひ無きものなり」——國が滅びて教が存すると云ふことは決してない、出來損ひの宗教家は、國は滅びても宗教は滅びない、國家などの興廢に就ては宗教家は深く意に介するに足らぬと云ふやうな事を言つて居るが、日蓮聖人は此の日本の國土が破壊されてしまつたならば、佛法も必ら破滅に終るべきものである、東洋が勢力を失つて東洋の文明が破壊された時には、お釋迦様は黒ん坊だ、佛教ナンと云ふものは下らない偶像教だ、こんな木像なんと云ふものは棄てしまへと云つて、彼等が勢力を得ましたならば佛像を溝の中に投捨て、經卷を足下に踏み躪り、東洋の文明を以て野蠻なりと叫ぶに

灰色の學者

偉大なる東洋の文明

違ひないのであります。其の場合に國は滅びても教さへ存して行くなら宜いと云ふやうな事を言つて居つたならば、必ずや東洋の文明はやられてしまふのであります。私は氣の利いたハイカラの議論は良くないと思ふ、日蓮聖人が日行を誡められた中に、お前は少しハイカラになつて、鳥にもあらず獸にもあらず、蝙蝠學者者と云ふは貴様の事だと云ふことを書かれたが、今の日本の或る人が氣の利いたやうな事を言つて、日本を思ふやうな思はぬやうなサツパリ譯の分らぬ事を言つて居るのは、鳥にもあらず、獸にもあらず、蝙蝠學者である、さう云ふ灰色と云ふやうな旗色不鮮明な頭の人が今日は大分多いのである。モツと男子らしく、立派に東洋の文明を吾々は擁護しなければならぬ、東洋の文明を破壊されてしまひ、日本の國土を破壊されてしまつて、何處に吾々の存在する意義があるか。私は日本が破壊され、東洋の文明が破壊される位ならば、其の前に東洋の人間の生命は皆犠牲にすべきものであると云ふことを斷言します。東洋には西洋に勝つた

東洋文明を擁護せよ

十一通の警告

立派な文明がある、彼等は自惚れて居らうけれども、西洋よりも超絶したる偉大なる宗教、偉大なる哲學、偉大なる道徳、偉大なる文明が、東洋には確にある。此の東洋を破壊せんとする者があるならば、吾等は悉く生命を抛つても之を擁護しなければならぬ。兎にも角にも日蓮聖人が、此の國土をば壊り毀たば復佛法の破滅も疑無きものなりと云ふ斷定を下された所に、非常に力がある事を信する者であります。さうして飽までも、國家の恩を報ぜんが爲に、日蓮聖人は安國論を書いた事を、茲に再び繰返されたのであります。

之を法鑿房に與へたのみではない、續いて八月には、宿屋光則に對して書を送つて、此の安國論の精神を再演し、十一月には執權時宗に書を送り、又十一ヶ所の相當な政治家及び宗教家に十一通の御書と云ふものをお書きになつて、一々國家が大切である、又人心を鍛える所の教と云ふものが大切である、ケチな了見を以て一宗一派に拘泥してはいかぬ、神聖なる教と真正に國家を擁護する決心とを

鍛え上げなければならぬと云ふことを言はれた。

又日蓮が弟子檀那に對しては、此の正義を打立て、國家を擁護するが爲には、皆身命を的に懸けて掛らなければならぬ、我が日蓮の教は居睡り半分に念佛を言うて居るやうな陰鬱なる退嬰的なる宗教ではない、生氣ある活動を以て國家の爲め人生の爲に報いるのであるから、先づ己れの生命を擲つことは、初より覺悟すべき事であると云ふことを以て、弟子信者に對しては非常な強い所の書面をお送りになり、さうして今申すが如くに警告をお與へになつて居りましたが、此の年の内に奥州津輕の方に行つて居つた北條の代官安藤五郎と云ふ者が蝦夷人の爲に殺害されて、蝦夷の方は鎌倉の政令を奉じないと云ふ叛逆を起すに至つたのでありませう。故に日蓮聖人は當時慨嘆せられて、蒙古は西に動き蝦夷は東に叛く、我が國の狀態を見るに内憂外患並び至つて居る、我が國家の爲に警戒すべきは今日である、一步を誤れば此の大切なる日本の國家は覆没を免れないと云ふことを

以て、極力上下を警められたのであります。

斯の如くにして既に文永五年に初めて蒙古が参りましたる時からして、日蓮聖人は警告をお與へて居られたのであります。此の蒙古來の事は最も明かにして置く必要があるのであります。日蓮主義は外の宗教と違つて、背景に國家の存亡と云ふ大事を控へて、さうして殊に蒙古來と云ふ國難を控へて打立てたる宗教でありますから、奈良の都に櫻の花を眺めて「今日九重に匂ひぬる哉」で居睡り半分にやつて居る所の宗教とは違ふのである、又厭世悲觀の精神に捉はれて、唯だ南無阿彌陀佛々々々々と唱へて居るやうな宗教とは違ふのである。日蓮主義は此の日本の興廢存亡を脊負つて立つ所の愛國の精神に燃え出た所の宗教であります。丁度今日の日本はそれである、宗教であるからと云つて居睡り半分になつたり、詰らない言葉の葛藤を繰返して居つてはならぬ、道徳の方からも政治の方からも、宗教の方からも經濟の方からも、有ゆる方面から國民の精神を鍛上げて、

立派な愛國的の熱情と云ふものを鼓舞作興しなければならぬ時であります。今は人心が誠に輕佻浮薄に流れて、宗教でも唯だ利己的なる精神を満足せしむるやうな宗教のみ盛んである。故に今日の時代と日蓮聖人の時代とは、日本の國勢が全く酷似して居るのである。今日日本は非常に順調のやうに見える、金が出来て大變勢が好いやうであるけれども、世界の動いて居る有様はどうであるか、蒙古が来て日本の國が危うかつたのと、世界の動いて居る有様は、日本前途は如何であらうかと云ふ、此の國家の興廢に關する場合と云ふことに於ては、日本開關以來、日蓮聖人の時と今日と二度である、是は丁度同じ有様である。そこで蒙古來の事は、一層明かにしたいと思つて色々の書物を調べて見ました、中々面白い問題でありまして、材料も澤山にある事がありますが、其の中の要點を述べませ

50 大體日本に押寄せて來た蒙古の勢力と云ふものは、どんなものであつたかと云

ふことを知らなければ、話が身に染まぬこととありますが、此の蒙古と云ふは元黒龍江の上流オノン河の畔、即ち今露西亞の領分になつて居るバイカル湖の東南の方に棲んで居つた遊牧民であります。併し非常に慍悍な人種でありまして、馬に騎ることが上手で戦に強い、而も酋長の命令には絶対に服従して行く所の民族であります。此の酋長の中に鐵木真と云ふ者が出ましたが、是が不世出の英雄でありました、それは日本の方では丁度源家が亡びまして、北條時政が政治を代つて執つて居りました、北條の一番初の頃であります。其の頃に此の鐵木真と云ふのが非常な勢力を得まして、蒙古の部族全體から推されて、蒙古の王様になつて成吉思汗と稱しました、(是は「じんぎすかんと讀んで居る人もありますが、那珂博士の蒙古語に依つて訂されて居る所に依りますと、「ちんぎすかがん」と云ふのださうであります)此の成吉思汗と云ふ蒙古語の意味は「強大なる君主」と云ふことで、非常に大きな帝王になると云ふ意味であります、是が非常に豪い人物

でありまして蒙古全體を統一したは無論の事、其の兵力を以て有ゆる方面に擴大されて行くのであります。さうして蒙古の兵隊の強かつた事と云ふものは、到處敵なしであります。元來慍悍なる民族であるのに、其の兵隊の組織が非常に立派であつたと云ふことで、陸軍の戦術家が研究して居る發表に依りますれば、此の蒙古兵の組織——兵制と云ふものは、近世の兵制にすつかり類して居るのである。軍隊組織は非常に進歩して居たものである、男子悉く兵と云ふことも無論でありまして、屯田兵の組織になつて一人も兵隊でない者はない、それで有力なる精兵の平生備へられて居る数が九萬五千人あり、其の九萬五千人の精兵をして先づ支那の方に這入つて、黄河以北の北支那を襲ひまして、全部之を自分の版圖にしてしまひました。さうして南支那の方は抛つて置いて、今度はズツと中央亞細亞の方に進みまして、今日の亞細亞土耳其の邊を侵略し、南露西亞の地——今露西亞領の半分位を征服しました、露西亞の都の莫斯科も此の時蒙古が古領し

て居ります。斯う云ふ風に非常な勢で發展しまして、要するに東の方は日本海の沿岸から、西の方は黒海から匈牙利、地中海に至るまで侵略して居ります。又支那の方に於きましても、最初は南支那は除いて居りましたけれども、後には全部之を併せ、印度を征服しまして北天竺と云ふ方は殆どやられて居ります、今申せば波斯から亞細亞土耳其、更に匈牙利から獨逸の境の所まで版圖を擴げました。今の獨逸の王様が東洋人が怖い——と云ふのは、此の時の事を言ふのであります。黄禍と書いて居るのは是であります。此の鐵木真即ち蒙古王が侵略して參りましたやうな、亞細亞同盟をやつて、日本が其の主人になつて亞細亞人を復活させたならば、必ず再び此の勢力を造つて世界を征服すると云ふことを以て、彼は怖がつて居るのであります。さうして其の畫を見ると釋迦様の繪を描きまして、それが惡魔にしてある、惡魔が毒氣を吐いて、美しい獨逸人や西洋人の女が澤山居る所に、東洋の惡魔が毒氣を吹いてやつて來て、西洋の女が皆弱つて居る畫を

描いて、之を黃禍と名けて、小學校でも何處でも、獨逸の王様は教へさして居るのであります。黃禍と云つてお釋迦様を中心人物に出して居る、却つて佛教徒や日本人はボケて居るのであります。彼等は左様な事を臆面も無くやつて居るのである、日本で耶蘇教の批評でも少し言うたならば大變氣にするけれども、それ所ぢやない、彼等こそお釋迦様を惡魔として、それが毒を吹いて西洋の婦人が皆醉はされて居るやうな畫を描いて、之を黄色人種の禍と名けて學校で教育するやうな事をやつて居るではないか。外國に遠慮するにも程がある、此方が喧嘩をし掛ける必要もないけれども、彼等のやり方が餘りだから、少しは考へて掛らなければならぬ。

其の當時の蒙古勢と云ふものは、斯う云ふ勢力を占めて參りまして、其の雄姿世界を壓する有様でありました。唯だ高麗は後に征服をされましたので、北條泰時の頃に至つて純然たる屬國となつたのであります、初め南支那の方が餘喘を保

つて居つたのは、當時蒙古が北支那の宋朝を征伐する爲に、南支那の漢民族——宋朝に反對せんとして居つた民族と結んで、是と力を協せて北支那の宋を滅ぼした爲に、蒙古も暫く南方支那の存在を許して居つたのでありますけれども、併し何時までも蒙古王は之を許して置くものではない、此の南支那をも征伐して支那全部を占領しやうとした、さうして見ると茲に眼障りになるものは日本であるから、之をやつつけなければならぬと云ふので、先づ南支那を征服すると同時に、其の降参したる兵隊をも連れて弘安の役の時には大舉日本を襲うたのであります。併し今は未だ文永の役でありますから、南方支那が獨立をして居る時であります、此の時に日本へ使を遣はしたのは、此の鐵木眞の孫に當る所の忽必烈と云ふ王でありまして、是が帝位に即いて國號を元と改め、都を今の北京に奠めて之を大都と稱して居つた。此の忽必烈は非常な豪傑でありまして、どうも地圖を披いて見ると、日本が眼障りになつて仕方がない、之に鐵槌を加へなければならぬ

と云ふので、第一回の使を文永三年に出した、それは高麗の王に命じて、日本へ其の旨を通じると云ふことになりましたが、海上の危険に遇ひまして——此處は所謂玄海灘を控へて非常に海の荒れる所でありますから、高麗の王様の使は途中でやつて來たけれども、風に出會つて引返してしまつた。所が元の王忽必烈が非常に怒つて、「如何に風が荒いからと云つても行けぬ事があるかッ、再び行け」と云ふので、第二回の使節が參つたのが、前に申す文永五年の閏正月十八日、太宰府に手紙を持つてやつて來たのであります。そこで此の時は返牒は與へない、使だけは生かして還すと云ふことになりました。此の蒙古の使が來た事に就ては、北條時宗がしつかりして居つて巧くやつたのだと云ふ説もありますけれども、併しサウは限らぬのであります。時宗が一人てやつたのではない、京都の朝廷に於ても中々確乎した考があつたのであります、其の事は宋元軍談と云ふ書物に據りますれば明かでありまして、時宗ばかり豪いやうに云つて、京都ではブル／＼顛

へて居つたやうに謂ひますけれどもサウではない、宋元軍談には斯うあります。後宇多の帝の御宇、鎌倉の北條時宗執權たりけるが、異國の使の趣を朝廷に奏聞す、朝廷やがて公卿僉議ありけるに、諸卿各々曰ひけるは、異國の使を追回さんこと屢なり、今度も亦空しく還さば、異賊必ず襲來るべし、されども北胡は今、あらたに起るの時なれば、恐くば由々敷大事ならんかとして、評議區々なりけるに、何某の大納言の仰せけるは、我朝神孫の降臨より以來、日月と共に不窮の國たり、豈異域の爲めに削られんや、たとひ賊軍襲ひ來るとも、合戦の成敗は、天照大神の神慮に任せ奉り、好を醜虜に通ずる事は、決してあるべからず、早く胡人の使を斬るべしと曰ひければ、朝議これに一決して、其趣を鎌倉に下知し給ふに、時宗命を受け、直に元の使を誅し終り、異方に信を絶つことを明白に示しけり。是は後の時ではありますけれども、朝廷では顛へて居つたが、時宗が勇猛果斷で

政村と時宗

元の使を斬つたのだと云ふことは間違つて居る、即ち某大納言の發議に依つて、天照大神様の神慮に委せてやると云ふことに議が決した次第であります。斯様な次第でありまして、兎に角其の時は中々日本人も皆眼醒めて居りましたが、殊に日蓮聖人は今申すやうに激しい警告を與へて居られた。北條の方に於ても政村と云ふ人が執權でありましたけれども、西域の事穩かならぬ時であるから之を罷めさして、年の若い元氣な時宗が執權職に就いて、さうして日本でも之に對する準備をさ／＼怠りなくやつたのであります。忽必烈は第二回の使の歸らない内に早くも高麗の王様に命を發して、日本征伐の爲に大小の船一千艘を造り、それに糧秣を備へて戦争の準備をせよと云ふことを命じ、又色々の人を派遣して日本の沿岸の水路調査をやらせた、九州の上陸地點などの調査は、餘程精密にやりましたのであります。其の間使節を送ること前後七回でありまして、第二回は文永六年、第五回は文永八年に來ましたが、共に日本人を捕へて歸りまして國情調査の參考

蒙古我が國情を調査す

に供しました、即ち氣の利いたやうな奴を捕へて行つて、日本の國は軍備をどう云ふ工合にして居るかと云ふやうな事を聴きました。さうして第五回と第七回の時には有名な超良弼が使になつて參りましたが、此の人は見識のあつた人でありますから、日本に滞在する事四ヶ月、其の間色々研究しまして、日本征伐は、見合せになつたら宜からうと云ふ意見書を復命致しました。其の文章が現存して居りますが、斯う書いてあります。

超良弼の意見

臣日本に居ること歳餘（是は永く居つたと云ふから、此の方が本當かも知れませぬが、日本の歴史では四ヶ月位とある）其の民の俗を觀るに狼勇にして殺を嗜み、父子の親、上下の禮あるを知らず（人殺しのやうな事ばかり好きで、非常に強さうな事を言ふガムシヤラ共で、父子の禮儀も君臣の禮儀も知らない）其の地山水多く耕桑の利無し（耕やすことも桑を作ることも出來ない、山ばかり澤山ある）其の人を得るも役すべからず、其の地を得るも富を

加へず、況んや舟師海を渡るに海風期無く、禍害測る莫し、是を有用の民力を以て無窮の巨壑を填むと謂ふ。(大切な民の力を以て、限りもない深い谷の中に物を埋めるやうなもので、日本征伐は駄目です)

斯う云ふ事を言つた。是はどうしてこんな悪口を言つたのかと云ふことに就て、段々研究者の議論を聞くと、是は悪口でない、彼はサウ思つたらうと云ふことである。それは彼の時分の日本人は、毛唐人が神州の土地を踏むのは、日本の穢れだと云つて、一寸でも彼等が上陸しやうとすると刀を振廻して打斬ると云ふやうに、夷狄と云ふものは日本の土地を踏むことを許さぬ、斯う云ふ譯であるから、彼等の眼には極めて殺伐な人間と見えたと違ひない、又太宰府の地形は、彼の邊にお出でになつた人は御存知であらうが、彼の邊はどつちを向いても屹兀たる山ばかりであるから、是は日本などを取つても駄目だと考へたので、一概に嘘を吐いたのではない。故に忽必烈も之を聞いて、成程サウ云ふ譯かと耳を傾けたので

神州男兒の敵愾心

翰林旨王盤の意見

ありますけれども、元來戰の好きな人であるから、如何に山ばかりでも、荒つぽい人間でも構はぬ、やつつけなければ氣が濟まぬと云ふのと、既に高麗の王に準備を命じてあつたから、今になつて止める譯に行かぬ、どうしても是は日本を攻めに行くこと云ふ考を定めたのであります。併し向ふには他にも之を止めた人もあります、趙良弼以外にも、翰林旨王盤と云ふ、學問の方の役をして居る人も諫めて居ります、それは宋元軍談にあります、趙良弼より少し此の方が立派な事を言つて居る。

翰林旨王盤諫めて申しけるは、日本は東海の孤島なりと雖も、開闢以來王統を變ぜず、武備尖くして外夷竟に、侵すことを得ずと聞けり、其上大軍を貌たる海外にさし向け、假令勝つとも治守すること難し、若し勝たざる時は、萬里の外に援兵を發せんこと、又急に調ひがたからんか。

故に戦は止めになつたら宜からうと云つて居る。けれども忽必烈は中々思ひ止

まらない、尤もそれは一方頻りに勧めた方の者があるので、明のハイカラ坊主が勧めた事もあつたらしい、それは何の書物に出て居るか知りませぬが、笹川臨風先生の『日蓮上人』傳には、明僧趙彝と云ふ者が忽必烈に對して日本をお討ちなさいと云ふことを煽て居る、さうして忽必烈が威張つて日本征伐をやらうと云つて居る時の有様が、面白く書かれてある。

如何にも其承はれ。我が太祖成吉思汗、黒水の上流斡難、克魯倫兩河の邊より起り給ひ、乃滿の太陽汗を破り、回紇を併せ、西遼を滅し、花刺子模を平げ、高加索の連山を越え、還りて西夏を滅し、金を侵して大帝國を創め給ひしより、つゞいて太宗窩濶台汗は金を滅し、高麗を征し給ひ、從兄拔都汗は五十餘萬の大軍を將ゐて遠く阿羅思、匈牙利、波蘭、埃太利に攻め入り、東はカクサルテス河より西はカルバシヤ山脈の間の地を領して此に金黨國を建て、其兄幹魯朶は白黨國を創め、朕が兄上憲宗蒙哥汗は三道より宋を攻め

給ひ、弟旭烈兀汗はバグダツドを攻め、アツバス朝を滅し、シリアに進み、天方を攻め取り、伊蘭汗國を建つ。朕躬ら遠く大理、吐蕃を伐ち、宋を征し、位に即て遂に宋を滅して中原を一統し、蒙古の領土は東、高麗より西は黒海に至り、北はキルギス曠原を併せ、南は南洋には及べるぞ。日は蒙古の領土より昇りて蒙古の領土に入る。見渡す限り、王土にあらざるはない。古より以來斯程に大なる帝國の又とあるべきか。しかはあれども邊土遠境間々未だ皇化に浴せざるところもあらん。斯る所は容赦なく討ち平げてくれん。物共意ふところはあらざるか。

と言つて酒を飲んで忽必烈が威張りました。其の時に趙彝と云ふ坊主が出て来て、恐れながら申上げ奉る。

と言ふ、何を言ふかと思つて耳を傾けて居りますと、
普天の下王土に非ざるはなく、率土の濱王臣にあらざるはなきに、只一つ目

觸りになりまするは、あの東海に孤立致しまする日本と申す小島、いや掌上の芥子粒ほどの小國では御坐りませぬども、今以て貢物もよこさせぬ。是れ一つには皇威の爲にも可惜一點の汚點。又一つには彼國、取るにも足らぬ小國にてはあれど、金銀財貨は山と積み岡と重なるほどに饒かに御坐ります。傳へ聞く所に依れば、其小島の國王の宮殿は黄金を以て屋根を葺き、黄金を以て床を敷き、堀には水銀を湛へ、人々珠玉を升もて量るほど所有致すとやら承る。かほどの國を取ることは赤子の腕をねぢるよりも容易う御坐ります。陛下の御威光を以てすれば、鎧袖一たび觸るれば、東夷畢竟馬前の塵と覺えまする。

と云ふ調子で立板に水を流すが如くスラ／＼と喋べつたから、忽必烈がすつかり乗氣になつた、斯う云ふ風に盛んに煽つた連中があつたに違ひない、是は拵へ事ではない、笹川臨風君は歴史家でありますから、詳しく調べて書かれたのであり

ませう。諫めた者もあつたけれども、要するに日本を攻めると云ふことに決心が定まつたので、文永十一年三月の頃から愈々高麗の南部に兵を集中しました、先づ朝鮮の南の方の日本に近い方に兵隊を集めまして、大小の船九百艘と云ふものに兵隊を載せて、十月三日に合浦と云ふ所から出發した。合浦は馬山浦の附近でありまして、今の鎮海湾の一部であります、即ち日露戦役に露國のバルチック艦隊を全滅します根據地が此の鎮海湾でありました。六百數十年を隔て、露西亞の艦隊を撃破する日本の海軍根據地、其處が此の文永の役に於て日本が攻められる所の蒙古勢の船を整へた地點であります、歴史の關係は不思議なものであります。日本も、明治天皇が在して維新の宏業が成立つたからこそ、露西亞のバルチック艦隊を撃滅することが出来たけれども、若しうっかりして居つたならば、此の日露戦役と雖も日本は非常な後悔をしなければならなかつたのであります。蒙古の精兵と云ふものは非常に立派なものでありまして、それに漢民族の軍隊

と高麗の兵隊とを加へて参りましたので、文永の役にも總勢二萬九千七百人、モウ三百人を加へますれば三萬人に滿つる所の多勢の兵隊を連れて來たのであります、司令官は忻都、副司令官は洪茶丘と云ふ人で、攻撃の目標は太宰府に向つて來たのであります、併し初めから太宰府へも來られませぬから十月五日の午後對馬に到着致しまして、六日から上陸をして對馬全島を悉く攻撃致しました。其の爲に對馬の軍隊も、其餘の人民も悉く殺戮されました、敵は對馬に滞在する事七日間、又準備を整へて十月十四日に壹岐の島に侵入を致しました、さうして此處でも兵隊及び人民は悉く全滅されました、兩島民の慘殺せられざる者はなかつたのであります。其の時の光景はどう云ふ有様であつたかと云ふに、是は註書讀が最も能く書いて居ります。日本は近來外國から侵略された事がない爲に、日本人の精神が緩んで居りますから、此の時の悲惨な光景は能く人民に知らせるが宜いのであります。

同じ年の十月五日卯の刻に、對馬の國府八幡宮の假殿の中より、大火焔出づ、國府の在家の人等焼け亡ぶかと思はるに幻なり、是れは何なる事ぞと澆る處に、同き日申の刻に、對馬の西佐寸の浦に異國の兵船四百五十艘に三萬餘人乗て寄來る。六日の辰の尅に合戦す、守護代資國等、蒙古を伐取ると雖も、資國が子息等悉く伐死す。同き十四日に壹岐の國へ押寄せ、守護代平内左衛門景隆等、城廓を構へ防ぎ戦ふと雖も、蒙古亂れ入る間景隆自殺す、二つの島の百姓等、男をば或は殺し或は擒ふ、女をば一所に集め手を徹して舷に結び付け、虜にする者一人として害せざるは無し。肥前の國松浦黨數百人伐たれ虜らる、此國の百姓男女等も壹岐、對馬の如し。同き十九日の辰の刻に筑前の博多、箱崎、今津、佐原へ寄來る。同き二十九日の辰の尅に東郷入道覺忠、子息三郎左衛門景資、大友出羽守直泰、大友次郎左衛門重秀、難波二郎在助、菊池次郎康成總じて九國の兵集つて戦ふ、故に死する者相枕す。

斯の如くになりました、それは非常な目に遇つたのであります。日本の人は戦をした事が少ないから、殊に女の人などは戦の苦しみを知らぬのである、國の恩を知らぬで歳暮に五十錢の餅を貰つて國家を忘れるやうな馬鹿者があります。今世紀の波は蒙古が襲うて來た時より、モツと波風は荒いのであります、非常の時ではありません。然るに日本人は自分の利益ばかり考へて國家ある事を知らぬ、宗敎家は平凡なる理窟に捉はれて國家なんぞ何だナンと言ふ馬鹿者が澤山出來て居る、全く日蓮聖人が由井が濱邊に彼等の頸を斬らずば日本國危ふしと言はれた如く、頸を刎ねべきやうな腐敗をしたる者が殖えて居るのであります。斯くして日本の兵隊は中々戦ひましたけれども、戦は殆んど相手にならぬ位で非常な酷い目に遇ひました。さうして敵は勝に乗じて十九日に筑前の今津に殺到致しました、此の時敵は一部を今津に上陸させて今津を占領させ、主力は二十日の未明から博多の西の方の早良郡の沿岸に上陸を開始致しました。敵はどうしても博多に攻め入つ

て太宰府を乗取らうとしまして、其の時日本軍も之を邀へ撃ちましたが、其の戦は非常に激烈なものでありまして、二十日の夜明けから戦が始りまして、竟に日が暮れても戦は決しなかつた、此の頃の戦は今と違つて弓矢でやるのであります。が、日本の兵隊は多くは飛込んで行つて刀で斬合ひますから所謂白兵戦であります。す、而もそれが夜明から日が暮れても決せぬと云ふのは、非常な激戦であります。向ふもどうしても上陸してやらうと云ふ決心、此方も之を揚げては大變だと云ふのでありますから、夜に入つて何方も疲れて相引きに退いたのであります。勝敗は無いのであります。所が不思議な事には此の夜暴風雨が起りまして、彼等の兵船が餘程澤山沈没を致しました、さうして殘軍も之に恐れて悉く引上げてしまつたので、夜が明けて見た所が、昨日は林の如くにあつた所の船が一艘も居らぬと云ふことで、日本軍も呆氣に取られた譯なのであります。是は文永の役でありますが、弘安の役は是から見ると未だくえらい事で、十四五萬騎の兵隊を連

れて來るのでありますから、是位の事で忽必烈が弱る譯はありませぬ、此の時はどう云ふ譯で退却したかと云ふことは、不思議な問題になつて居るのであります。色々説がありますが、戦が非常に激しかつたのと、其の夜の風が酷かつたのとて、中々是は一通りではいかぬ、縦し是で上陸しても日本の方にも相當兵隊が居るから、モツと戦備を整へてやらなければならぬと云ふやうな事であつたのであります。何れにしてもさう云ふ譯で戦は非常に激しかつたのであります。此の激戦の光景に就きまして、八幡愚童記に書いてあることは、中々愉快であります、それまで日本は鐵砲と云ふものを知らない、此の時初めて鐵砲を打たれて吃驚したと云ふやうな事が書いてあつて面白い。

蒙古は太鼓をたゝき、どらをして打て開をつくる事をびただし、日本の馬共これにをどろき、をどりはねくるうほどに、馬をこそあつかへ、敵に向はんとする時のをくれけるうちに、射かけらる、蒙古の矢は短かしといへども矢の根に毒を

ぬりたれば當程のもの毒氣にまけずと云事なし、かくて敵より數百人矢さきををそへて雨の如く射ける上、鉾、長柄、物の具のあき間をさしてはづさず、一面に立ならびて寄る者あらば中をあけて兩方のはしを、まはし合て取籠て打ちうち取る、甲はかるし、馬は能く乗る、力はつよし、命はたがわず、豪勢勇猛自在きはまりなく、よくかけ引せり、大將は高き所にあがりて、引べきには逃鼓を打ち、駈べき時には攻鼓をならし、それにしたかひて振舞へり、其の引時に鐵砲とて鐵丸に火を包て烈しくとばす、あたりてわるゝ時四方に火災ほどはしりて、煙を以てくります、又其の音甚高ければ心を迷はし、きもをけし、目くらみ耳ふさがりて東西をしらずなる、これが爲に打るゝ者多かり。此の光景に就て陸軍歩兵少佐竹内榮喜と云ふ人が、史蹟調査の方で新研究として發表せられて居るものがありますが、是にも此の時の戦は大變激戦であつたと云ふことが書いてあります。

抑々刀槍弓箭を使用する昔の戦は、近距離に於て敵と戦を開くが故に、現今の戦の如く遠距離より銃砲を以て交戦するものとは大に趣を異にし、其戦鬪の経過は概ね迅速にして勝敗も早く決するものが常である。我國著名の野戦に就て一二の例を擧げんに、元龜元年六月二十八日姉川の役は織田の南軍約三萬、淺井の北軍約二萬の兵力なりしが、戦は午前五時に始まり午後二時に終り、慶長五年九月十五日關ヶ原の役は徳川の東軍約七萬五千豊臣の西軍約八萬なりしも、戦は午前八時頃より午後二時半頃迄の間にて、兩役ともに約半日間を以て勝敗の結を告げた。銃砲を使用したる近世の大戦と雖も、日露戦争以前のものは大抵一日間を以て局を結んで居る。然るに今より六百餘年以前の文永の役に於て、日本軍が少數の兵を以て朝より日没に至る迄終日戦鬪を繼續したる事實は、如何に我軍の將卒が勇猛に働いたかを察することが出来る。兩方が疲れ切るまでやつて相退になつて、敵は夜船に歸つて居る所を、激しい風

が吹いて、船が半分以上覆没したから、是は逆もいかぬと云ふので遁げ歸つた。けれども其の位の事には屈しないで、今度は大擧してやつて来るのであります。が、それは弘安四年のことでありますから、後に述ぶ事に致します。斯かる間の経過として文永六年となりまして、聖人四十八歳。此の二月蒙古の使が又來ました、さうして前に述べた通り對島の人答二郎、彌三郎と云ふ者を捕へて歸りまして、色々の事を言合めて日本の方へ戻して寄越しました。日蓮聖人は段々日本の國難が激しくなつて来るのを見て、是と同時に法華經の威力が現はれる、即ち法華經は日本の國を護る所の立派な教であると云ふことが現はれる日が来るであらう、それには一擧日本の國をして法華經の國たらしめたいと云ふ大覺悟がありましたから、甲州吉田の方に行かれて吉田口から富士山に登つて、豫て書いて置かれた法華經を埋めて、法華經廣宣流布の礎を其處に築かれたのであります、それは文永六年の二月、丁度蒙古の使が来る頃になつたのであります。

龍口の法難(上) 二四八
それから同年十二月八日に安國論後記と云ふものをお書きになりました、今まで書いて居られた安國論の後に、自分の言ふた箴言が正に的中したと云ふことをお書きになりました、是は短じかい文章であります、併し日蓮聖人の御精神の在る所が能く分るのであります。遺文録では三百九十一頁、安國論の終りに附加へて載せてあります。

去る正嘉元年八月二十三日戊亥之対の大地震を見て之を勘ふ(中略) 其の他色々天變地妖がある、外國から攻めて來ると云ふやうな事があるに就て、立正安國論を書いて日本人に大警告を與へた、然るに(文永五年後の正月十八日、九箇年を経て西方大蒙古國より我朝を襲ふべきの由牒狀之を渡す。又同六年重ねて牒狀之を渡す。既に勘文之に叶ふ、之に準して之を思ふに未來亦然るべきか。此書は徴ある文也。是偏に日蓮の力に非ず、法華經の眞文、聖の感應する所か。文永六年十二月八日之を寫す。

斯くして立正安國論の精神を更に高調せられて、飽までも日蓮聖人は法を思ひ、國を思ふ所の精神を力説せられた。是から更に進んで日蓮聖人が段々法の爲め國の爲に主張を進めて行かれるので、遂に北條は日蓮聖人を捕へて龍の口に首を斬るやうになつて參るのであります。

十 龍口の法難 (下)

太政入道が國ををさへ、承久に王位つきはてて世東にうつりしかども、但だ國中のみだれにて他國のせめはなかりき。(報恩鈔)
去る文永八年辛未九月十二日御勸氣を蒙る。其の時の御勸氣のやうも常ならず法に過ぎてみゆ。了行が謀反を起し大夫の律師が世を亂さんとせしを責め取られしにも越えたり。平の左衛門の尉大將として數百人の兵者にどうまるきせて、互ほしかけ、眼をいからし聲をあらうす。大體事の心を案ずるに、太政入道の世を取りながら

國を破らんとせしに似たり、ただ事ともみえず。日蓮これを見て思ふやう、日ごろ月ごろ思ひまうけつる事はこれなり、幸なるかな法華經の爲に身を捨てん事よ、臭さ頭をはなたれば沙を金にかへ、石に珠をあきなへるがごとし。さて平の左衛門の尉が一の郎從少輔房と申す者はしりよりて、日蓮が懐中せる法華經の第五の巻を取り出し、て面を三度さいなみて、さんざんとうちちらす。又九卷の法華經を兵者ども打ちちらして、或は足にふみ或は身にまとひ、或は板敷疊等、家の二三間に散さぬ所もなし。日蓮大高聲を放ちて申す、あら面白や、平の左衛門の尉がものにくるうを見よ、殿原但今ぞ日本國の柱を倒すと喚はりしかば、上下萬人あわてて見えし。(種種振舞鈔)

文永七年になりまして大聖人御年は四十九歳、此の年聖人の御弟子で京都の方にお出になつて居りました三位日行と云ふ方が、比叡山に登つて天台の學問をせられることになつた。それに對して十章鈔と云ふ御文章をお遣はしになりました、

是は天台の止觀に十章に分つて色々書いてあります、其の大體を評論せられた御文章であります。日蓮聖人の教が天台の教義とどう云ふ關係があるかと云ふことに就ては、この御文章は最も大事なのであります。この十章鈔には法華經の開會と申して、廣く一切の教を收め入れて、さうして用ゐるにしても、其處に一つの注意をしなければならぬ、例を以て言へば人間は色々の食物を攝つても宜いけれども、胃袋が健全でないと云うと、却つて餘り色々の物を食べたが爲に、直に腹を損ずるやうな譯で、法華經に依つて一切の教義及び思想を收め入れるにしても、それに就ては法華經の思想と云ふものを確かり心得てゐなければならぬ、是は大事な問題でありまして、法華經が時に依りますと、纒が弛んで色々間違つた事が起つて來ますが、それは開顯と云つて色々々の思想を受入れる根本の觀念が確實になつて居らぬからであります。之を國家の方の事に譬へましても、日本は廣く世界の文明を受入れて行くのでありまして、無論西洋の文明の善きを探り

悪きを捨て、進み行くと云ふことは、異論の無い事でありませうけれども、元來日本文明其ものを了解する事が足りないと言ふと、自分を忘れて、さうして却つて西洋の悪い思想に氣觸れて行くやうな事がないとは言へない。現に日本の今日の如きは、往々にして開顯と云ふことを誤つて、日本の思想を以て西洋の思想の善悪を選択して行かなければならぬのに、世界の風潮が押寄せたと云ふやうな言葉に騙されて居る。世界には悪い風が澤山に吹いて居るのである、世界の風が悉く歓迎すべき風ではないのである、然るにも拘らず自分の立場を失うて悪い思想に侵されると云ふことは、即ち在來の日本の文明を了解することが不十分であるからであります。其處で天台の學問をして廣く一切やるのは宜いけれども、縮が弛んではいけない、そこでこの御文章には、

體内の權

體内の權は體内の實に及ばず

と云ふことをお教へなされた。體内と云ふことは、色々の思想を開會して一つの

中に入れてしまつて、敵ではない、我が物である、我が物であるけれども内輪へ入れても、やはり平凡の教は平凡の意味合が其處に附いて居るものである。故に同じ内輪に入れても眞實と方便との關係と云ふものを忘れぬやうにしなければならぬ。例へば朝鮮を日本の方に併合してしまつても、全然同じ體内のものであるけれども、併し自ら神武天皇以來日本の皇室に附いて居つた所の大和民族、即ち天孫民族と云ふものは、飽くまでも日本の中心になつて行かなければならぬ、敢て差別するではないけれども、朝鮮人と同じやうに日本人が考へてはいけない。公平に物を扱つて行く中にもやはり中心と云ふものは無くてはならない。思想もやはり其の通りで、四方の思想を公平に受入れるけれども、而も日本に在來傳はつたる中心の道德、中心の宗教、中心の國風と云ふものは、大に尊重すると云ふことではなければならぬ。體内の權は體内の實に及ばず、之を忘れて比叡山で學問しても何にもならぬぞ、と云ふ警告をお與へになりました。如何にも結

構なる教であります。

それから其の外秀句十勝と申しまして、傳教大師が法華經の中に於て十箇條勝れたものをお選びになつた書物があります。それに對して日蓮聖人が意見を附加へになつて、法華經の秀でて居る所の教義を十箇條御説明になつて居る所の書物が出來ました。又此の頃になりまして愈々眞言、天台の關係を明かにして眞言天台勝劣鈔と云ふ書物が出來まして、飽くまでも法華經の勝れて居る事をお説きになりました。最初にも申して置きました通り、眞言に對する所の教義は容易にお述べにならない、又眞實の議論は佐渡に行つてから初めて仰しやるので、こゝに大事な關係があります。それは本尊に就てあります、眞言は大日如來を立てる、それが爲に天台の學者も、眞言の方に段々流れて行つたのでありますから、日蓮聖人は法華經に依つて本佛を光顯して、大日如來は眞の佛ではない、此の世界へも出いなし、夢のやうなものである、眞の佛は壽量品に於て顯本せられたる本師釋

秀句十勝

眞言、天台の勝劣

迦如來であると云ふことを力説するのであります。日蓮聖人の最後の教義は此の絶對の本佛に在りますから、そこで佐渡に行くまでの間は、此の問題を十分に書きにならなかつたのであります。大體は此の頃からして筆をお執りになりました。

良觀房の祈雨

翌文永八年になりまして、大聖人御年正に五十歳であります。この年には彼の有名なる良觀房との雨の祈に關する事が起りましたが、是が龍の口の法難にまで及んで行く近い原因を爲すのであります。この年の夏になりました。甚だしく旱魃が續いて、稻がすべて枯れてしまふと云ふやうな有様であつた時に、極樂寺と云ふ寺に居る良觀房が北條の官命を帯びて雨乞の祈をするのであります。良觀房は中々えらい坊さんでありまして、戒律堅固であつて、さうして社會事業を盛んにやつた人でありまして、或は癩病の人を助けるとか、扶養者の無い人を助けるとか云ふことで、一代の間に五萬人もさう云ふ人を助けたと云ふやうなえらい人

てあつて、生如來の如く尊敬をせられて居る。北條が尊敬するのみならず、婦人達も良觀房に歸依することは實に生如來の如くに思つて居つたのである。それに對して日蓮聖人は、此の良觀が律宗をやつて居る事を國賊と罵つたのでありますから、其の區別を能く知らなければいけない、さう云ふ善根を積む所の人間を日蓮聖人が律國賊と言はれた、良觀房は生如來のやうであるけれども、あれは法華經の精神から言ふと敵であると云ふのであります。其の意味は今日日本の國家に於て最も必要なる問題であつて、生々としたる教訓となつて居るのであります。雨乞は日蓮聖人としてしましては、さう云ふ奇蹟めいたる事を何も強いて争ふの必要はありませんけれども、佛法の邪正を知らず爲に一つの手段として雨乞の祈禱に託して、彼等は何の力も無い者であると云ふことを御示しになるのであります。其の御文章は能因法師と云ふ坊さんが歌を詠んでも雨は降つた、又泉式部と云ふ色好みの婦人が歌を詠んでも雨は降つた、だから雨が降ると云ふ事は、何もさう

能因法師
と泉式部

大したことではない。その歌は能因法師のは、斯う云ふ歌であります。

天の川　なはしろ水にせき下せ

天降ります　神ならば神

この歌を詠んで雨が降つた。泉式部の歌は、

ことわりや　日の本なれば照るぞかし

降らざらめやは　天が下には

日の本だから照るが、天の下だから雨が降ると云ふやうなことでありますが、兎に角この歌で雨が降つた。何も雨が降つたからと云つて大した事でないけれども、併し良觀が生如來などと言はれて、さうして其の雨乞には百二三十人の坊さん連れて堂々と雨乞の法壇を築いてやつて居るのである。之に参加したる坊さんも、凡そモウ鎌倉に於ける有名な坊さんは皆弟子を伴つて参加した。そこで何百人と云ふ坊さんが、一生懸命に雨乞をやつたのであります。之に向つて日蓮

良觀祈雨
の状況

聖人より
良觀への
使

聖人は使をお遣はしになりました。此の事は正史にあることで、御文章にも能く現はれて居ることであり、決して拵へ事でない。善智と云ふ山伏が岩を祈り上げると云つて上げたのを、日蓮聖人が下させなかつたと云ふやうなことで、或は善智が日蓮聖人を御招待して毒を喰はせやうとした、日蓮聖人が其の毒を犬にやつたら、犬が喰つて死んだと云ふやうなことは、之は事實無きことでありませうけれども、雨乞の話などは、そんな誣しげなものではないのであります、今御話することは其の當時の事實なのであります。日蓮聖人は使をお遣はしになつて、一尺二尺の堀が越えられない者が、一丈二丈の堀を越えることは出来まい。成程三歳や四歳の子供であつて、一尺二尺ばかりの溝があつても飛ぶことの出来ない者は、一丈も二丈もある河があつたら飛越すことは出来ないに違ひない。雨乞をして雨が降らぬと云ふやうなことは、お前達のやることは何にも當にならぬ。雨乞などは色好みの泉式部が歌一首でも雨が降るのに、何百人と云ふ坊主が汗を流

して祈つても降らぬと云ふやうなことは、お前達がやることは、一向駄目だと云ふことが能く分かるだらう。雨乞の事は小事であるけれども、之に依つてお前達のやることの駄目だと云ふことを明らかにしてやらう、斯う云ふ使であります。初めから戦ひを挑んで居てになる、向ふの腹でも立てさうな工合に、日蓮聖人の方から出てお出でになる。爾等が雨乞をして雨が降つてもそれは大したことではない、泉式部の歌一首でも雨は降るのであるから、多勢寄つて祈つて雨が降らぬと云ふに於ては、詰らぬ者だと云ふことが、能く分かるだらう、斯う云ふのであります。これが残念だと思ふならば降らして見よ、降らぬがどうだ、サア之を證據にして、法の邪正など、云ふ大きな問題は分らぬから、お前は日蓮に降参しろ、日蓮が降らぬと斯う言つたら、決して降らぬがどうだ、サア降らして見よと云ふ使をやつて、日限を限つた。向ふは即ち七日間に於て雨を降らすと云ふことで祈禱を始めたのであります、一七日経つても一滴の雨も降らぬ、降らぬのみなら

ず、早魃かんぱつの所ところへ空風からかぜが吹ふいて砂すなを捲まいて、祈禱きたうして居をる坊ぼうさんの頭あたまへ砂すなを吹ふき付つけて仕方しかたがない、良觀りやうくわんの雨乞あまごひは成績せいせき甚はなはだ不良ふりやうであつた。それから日蓮聖人にちれんしやうにんは又少またすこく經たつて使つかひを遣つかはしになつた、其その使つかひには坊ぼうさんも信者しんじやも行いつた譯わけでありませう、正式せいしきの使つかひであつて玄關げんくわんから「お頼たのみ申まうす」と云いふ譯わけで出でかけて行いつた。使者ししやの口上こうじやうは、一週間しゅうかんに於おいて雨が降ふると云いふ約束やくそくであつたが、指折ゆびせり數かずへれば既に昨こつ日じつで一週間しゅうかんは濟すんだ、けれども雨あめは一滴てきも降ふらないがどうだ、雨あめが降ふらずに砂すなが降ふるのはどう云いふ譯わけだ、斯かく雨あめが降ふらぬと云いふものは、事實じじつも前達まへたちがやつて居をる所ところなんと云いふものは、何なんの力ちからも無ないものである、泉式部いづみしきぶの一首しゆの歌うたにも及およばぬと云いふことが明あきらかになるではないか、可哀かあい想さうだからモウ一七日いちしちにちの間あひだを日延ひのべを許ゆるしてやらう、今度こんど雨あめが降ふらぬければ、如何いかに剛情がうじやう我慢がまんの者ものでも、恐入おそれいつたと今度こんどは頭あたまを下さげるが宜よい、と云いふ使つかひを遣つかはした。所ところがとう／＼二七日にちを經過けいぐわ致いたしまして、どうしても雨あめが降ふらぬ。それではお前達まへたちは駄目だめではないか、けれども早魃かんぱつが續ついて

雨送あめぞうに降ふらぬ

聖人せいじんの祈いのち驗あまと其その靈たま

て迎むかへ雨あめが降ふらぬ時ときに出會でつたと言いふのならば、日蓮にちれんが是これから雨乞あまごひを始はじめて今日こんにち直ただちに雨あめを降ふらすがどうだ、と云いふことになつた。そこが非常ひじやうに偉えらい所ところでありまして、是これは丁度ちやうど天氣てんき續つきて雨あめが降ふらぬ時ときに出會でつたと云いふならば、それでは俺おれの方ほうで降ふらすと云いふ所ところが、日蓮聖人にちれんしやうにんの一種しゆん神祕しんひ的てきな偉えらい所ところであります。それから聖人せいじんは僅わずかかに弟子でしを二三人にん連れて靈山りやうせんヶ崎がさきと云いふ海岸かいがんに出いでてになつて、そこで少すこしばかり御經おんきやうをお讀よみになつた、御自我おんじが偈げ一卷くわんだけであると從來じふらい稱しょうして居をります。日蓮聖人にちれんしやうにんは僅わずかかに二枚半まいはんばかりの御自我おんじが偈げを一遍べん誠意せいい誠心しんをお讀よみになつたのであります。稍ややや暫しばらくにして一天てん俄然げぜんとして黒雲くろくもが起おこつて來きて、さうして雨あめが沛はい然ぜんとして降ふつて參まつた。そこで非常ひじやうに良觀りやうくわん房ぼうとの戰たたかひが明白めいぱくになつた、一方ほうは二七日にちと云いふ長い間あひだ掛かつて多勢おほせの坊ぼうさんでやつたのであるが、日蓮聖人にちれんしやうにんは何なんにも法はふ壇だんも拵こしらへない、弟子でしを二三人にん伴ばんれて行いつて、御自我おんじが偈げ一卷くわんを讀よんで直ただちに雨あめが降ふつた、實じつに勝負しょうぶ明白めいぱくなことである。昔むかしから斯かう云いふ小さな事ことに事寄ことよせて、法はふの邪じや

龍口の法難(下) 二六二
正を決した例もあるのであるから、是は何でもないけれども、之に依つてお前等のやる法が價値の無いものであるから、お前等の宗旨を捨て、日蓮が主張する法華經に頭を下ると云ふ使を送られた。向ふは殘念で仕方がない、日蓮聖人の御文章に依ると、良觀房は其の時泣いたと云ふことが書いてある、忌々しいと言つて良觀房が泣いた、さうしてどうかして彼の日蓮坊主をばとつちめてやらなければならぬと云ふ惡心が此處に起つた。生如來て戒律堅固な坊主でも矢張り其の心は詰らないものである、怒らないでも宜いけれども、併し戒律などをやる者は矢張り詰らない名譽心に驅られて居るものである、割合に偽善な者である。少しも左様な惡い考へが無いと云ふやうな坊主さんでありながら、錢を貯へて高利貸をして居つたと云ふやうなこともある、是は偏よるのであります。人間の慾望を抑へてしまふと、一方の所に性の惡いものが偏よるのであります。女子高等師範學校の舍監をして居る所の婦人がある、それは中々規則の喧ましい所に、婦人を集

めて居るのであるから、夫も持たず、外へ遊びにも出ないで、日夕女生徒を監督して舍監になつて居る、其の舍監の人格が非常に惡い者になつて居ると言ふ、ねぢけた性の惡い者になつて居る。それは訝しいもので自分が面白い事もないものであるから、ちよつとした事でも非常に性の惡いことになる。良觀房なんと云ふ者でも、やはり左様なものであつて、表面から見れば立派な聖僧であつたやうであるけれども、事實性の惡い坊主になつて居つた、それは全くのことである。そこで何とかして日蓮聖人を陥れなければならぬと云ふ考へを起して、それから尼御前に取入つて、即ち婦人の方に取入つて、さうして良觀房が北條の方に讒言したことは一再ならずあつたこととあります。
そこで其の年の七月八日に淨土宗の坊さんの行敏と云ふ者を語らつて、良觀が先きに立つて煽つたのでありますが、此の行敏は少しは學問があつたのであるが、日蓮聖人の方に問答をせやうと云ふことを申込んで來た。日蓮聖人はそれに

對して言はるゝには、對決は望む所であるけれども、唯ワイ、問答のやうなことをやると間違ばかり出来て、結局法の邪正は分らぬから、ちやんと相當な立會の人が在つて、役人が出て来て騒がないやうにしてやるには、公場對決と云ふ公の場所を選んでやらなければならぬ。昔から眞に法の邪正を極めるには、相當なる儀式を以てやつたものである、お前が眞に問答をしたいと言ふならば、北條の方に申出て、其の手續をするが宜い、何時でも日蓮はそれに應ずるからと云ふこととてあります。所がさう云ふ手續をしないで、今度讒言状となつてそれが現はれるのであります。此の書面を寄來したのが七月八日、日蓮聖人の返書は七月十三日、而して彼は七月二十二日に至つて讒言状を書いて北條の方に送つた。其の讒言状は當時日蓮聖人の手に這入つた、やはり北條の館に奉公して居る入澤と云ふ信者が、行敏の讒言状を窃かに寫し取つて、日蓮聖人の御手許に送つたのであります。それでありますから今猶ほ其の讒言状の文句と云ふものは傳はつて居る、

私の法華經講義には、其の全文を擧げて置きましたが、大分長い文章であります、主なる點は、どう云ふことを讒言したかと云ふと、日蓮と云ふ悪い坊主がある、提婆達多と云ふ者は随分悪人であつたけれども、日蓮よりは悪人ではない、御釋迦様に刃向ひしたと云うても、まさか日蓮のやうに各宗の坊主の首を斬つて由井が濱に曝せと云ふやうなことは云はない、其の頃天下の龍象即ち良觀房と云ふやうな生如來が澤山ある、其の龍象を捕へて其の首を斬つて由井が濱に曝さずは、吾國は安穩ならずと云ふやうなことを言ふのは、提婆達多よりも酷い、極樂寺、壽福寺等を火を附けて焼いてしまへと言ふに至つては、守屋が佛法の破滅を計つたより猶ほ悪人である、日蓮は守屋よりも悪人であると言ふやうなことが、大分好い文章で書いてある。ちよつと讀んで見ると成程是は悪い坊主ぢやなアと思ふやうに書いてある。それから事實として擧げて居るのは、そのみならず日蓮は時頼殿、重時殿は皆地獄に墮ちて居ると云ふことを言つて居る。のみならず彼

は松葉が谷の庵室に刀を澤山貯へて居つて、さうして彼等の一類と云ふ者は、謀反を計るたくらみがある、是は彼が勢力を得たならば、遂に北條を倒さうと云ふ謀反の考へがある、と云ふ意味を仄めかして居るのであります、兇器を室中に貯へる、さうして即ち是は隱謀を計る所のものであると書いた。是が北條としては最も怖いことで、坊主の首を斬れと言つても斬らぬければ宜いが、兇器を室中に貯へると云ふことは、北條の最も懸念した所であります。のみならず色々な佛像を取つて或は火に投じ或は水に投打ち、亂暴なることをすると云ふのが、讒言狀の趣旨であります。

讒奏に對する聖人の態度

所が日蓮聖人は、それを聞いて大層御歡びになりました。それは日蓮は悪人だ悪人だと云つて讒言されるけれども、眞の正法の行者は必ずさう云ふ法難に遭ふもので、佛經を見ても雪山童子は半偈の爲に身を投げたと云ふことがある、善財童子は法を求めて苦勞をしたこともある、藥王菩薩は臂を焼き、樂法梵志は皮を剝

問註所の尋問と聖人の答辯

いだ。日蓮は今讒言に依つて一つ間違つて首の座に坐るやうな事があらうとも、寧ろ昔の偉い人が法の爲に命を捧げられた事蹟に準らへて、洵に悦ばしく思ふのであるから、日蓮の覺悟は附いて居る、さう云ふ事は少しも怖いと思はぬが、併し彼等の言うて居る日蓮攻撃の事柄と云ふものは、少しも理由の無い事である。けれども彼等に對して、それを言ふても仕方があるまいから、愈々其の讒言に依つて、日蓮が問註所(門註所と云ふのは、今の裁判所であります)に喚出されて、讒言の效能が大分あるやうになつたら、其の時日蓮がはつきり其の事を申開きをしやうと云ふ覺悟を以て居られたのであります。

そこで九月十日に至りまして、愈々日蓮聖人は問註所に喚出されたのであります。其の時の調と云ふものは、非常に嚴重なものでありまして、モウ早や憎しみは十分日蓮聖人に掛つて居るのであります。前にも日蓮聖人の事はどうかしやうと云ふ考へはあつた位である。松葉が谷の焼打の以前に於てもナニ日蓮は官の

龍口の法難(下) 二六八
手を以て叩き斬るのは臆劫であるけれども、反對者が多いから焼打にしやうが叩き殺さうが、それは放任して置けば宜いと云ふやうな事で、彼の當時日蓮聖人に對して焼打の事があつても、役人は少しも犯罪者を逮捕しない。實は其の裏面には前に申しました通りに、相當の役人が、やつつけても宜いと云ふことを煽動して居つた位である。故に今度はどうしても其の分にしては置けぬと云ふことで、問註所に於ての調が始まつた、其の時聖人が出頭せられて、第一に訊問せられたのは、『お前は時頼殿は地獄に行つて居ると云ふことを内々申すさうだが、左様な不都合な事を言うたか』と云ふことであります。所が聖人の答辯は實に壯快かな答へてある、『イヤそれは内々申すのでは御坐らぬ、時頼殿御存生の時分から時頼殿に對して面と向つて申上げたことである』、窃かに申すにあらず公々然と主張するのである、御本人に申上げた事である、立正安國論の中にも其の事は書いてある、

早く有爲の郷を辭して無間の獄に墮ちなん
長生も出來ずに其の内にななたも早死して、死んだ後には地獄に行くこと云ふことは、安國論にも書いてある事であるから、決して内證に言つたのではない、日蓮は正直な者であるから、首を斬られるから言うた事を言はぬの、言はぬ事を言ふたと云ふやうな事は申さぬ、日蓮ほど正直な者はない、此の事を申せば首が飛ぶと云ふことは知つて居るけれども、それが爲に言うた事を言はぬとは申さぬ。
第二の問題は『兇器を室中に貯へると云ふとがある、刀などを澤山庵室の中に備へ置くと云ふとであるが、左様か』、『イヤそれは澤山備へ置くと云ふことはありませぬけれども、確に刀は庵室の中にあります』、『左様な事は坊主として不都合ではないか、坊主は手に珠數を持てば宜いので、刀などは要らぬぢやないか』、『それはあなたが佛法をお調べなさらぬに依つて左様な事を言はれるのである、佛法者は刀を持つて居るのが本當の坊さんである』と言ふ。随分えらい事である
龍口の法難(下) 二六九

佛像燒棄の事

ます、今の日本人が聞いても驚くでありませう、これを鎌倉時代のあゝ云ふ場合に、日蓮聖人が刀を持たない坊主は腰抜け坊主だ、刀を持つて居る坊主が本當の坊主である、其の證據は大涅槃經の中に斯く／＼説いてあります、御釋迦様の教に依つて、どうしても末代荒き世に法華經を弘めるに就ては、刀を持つて正當防衛をしなければ直ぐやられてしまふ、やられてしまへばそれつきりである、決して此の刀は人を斬る刀でなくして、正當防衛の爲には刀を持つのは、佛のお許しであるとして申上げた。それから第三には「佛像などを火の中に燻べたり水に流したりすると云ふ事であるが、是はどうであるか」。それは事實間違てあります、日蓮は他宗の佛像經卷等を改めるにしても、是は人の尊敬したものであるから、漫りに水の中に抛つと云ふやうな事は、弟子信者に許しませぬ、相當な式を以て鄭重に扱ふて居ります、若も川の中に木像などが流れて居つたならば、それは日蓮を陥れやうとする者が、左様な事をして日蓮を傷けるものであつて、日蓮は決して

邪僧斬首の事

て廢止したる所の佛像經卷と雖も、之を水の中に抛つなどと云ふ事は致しませぬ。『然らば各宗の坊主の首を斬つて由井が濱に曝さずば、國土安穩ならずと云ふやうなことを申したか』。それは極力申すこととあります、無論坊さんと云ふ者は結構な者であるけれども、間違つた事をする者は形は沙門に似たれども、實は即ち惡魔の伴黨でございます。『それは何故だ』。『何故かと云うと、佛法の方から云へば、釋尊の本懷たる法華經、諸經中王最爲第一の法華經を蔑ろにするに云ふのは、國家の方から申せば、即ち末節に拘泥して勤王の大義を忘れて居ると同じ事でありませぬ。日蓮聖人の非常にお怒りになつて居つたのは其處であります、即ち勤王の大義を力説された。即ち此の前に承久の亂と云ふものがありまして、京都方、鎌倉方と分れて、遂に北條義時が戰に勝つて三人の天子様を流し奉り、二人の皇子を流し奉り、それから天子様に味方したる所の公卿の人々を悉く關東に下すと云つて、途中に於て頸を斬つてしまつた、非常な亂暴をやつたので

ありますが、其の京都で朝廷の爲に武運長久を祈つて居つた坊主共が、鎌倉の方が愈々勝つて盛んになつたと云ふので、皆鎌倉の方に下つて来て、鎌倉の武運長久を祈るやうな事をやつた。そこで日蓮聖人が非常に憤慨されたのでありまして、こんな坊主は首を叩き斬つてしまへと云はれたのであります。此處が大事な點であります、宗教家が權勢に阿ねると云ふことは最も唾棄すべき事である。例へば今日日本の民心が紊れて来て、下らない西洋の淺薄な思想の煽動に乗つてワイク言ふ時分に、宗教家が一所になつて騒ぎ廻ると云ふやうな事をやれば、左様な坊主は首をチヨン斬つてしまへと云ふことにならなければならぬ。民心の間違つた方に赴くのを矯正せずして、それを手傳ひをするから、日蓮聖人が奮起した譯であります。それは御文章では一二三四頁撰時鈔に斯うあります。

今は鎌倉の世さかんなる故に、東寺、天台、園城、七寺の眞言師等と、並に自立を忘れたる法華經の謗法の人々關東に落ち下りて、頭をかたづけ膝をか

がめやう／＼に武士の心をとりにて、諸寺諸山の別當となり長吏となりて、王位を失ひし悪法をとりだして國土安穩と祈れば、將軍家並に所従の侍以下は、國土の安穩なるべき事なんめりとうち思ひて有るほどに、云々。

京都の天子様の爲にお祈りをして居つた奴が、鎌倉が勢力を得たからと云つて、頭を下げ尾を振つて犬みたやうにやつて行つて、色々取込んでさうして或る寺の住職になつて居ると云ふやうな、さう云ふ節義を守らない坊主は、到底人の師表とすることは出来ない。武士は二君に事へずであるから、京都の爲に盡した者ならば、戦に負けたならば腹を切つて死ぬなり、己を潔くすべきものである。然るに是が遁げて行つて鎌倉に来て御祈禱するナンと云つて、寺の住職になつてやつて居る、そんな奴は打殺してしまへと言はれた。即ち勤王の大義と云ふものを主張されたのが、日蓮聖人の師子吼の一つであります。それからモウ一つは丁度彼の時分に、宋の世が滅びて元が興つて蒙古が勢力を得た爲に、宋の遺臣と稱して

支那から怪しい坊主が澤山日本へやつて来た、是は歴史の上に於てはつきり分らぬけれども、どうも其の中には大元蒙古の間牒となつて、即ち元探となつて日本に來て國情を調べて報知するやうな者もあつたのであります。そこで日蓮聖人は是等の坊主を非常に警戒なさつた。殊に宋が亡びると云ふのは、全體宋に於ての佛教が禪宗であつて、君臣の大義と云ふやうな事を忘れたのである、それは宋が亡びた歴史を見れば能く分るので、禪宗は宋の末路に當つても少しも勤王の大義を主張して居らない、その亡國坊主が日本にやつて來て、さうして鎌倉に取入つてやり居るのだから碌な事はしない。それが日蓮聖人に分つて居るから、即ち一方は京都に於て勤王の大義を忘れた似非坊主と、一方は宋の國を亡ぼしたる亡國坊主が寄つて、勢力を得て居るから、斯の如き坊主は由井が濱に於て首を斬つてしまへと、日蓮聖人が言つたのである。であるから日蓮聖人は左様な事を問註所で調べられてもビクともしない、是は眞の出家沙門でない、形は沙門に似たれども

問註所の評定

即ち惡魔の伴黨であるから、斯の如き者は斬つてしまへと云ふのである、それも佛様の金言に基いて申すのであると仰しやつた。そこで日蓮聖人は一通りの申開きが立つたやうな譯で、問註所の方に於ても、どうしたら宜からうと云ふことになつた。時頼殿が地獄に墜ちたと云ふことは、陰で言ふのではない、御存生の時御本人に申上げた、安國論に斯くありますと云ふとは、どうも之に對して今更處分する譯に行かない、佛像經卷を流すと云ふのは、それは證據はない、私の方では流さぬと云ふ、兇器を室中に貯へると云ふことは、釋尊の教に依つて居るので正當防衛だと云ふ、坊主の首斬れと云ふことは、不都合なガラクタ坊主の首を斬れと云ふので、さうでない良い僧侶は無論大切にせねばならぬと云ふ、さうするとガラクタ坊主でなければ宜いと云ふのだから、是もちよつと問題になり悪いと云ふやうな事で、色々評定をしたけれども評定が生煮えてある。

そこでその日は一先づ下げられたが、その九月十日の問註所の調の結果がどうなつたか、勢ひ甚だ不明であるが爲に、越えて二日を置いて九月十二日に及んで、一昨日御書(その全文は前節の初に掲ぐ)と云ふものを、日蓮聖人の方から書いて出された、どうしても首を斬らんければならぬやうに此方から仕向けて行くのであります。其處が偉い所であり、是で日蓮聖人が黙つて居れば、龍の口の法難も佐渡が島の謫流もない、所がそれが一昨日御書になつて現はれる、一昨日と云ふのは十日の調に對して十二日に書面を送つたから、即ち一昨日問註所で調べられたけれども、處分するともしないとも其の儘になつて居つた、そこで日蓮聖人は自分分は斯う云ふ考で居るからと云つて、勤王の大義と蒙古來の事を言つて刺戟を與へた、それが一昨日御書であります、命懸けて法華經を弘めると云ふ決心の現はれが、此處に在るのであります。殊に此の御書中に於て注意すべき點は、

方今世悉く關東に歸し、人皆土風を貴む

是であります、是は何を言つてあるかと云うと、京都の朝廷の勢力が承久の亂以來非常に衰へて、すべて勢力が鎌倉に移つてしまつたものであるから、そこで日本人は唯だ鎌倉がえらい者であると思つて、朝廷を忘れて皆鎌倉々々と云つて居る、其の當時の記録を讀んで見ると云うと全くひどい譯であつて、朝廷が鎌倉の幕府を抑へやうとなさつた事を、天子様が御謀叛なすつたと書く位になつた、さうして承久の亂に就いて書いた者は、皆罪は京都に在ると言つて居る。後に至つて大日本史にもさう云ふ事を書いて居る所がある位に、鎌倉の方がえらい／＼と云ふ勢力になつた、即ち御文章にある通り「方今世悉く關東に歸し、人皆土風を貴む」に至つた、是は日蓮黙視することが出来ないといふことになつたのである。之に就ては承久の亂の事を話さぬと分らぬのであつて、是は日蓮傳の背景として是非話さなければならぬこととあります。日蓮聖人は一方に承久の亂を受けて勤王の大義に生き、一方には蒙古來に依つて此の日本の世界的關係に於て愛國の

精神を發揮せられたのである、此の二事が非常に大事である、今日でも注意すべきことはやはりそれである、今民心が動いて來ると云ふことも、やはり北條が民心を懐けんとて、人民の租税を免じて人民個々の利益を圖るが爲に、京都を輕んじ天子様を忘れて、北條に歸したやうに、何時の時代でもさう云ふ馬鹿な奴がある。少し略はすに利を以てすれば、犬殺しが犬を殺すのに饅頭の一つも遣れば、犬は何にも知らないで尾を振つて來る、其處を取捕まへてギョツと頸を締める、それと同じやうに己れの大切なる身を滅ぼすことも知らずに、目前の利益に走る、救世軍が餅さへ持つて來て呉れば、神様は有難い、ブリスは有難いと思ふやうな有様である、そこで日蓮聖人は律國賊論を叫んだのであります。國家の大義を忘れ、日本の世界的關係を忘れて、唯だ貧乏人は可哀相だと云つてやるだけでは何にもならぬ、それでは國家の發展と云ふことに就ては何にも分らない。貧乏人根性と云ふものは洵にいやなものである、貧乏人は可哀相であるけれども、彼等は極

露骨の親切、表面の親切だけを知つて、大きな親切、遠い親切と云ふものは分らないのであつて、「お前腹が空つたらう、牡丹餅でも食へ」と云つて喰はして貰ふ、其處だけしか分らない、さうして大きな日本の國家の興廢存亡と云ふやうな事、或は日本の文明かどうかとか、國體がどうかとか云ふことは分らない。唯だ「お前腹が空いたらう、茶漬でも食へ、歸りがけに五錢やる」と云はれる、茶漬と五錢だけしか分らない。乞食にてもなつてしまつたら、自分の茶碗の中に這入つた残飯だけしか有難味が分らなくなつて來る、貧乏人には同情すべきだけでも、さう云ふ料簡にまで感心してしまつてはいけない、其の料簡は洵に小さい可哀相なものである、そこでお前の有難いと思ふのは残飯ばかりではいけない、此の日本の國家の中に棲息して居ると云ふことを、有難いと思はんければならぬ、此の残飯を呉れる人も、其の残飯は何處から得るかと云へば、國家の恩典の中に商賣をして儲けた錢の幾分が此の残飯の中に這入つて居る、國家の存在と云ふもの、中に一切

あるのである。救世軍の鍋の中に錢が這入つたと云ふ、その錢は何處から這入つたかと云へば、是れ皆日本天皇の御威徳の中に、日本人が安全に生活をし商賣をして居る其の一部分の錢である、然るにそれが分らぬやうな薄馬鹿の者が澤山日本に居るのであります。

そこで日蓮聖人の時の問題もそれであつて、良觀房のやうに、日本國家の大義を忘れ、朝廷を粗末にする北條に頭を下げて、其處から少しばかりの保護を受け、救濟事業をやれば、國家の大義はどうならうが、蒙古がやつて來て日本の國が亡びやうが、そんな事は構はないと云つてやつて居るから、日蓮聖人が、此の國家の生命である勤王の大義が地に墮ち、日本の文明、世界的に耀くべき文明が危くなつて居る時に、何をして居るか云ふので、律國賊論と云ふものを叫んだ。今日の佛教でも耶穌教でも、やつて居る仕事は、大體やはり其の點からは攻撃を免れない有様である、國家の興廢存亡を眼中に置かない宗教と云ふものは駄目なも

律國賊論

承久亂の概要

後鳥羽天皇の讓位

のである、故に日蓮聖人は此の承久の亂に就て詳しく考を述べられたので、それは聖人の遺文中には至る所に現はれて居ります。

茲に極ザツと承久の亂の事を申し上げますと、此の亂の起因は、どう云ふ事が原因であるかと云うと、此の事は色々議論がありますけれども、大體一致して居る點は、後鳥羽天皇が御年十九歳にして位を御退きになつた、是が抑々御考があつたので、鎌倉が跋扈して朝廷の權威を抑へるから、どうしても是は兵權と云つて、即ち戦する所の力が朝廷に無くては、鎌倉の跋扈を抑へることが出来ないとなつた。大變深く御考へになつて、御年十九歳の御若いにも拘らず位を御退きになつた。承久軍物語と云ふ書物の初にも其の事が書いてある。

建久九年正月十一日、御とし十九さいにして、位をしりぞかせ給ひて、第一のわらじ爲仁のみこにゆづらせ給ひ、御身はいやしきにかたをならべ、ひざをくませ給ひて、ぶんぶげいのうをもつばらとまなび給ふ。(承久軍物語)

卷第一

承久亂の
原因

天子様は御歳十九にして位を太子に譲つて、自分は人民の中に這入つて武藝から何から一切の事を一生懸命なされた、さうして他日鎌倉を抑へる所の準備を爲されたのであります。此の承久の亂の原因を龜菊と云ふ白拍子のごとて説明する人がありますけれども、それは後に至つての末の事で、既に十九歳にして位をお退きになつて武藝をお學びになると云ふ時に、鎌倉を抑へやうと云ふ御考があつたのであります。その御思召と云ふものは、鎌倉が正當に朝廷の御威徳を戴いて居るならば、斯様な事を御考になる氣遣はない、是は歴史家の大いに考へなければならぬ所である、朝廷御謀叛などと云ふのは、以ての外のとである。天子様の御位に居られる方が十九歳で位を退いて、自ら武藝を學んでおやりになると云ふことはよく／＼のことであり、是はどうしても北條の跋扈を抑へんければならぬと云ふ事情が其處に在つたのであります。それから後にさう云ふ龜菊と云ふ婦

承久亂の
發端

人の土地の事に就て、北條が命令を奉じないと云ふこともあつたけれども、それも一つではない、其の外に北條が朝廷の命令を奉じなかつたことは澤山あるのであります。それは朝廷の御普請をするに就て定まつて居る所の費用を納めぬ國があつた、加賀越後の方から納むべき材木も來ないから、鎌倉の方に仰せになつて、それを催促して出すやうにと云つてお遣はしになつた所が、北條が其の命を奉じない、そんなものは出さぬでも宜いと云ふ風な事を言つた、其の外事に朝廷の御威徳を抑へるやうな事ばかり、北條がやつたものでありますから、段々事が進んで遂に承久の亂を起すに至つたのであります。

亂の出發は鎌倉から京都に送つて居りました判官と云ふ者をば、朝廷の方で人を遣つてお殺しになつた、その事が鎌倉の方へ聞えたと就て、鎌倉の方から京都の守護として送つて居る者をお殺しになると云ふのは都合だと云ふ所から、戰爭を起して行くのであります。此の時非常に義時が憤りまして、澤山の兵隊を京

都の方へやるのであります、さうして途中に於て京都勢の方に於ても段々戦ひ、又宇治の方に於ても戦ひましたけれども、遂に朝廷に利あらずして、京都の方が敗けてしまつて、義時の子の泰時が總大將となつて京都に這入つて來るのであります。その戦の光景も色々ありますけれども、長くなるから述べませぬ。泰時が愈々戦に勝つて京都に入つた時に、使を鎌倉に居る義時の方に送つて、後の始末をどうするかと云ふことを聞いた時に、非常に不都合な事になつて來たのであります。それは慈光寺本と稱する承久記の下に斯うあります。

其時武藏守(是が泰時であります)は、御文急ぎ鎌倉へ參らせらる。東國より都へ向ひし人々の、水に流るゝともなく討たるゝともなく、一萬三千六百二十人は死たり。泰時と同じく都へ著て、勸賞蒙らんと申す人々一千八百人、也、所附して賜るべく候。又院には誰をか成まいらすべき、御位には誰をか附まいらすべき、十善の君をば何くへか入奉るべき、宮々をばいかなる所へ

か移まいらすべき、公卿殿上人をばいかゞはからひ申すべき、條々能々計仰給ふべしとぞ申されたる。斯う云ふ手紙を送つた、此の後へ立つ天子様は誰にしませうか、今の即ち後鳥羽の院等はどうか云ふ風にしたら宜からう、又王子方はどうか云ふ風にしたら宜からうと云ふやうな書面を送つた、其の時に北條義時は鎌倉に居て家來共を集めて、非常に傲慢な態度で斯う云ふことを言つて居る。

權太夫(義時の事であります)は、此の状を御覽じて申されけるは、是見給へ和殿原、今は義時思ふ事なし、義時が果報は王の果報には猶まさりまいらせたりけれ、(義時の果報は日本の王様より果報は上だと云ふ)義時が昔の報行今一足らずして(前の生の善根がちよつと足らなかつたから)下臈の報と生れたりけるとぞ申されける、(今は下臈に生れたけれども、現在に於ては朝廷をも自由にする權力を得た)

斯う云ふことを言つて威張る、さうして其の返事にどう書いたかと云ふと、院(即ち法皇様)には、持明院の宮を定申べし。御位には、同院の三郎宮を即まいらすべし。さて本院をば同國土といへども、遙に離たる隱岐國へ流しまいらすべし。宮々をば、武藏守計て流しまいらすべし。(即ち朝廷の王子様達は、泰時お前が勝手に所を極めて流し參せるのが宜からう)公卿殿上人をば、坂東國へ下し奉るべし(今まで朝廷に味方したえらい人達は、皆關東の方に送れ——是は送ると云つて途中で一人も残らず皆殺してしまふ、えらい事をやるのであります)次々の殿原には、猶も芳心あるべからず、(芳心あるべからずと云ふのは、優しうしてはいかぬと云ふ、誰も彼も親切にしてはいかぬ、残酷にやれと云ふ)悉く頸を切るべし。

斯う云ふ返事を送りました、それに基いて泰時が如何に計ひましたかと云ふと、それは非常に酷い扱をするのであります。第一に、後鳥羽院を隱岐へ流すに就き

ましては、

隱岐左遷の状況

同日(是は七月十日であります)武藏太郎時氏、鳥羽殿へこそ參り給へ、物具しながら南殿へ參給ひ、弓のウラハズにて御前の御簾をかき掲て、君には流罪せさせおはします。

物具しながら——武裝をして御殿へ參りまして、弓を以て御簾を掲げて、「あなたは、是から流罪であります」と言ふ、天子様に向つて酷い事を言ふのであります。斯う云ふ事は、昔平將門などでも朝廷に叛きました、又後に足利尊氏が出ましたけれども、こんな事は決して言はぬ、是は北條が一番悪い、天子様に對して御流罪なんと云ふ失敬な事を言ふ、その言ひ方の光景が承久記に書いてある、此の承久記などは、北條の良いやらな事ばかり書いてある書物である、それでも其の時の光景が毒々しかつたと見えて斯う書いてある。

とくく出させおはしませと責申す聲景色、琰魔の使にことならず。

モウ御流罪に極つたから、此の地にお居てになつてはいけませぬ、早うお出なさいと云つて、聲を荒らげて閻魔の使のやうに呶鳴つた。

院ともかくも御返事なかりけり。武藏太郎重ねて申されけるは、いかに宣旨は下り候ぬやらん。

何とも御返事がないものであるから、あなたは此處に御坐ると仰しやるのか、或は隠岐の國へ行くか仰しやるのか、御返事はどうでありますかと言つた。

猶謀反の衆を引籠てましますか。

それとも未だモウ一遍謀反を起す御考でありますか。此處でも謀反と云ふことを朝廷に向つて言ひ居る、それは實に大逆無道の事を言つて居ります。

とくく出させおはしませと責申ければ、今度は勅答あり、今我報にて争か謀反者引籠へき。

そこで今度は、いや自分は決して戦をするなど、云ふ考は無い、都を出て行かう

と云ふ御返事があつて、それから直ぐ京都を出られて、あれから播磨の方を経て伯耆の國へ出て、隠岐の國へ御流し申すのでありますが、偕てその隠岐の國へ行かれた時の光景がどうであるか、其途中なども酷いけれども、愈々隠岐に行かれた時の配所の光景と云ふものが實に酷いのであります、それはどう云ふ所であるかと云ふと、是は承久記の前田本と云ふ、前田侯爵家に傳はつた書物に斯うあります。

御配所の光景

かくて日數重りければ、隠岐國へぞつかせ給ふ。是なん御所とて入奉るを御覽すれば、あさましげなる筈よきの薦の天井、竹の簀子也、をのづからなる障子の畫などに、かゝる住居かきたるを御覽ぜるより外は、いつか御目にも懸るべき。

是は屏風か何かの繪で、こんなやうな家は天子様も御覽になつた事はあるかも知らんけれども、斯の如き所をお住居になさるなど、云ふことは、夢にも御考へな

さらなかつたであらう。さう云ふ酷い所へお移し申したのであります、さうして海岸の風の荒い非常に寒いやうな所へ建て、ある、そこで隠岐の院がお詠みになつた歌があります。

われこそは新島守よ、おきの海の

荒き浪風、心して吹け

此の御歌でも分るやうに、非常に風の吹く波の飛沫の懸りさうな所へお流し申して、残酷な事をしたのであります。是は後鳥羽院に對して、あります、其の外その當時の天子様であつた順徳天皇は、之を佐渡が島へお流しするのであります、それからその間に天子にお成りになつた土御門上皇は、土佐の國へお流し申して居る、それから皇子がりましたが、その皇子も皆残らず流すのであります。此の書物に依りますと、

二十四日には、六條宮をば但馬の室の朝倉に流しまいらせ、二十五日には冷

二上皇二皇子の左遷

公卿等の斬殺

泰時に對する大日本史

泉宮をば備前の小島へ流しまいらせける。

月卿雲客をば、坂東へめし下すべしと披露して道にて皆失はるべし。

公卿殿上人は途中に皆殺すのであります、その殺した場所も皆出て居ります、非常に残酷な事をしたので、中途自殺した人もありますが、要するに「芳心あるべからず、悉く頭を切るべし」と云ふ勢でやつたのであります。

斯くして朝廷には非常に辛く當りましたけれども、人民の方に向つては、この後と云ふものは租税を免じたり、北條式目を作つて人民の機嫌を取つたりしてやつた。そこで後代の歴史家は泰時と云ふ者は中々えらい者だ、一點申分の無い者だと云ふ、是は水戸光圀卿の書かれた大日本史にさへも、さう云ふ事が出て居る、その批評も序であるから申しますと、泰時に對して大日本史には非常に良く言つてある。

泰時清廉公直、聲色を屏去し(中略)老に至つて其の節を變ぜず。

とあり、又

源親房謂らく、承久の事は其の曲、上に在り、泰時は義時の成績を承け、志を治安に勵して毫も私する所無しと、斯れ以て定論と爲す可きなり。

と云ふやうに書いてあるので、大いに泰時を褒めてある。さう云ふ風であるから、日蓮聖人の『方今世悉く關東に歸し、人皆土風を貴む』と云ふことが出て來るのてあります。前に擧げた承久記などを見ても、終には皆同じやうな事を言つて居る。

頼山陽の筆誅

所が之を激しく論じたのは山陽外史でありまして、頼山陽の筆は非常に面白い、併し是は日蓮聖人が早く言つて居る事で、日蓮聖人はえらいものであります。日本の歴史家と云ふ者は、何時でも坊さんの言つた事は、之を斥けてしまつて採らないけれども、日蓮聖人が若し坊さんでなかつたならば、モット早く日蓮聖人は非常に偉くなつて居るに違ひない。然るに日本の役人と云ふ者は、ケチな根性

て非常に坊主を嫌つたものである、今でもやはり同じ事で、朝廷の御大禮式に参列すると云つても、衣を着て來てはいけないと云ふ、衣なんと云ふものは襪らはしい、衣さへ着て來なければ宜いと云ふ、衣と云ふ物は、一般に日本人は皆縁起が悪いと云ふやうな事を考へて居るので、やはり役人がさう云ふ事を考へて居る、それは非常に舊い頭腦だけれども、宗教と云ふものは縁起が悪い、抹香臭いと云ふやうに考へて居る。であるから日蓮聖人のこの立派な勤王の大義も、又蒙古來に就て日本の爲にお計りになつた事も分らなかつた、併し山陽の言つて居る所を見れば、是が能く分るてありませう、山陽は泰時の事に就て斯う論じた。

世の論者泰時に於て間然する所無きのみと爲す(世間では、泰時は申し分がないと云つて居るけれども)余謂へらく、承久の事は泰時其の罪の魁なりと、(魁はさきがけと云つて親玉である、世間では泰時は罪が無いと云ふけれども、山陽をして謂はしむれば、泰時は承久の亂の罪の親玉である)何ぞや、

泰時の賢なる事果して傳ふる所の如くならしめんか、即ち既に禍難を定め、大兵を鞏下に擁して、諸大處分已に由らざるは莫し、其の朝廷と幕府とに於ける往復の際、豈に以て之を善處する所無からんや、已に理を以て導くべく、又勢を以て禁ずべし。是れ之を思はずして、其の父を大惡に陷ぬる。彼が果して世間で云ふ評判のやうに立派な奴であるならば、前に言ふ通り自分が總大將となつて京都に入つて兵力を以て京都を占領したのであるから、總ての處分と云ふものは、彼の思ふやうにやれるのである、然るに鎌倉へ手紙を送る際に方つて、其の爲したる事はどうかであるか、親に對してモツと立派に書面が送れるにも拘らず、それをしないで、其の父をして大逆無道の者たらしめたてはないか、善政有りと雖も、寧ろ其の罪を贖はんや。是が山陽のえらい所でありませぬ、泰時が民心を收攬して小さな善き政事を行つたからと云つても、朝廷に叛したる所の大罪を贖ふことは出来ない。

是に知る、舊史に稱する所、泰時其の父を勸めて關に詣りて降を納れしめんとすれども、義時聽さず、發するに臨みて「親征に遇はば則ち何をか爲さん」と問ふ、曰く「之に降れ、否らずんば則ち決して前め」と。昔の歴史の書物に、泰時が其の父に勸めて、軍などを起さないで、京都に行つて降参したら宜からうと言つた所が、義時はモウ降参などは考へない、お前は戦に行けと言はれたから、それでは已むを得ませぬと云つて、仕方なしに出掛ける事になつた、其の時に尙ほ問ふて言ふには、併しながら錦の御旗が若し來たならば天子様が前に進んで來られたならば、如何致しませうか、自分は降参するより外、仕方がありません、若しそれでもやれと仰しやるならば、自分は腹を切つて死んでしまひますと云ふやうな事を言つたと云ふけれども、それは皆史氏、之を爲りて過を文るのみ、信ずるに足らざるなり。そんなことは詔ひの學者が、北條の勢力に怖れて言つた事で、信用することは出

來ない——實に山陽の所論は立派であります。

然れども北條氏七世、其の人理を以て論ずべき者は獨り泰時あるのみ、其の他義時輩の如きは、皆蛇虺鬼域又曷ぞ責むるに足らんや。

併しながら北條氏七代續いた中では、一通りの筋道を以て論じて宜い人間は、獨り泰時あるのみである、餘は箸にも棒にも掛らぬ奴であつて、義時の如きは人間ではない、蛇か虺か鬼か域か犬畜生である。

或は義時、深見某を誅して其の子を近づけ卒に殺されたりと傳ふ。噫、是れ其れ或は然らん。昔平清盛、源義仲並に兵を稱げて上皇に抗せしもの、皆讒人を除くにあるのみ、敢て其の幽囚の計を遂げざるなり、然れども猶ほ誅滅を免れざりき。義時の如きは、真に無前の逆賊なり、而して叛名を世に脱るゝを得たり、天其れ手を臣僕に假りて之を斃すか、其の子孫に及びて新田氏の斧鉞に遇ひ、其の巢穴を抉り其の醜類を殲す。天網恢々疎にして漏

さずと、豈に信ならずや。

彼れ義時は深見某と云ふ者を殺して、其の殺した者の子の爲に討たれて死んだと云ふことであるが、それは因果應報當然の事である。昔平清盛、源義仲等が、兵を擧げて天皇に反對した事はあるけれども、それは天皇の御側に居る所の人間を除かうとしたのであつて、天子様御自身に對して、之を流し奉ると云ふやうな考へは少しもなかつた、それでさへも誅戮を免がれなかつたのである。義時の如きに至つては、真に日本の歴史に無い所の惡逆無道の奴である、然るに叛臣である朝敵であると云ふ名前を免がれて、大日本史にて叛臣傳の中には、義時は入つて居らない、さう云ふ奴ぢやに依つて、天が其の家臣の深見と云ふ者の息子の手に依つて之を討たしたのである、又其の子孫高時の世に至つて、新田義貞が起つて北條を滅ぼし、北條の巢くつて居つた鎌倉を攻め滅ぼして、其の類を一人も残らず塵殺にしてしまつた、天網恢々疎にして漏さずと云ふことは、萬世を貫い

た金言である。

山陽の議論は是であります、併しながら山陽は後世に出て北條氏を筆誅した學者であるが、日蓮聖人は鎌倉の勢力が現在熾んなる、生きてバチ／＼して居る時に、是と闘つて行き居るのであります。さうして日蓮聖人の言ふ事は、山陽の言ふのと同じこと若くはそれ以上に強い意味が現はれて居るのであります。それも日蓮聖人の御言葉を御紹介せんければ、その意味が分らぬと思ひますから、次に聖人の文章を掲げます。

隱岐の法皇は天子也、權の太夫殿は民ぞかし。子の親をあだまんをば、天照太神うけ給ひなんや、所従が主君を敵とせんをば、正八幡は御用のあるべしや。

(種々振舞鈔)

一切の大事の中に國の亡ぶるが第一の大事にて候也。

(蒙古使書)

義時に對する聖訓

日本國の王となる人は、天照太神の御魂の入りかわらせ給ふ王也。先生の十善戒の力といひ、いかでか國中の萬民の中にはかたぶくべき。設ひとがあらりとも、罪ある親を失なき子のあだむにてこそ候ひぬらめ。設ひ親に重罪ありとも、子の身として失に行はんに、天うけ給ふべしや。

(高橋入道返事)

今は鎌倉の世さかんなる故に、東寺、天台、園城、七寺の眞言師等と、並に自立を忘れたる法華經の謗法の人々、關東に落下りて、頭を傾け膝をかじめ、やう／＼に武士の心をととりて、諸寺諸山の別當となり長吏となりて、王法を失ひし惡法を取出して國土安穩と祈れば、將軍家並に所従の侍已下は、國土の安穩なるべき事なんめりとうち思ひて有るほどに、法華經を失ふ大禍の僧どもを用ゐらるれば、國定めて亡びなん。

(撰時鈔)

太政入道が國を押へ承久に王位つきはて、世東にうつりしかども、但國中の

みだれにて他國のせめはなかりき。

(報恩鈔)

天下第一先代未聞の下剋上出来せり。

(下山書)

我あらぎ(荒氣)をば知らずして、日蓮があらぎの様に思へり。

(彌三郎返事)

承平の將門は關東八箇國をうたへ(打平)、天喜の貞任は奥州をうちとめし、民を王へ通ぜざりしかば、朝敵となりて遂に滅ぼされぬ。此等は五逆に過ぎたる謀反なり。

(千日尼返事)

うれしき事は武士の習ひ君の御爲めに宇治勢多を渡し、前をかけなんどしてありし人は、たとひ身は死すれども名を後代に擧げ候ぞかし。

(妙法尼返事)

抑も人王八十二代隱岐の法王と申す王有き、去ぬる承久三年 辛巳五月十五日伊賀太郎判官光末を打捕まします、鎌倉の義時をうち給はむとの門出也、

やがて五畿七道の兵を召して、相州鎌倉の權の太夫義時を打ち給はんとし給ふところに、還りて義時にまけ給ひぬ、結句我身は隱岐の國にながされ、太子二人は佐渡の國、阿波の國にながされ給ふ、公卿七人は忽に頸をはねられてき。これはいかにとしてまけ給ひけるぞ、國王の身として民の如くなる義時を打ち給はんは、鷹の雉をとり猫の鼠を食むにてこそあるべけれ。

(本尊問答鈔)

我朝人王九十一代の間に謀叛の人人は二十六人也。所謂大山の王子、大石の小丸、乃至將門、純友、悪左府等也。

(新池書)

日本國に代始まりてより、已に謀叛の者二十六人。第一は大山の王子、第二は大石の山丸、乃至第二十五人は賴朝、第二十六人は義時也。二十四人は朝に責められ奉り、獄門に首を懸られ、山野に骸を曝す、二人は王位を傾ぶけ奉り、國中を手に拳る、王法既に盡さぬ。

(秋元鈔)

伊豆の國の民たる義時が下知に隨ふ故に、かゝる災難は出來する也。(中略)

于今六十年の間未だその恥をすゝがずとこそ見え候へ。(富城入道返事)

皆其君を貴み其親を崇むといへども、豈に國王にまざるべきや。(持法華問答鈔)

斯の如くに日蓮聖人は、非常に強く義時を攻撃されて居るのでありますが、それがこの鎌倉幕府に向つて出した一昨日御書には、一言に能く現はれて居ります、

即ち

方今世悉く關東に歸し、人皆土風を貴む。

と言はれた、面と向つて斯う云ふ事を言はれたのであります。さうして此處に又

非常に偉大なることを言つて居られる、是は非常な大逆無道であるけれども、併

し尙ほ是れ國內の事である、日本國の内輪の事であつた。然るに今度蒙古が虜

を送つて來たと云ふことは、是は國內の事ではない、他國の攻である、他國の攻

は今まではなかつたが、今度は國難が他から起つて來たのであると云ふことをお

書きになつて居る、此處を能く見なければならぬのであります。

然るに近年の間多日の程、犬戎浪を亂し、夷敵國を伺ふ。

今まで承久の亂、北條の跋扈に依つて大義名分が地に墮ちた、それは慨歎すべき

だけれども、尙ほ國內の事であつたが、今度は蒙古より大勢が日本に押寄せて來

る、此に至つては國家の興廢存亡目前に迫つて居るのであると云ふ主意を以て、

一昨日御書をお書きになつて、さうして第一に内は朝廷の御威徳を盛んにして、

お前等の跋扈して居る政治を改めて、他宗のガラクタ坊主の御祈禱などを受けな

いて、外は蒙古來に備ふる準備をしなければならぬ、早く賢慮を廻らして夷敵を

退けなければならぬと云ふことを申されたのであります。一昨日御書の全文は連

も今講釋は出來ぬ程偉大なる立派な御文章であります、要するに此の二點、即

中略

犬戎浪を
亂し夷敵
國を伺ふ

ち勤王の大義と蒙古來の事でありませう。是は唯だ普通の人が考へて居る所の念佛無間、禪天魔と云ふやうな、そんな事でない、「方今世悉く關東に歸し、人皆土風を貴む」に至つて勤王の大義が地に墮ちた、洵に慨歎に堪へないが、併し是れ猶ほ國內の事である、然るに近年は愈々犬戎浪を亂し夷敵國を伺ふに至つては、最早抛つて置けんてはないか、而して此の秋に方つては唯だガラクタ坊主の御禱などを頼みにして居つては駄目である、第一北條が反省して大權を天皇に還し奉り、さうして日本の國民全體の力を以てこの國難を攘はなければならぬ、内は法華經を重んじ、政權を天皇に還し、國民一致の力を以てやらなければならぬと云ふのが立正安國の精神である、丁度 明治天皇がなされたやうな大業を、日蓮聖人はその當時に叫んだのであります。併しながら北條は無論自分に悪心がありませんから、この日蓮聖人の諫言が耳に這入らない——この一昨日御書は最も強い所の諫言であります。日蓮聖人は前後三諫と仰せられて、最初は安國論を捧呈せられ

た時、それから今度は一昨日御書、それから佐渡から歸つて殿中に於て諫言を呈せられると云ふ、この前後三諫の中に於て、この一昨日御書は最も強い諫言で、命を投出して勇往邁進せられたのであります。即ち一昨日御書は日蓮聖人の白兵戦であります。一昨日問註所で調べられて其の儘になつて居るが、日蓮の考は斯うであると云つて、此方から催促して斬るなと殺すなとしなければならぬと云ふことになつた、其處を見なければならぬ、人間は自分が平生逃げ廻つて居つて、愈々逃げる事が出来なくて捕へられてから、豪さうな事を言ふのは駄目である、日蓮聖人は此處で逃げやうと思へば逃げられる、それも逃げたやうな顔をしないて、誤魔化しが利くのであります。調べられた時に少し穩かに言へば「それはマア私もサウひどい事は……」と云ふやうな事を言つて「以後心得る」畏りましたと云つてしまへば、信者も誰も居らぬのであるから、歸つて來てから少し優しい顔をして「摩訶止觀に曰く」と言つて居れば濟むのである。所が日蓮聖人はさうで

ない、向ふが穩かになりさうだから、是てはいけなないと云つて一昨日御書を十二日の朝早く差出した。

そこで北條の方では周章て、評定をすることになつた。それはこの御書が非常に刺戟したので、北條は大いに怒つて評定を開いた、其の評定は、この坊主の處分をどうしやうか、首を斬らうか流罪にしやうか、追放にしやうかと云ふので、色問題があつたのである、さうして又その罪する理由は、何の理由に依つてやるかと云ふことになつて、結局その時の評決は、

日蓮は事を佛法に託して政道を亂る者なり

彼は佛法をひめると云ふけれども、實は鎌倉の政治を改革しやう、鎌倉幕府を倒さうとする所の革命の考を有つて居る奴である、佛法に事よせて政道を亂る奴ぢやに依つて、此の儘にして置けないと云ふことになつて、即日直に内管領の役をして居つた平の頼綱が、兵士數百人(或は三百人とも書いてありますが)に命

佛法に託して政道を亂ると云ふ

頼綱庵室を襲ふ

少輔房と法華經の五の卷

じて大聖人を松葉が谷の庵室に捕へると云ふことになりました。

是から頼綱が先に立つて、戦の装束で具足に身を固めて、聖人の庵室を襲うたのであります。その時日蓮聖人は、サア騒ぎが始まつた、之を失うてはならぬ、何より大事だと云ふので、聖人は十卷の法華經を取つてサツと懐中に入れて、イヤ立退かうと立上らうとする所へ、土足の儘で少輔房と云ふ奴が、真先に飛込んで来て、何をウロ／＼して居るかと云ふので、いきなり聖人が懐中せらるゝ法華經の一卷を取出して、聖人の頭をボカ／＼と叩いた。聖人は中々剛氣な方であるから、その時の心理状態を言つて居られるのに、奪ひ返して此奴を毆つてやらうかと思つたが、ハツと氣が附くと、その自分の毆られた經卷は、法華經の五の卷、それは實に何とも言へぬ詩的の光景であります、法華經の行者が流されたり、首の座に坐つたり、胴突かれると云ふやうな事を書いてあるのが、五の卷の勸持品である、打たるべき事の書かれてある所の法華經の五の卷、而して今打たれたる

聖人を引廻す

法華經も第五の卷であると云ふに至つては、不思議ななどと云ふばかりなし、此に至つてはハツと其の詩的の光景に驚いたと云ふ、實に痛快なことであります。それからドヤ／＼とやつて来て法華經、佛像を引裂き打碎き、座敷二間三間の間踏み散らさぬ所も無しと云ふやうに、法華經を土足に掛けたのであります。斯くして到頭日蓮聖人を瘠馬ビツコ馬、洵に見すばらしい馬に乗せて、それより片瀬龍の口の刑場に引出すことになりました。その途中に於て日蓮聖人が八幡の社前に於て、八幡大菩薩に申すべき事ありと云つて馬より下りて告げられた、是は名高い話であります。

鎌倉八幡宮への諫

その時日蓮聖人は高聲に八幡大菩薩に向つて告げらるゝには、「いかに八幡大菩薩はまことの神か、和氣の清磨が頸を刎ねられんとせし時は、長一丈の月と顯はれさせたまひ、傳教大師の法華經を講ぜさせたまひし時は、紫の袈裟を御布施に授けさせ給ひき。今日蓮は日本第一の法華經の行者なり、その上身に一分のあや

まちなし、日本國の一切衆生の法華經を誦して無間大城におつべきを、助けんが爲に申す法門なり、又大蒙古國よりこの國を攻むるならば、天照太神、正八幡とて安穩におはすべきか。その上釋迦佛、法華經を説き給ひしかば、多寶佛、十方の諸佛菩薩あつまりて、日と日と月と月と星と星と鏡と鏡とを並らべたるが如くなりし時、無量の諸天並に天竺漢土、日本國等の善神聖人あつまりたりし時、各各法華經の行者にをろそかなるまじき由の誓状まいらせよと責められしかば、一一に御誓状を立てられしぞかし。さるにては日蓮が申すまでもなし、急ぎ／＼誓状の宿願を遂げさせ給ふべきに、如何に此處にはをらあわせ給はぬぞ」と聲高々と申され、最後には「日蓮今夜頸切られて靈山淨土へ參りてあらん時は、先づ天照太神、正八幡こそ起請を用ひぬ神にて候ひけれと、指し切りて教主釋尊に申上げ候はんずるぞ、痛しと思さは急ぎ／＼御計ひあるべし」と告げられて又馬に乗られる。

弟子信者への誠告

それから段々と引かれて由井が濱に出て、夫より御霊の社の前にて熊王童子を四條金吾の所へ知らせにお遣りになる、四條金吾兄弟四人は直ぐさま駆け付けて来る。日蓮聖人は金吾に向つて「日蓮は今夜頭を切られにまかるなり、この數年の間願ひつる事はこれなり。此の娑婆世界にして雉となりし時は鷹につかまれ、鼠となりし時は猫にくらはれ、或は妻子のために或は敵のために、身を失ひし事大地微塵より多し。法華經の御ためには一度も失ふことなし。されば日蓮貧道の身と生まれて、父母の孝養心にとらず、國の恩を報ずべき力なし。今度頭を法華經に奉りて、其の功德を父母に回向せん、其のあまりは弟子檀那等に分け與ふべしと、常々申せし事はこれなり」と告げられる。金吾兄弟四人は馬の口に取付いて、七里が濱を通り腰越を経て龍の口に著く。いよ／＼此處で日蓮聖人を馬から引下ろして刑場に引据ゑる。その時に四條金吾は「聖人の御命も、只今を限りに御坐ります」と涙ながらに申上げる。聖人は「不覺の殿原かな、これほどの悦

日朗日心等の入牢

直重の同情と金剛心の

びをば笑へかし、いかに約束をば違へらるゝぞ」と御誠めになる。そこで四條金吾兄弟四人は覺悟を定め、聖人がいよ／＼刑場の露と御はてにならば、その場を去らず割腹して殉死しやうと決心を固めた。これより先き日朗上人も、日蓮聖人の御供をして刑を受けたいと役人に頼んだが、固より聞き入れない、のみならず三位房日心、及び信者四人等と夫々土の牢に入れられる事になるのであります。「さていよ／＼日蓮聖人を刑場に引据ゑて首を斬るのであります、その時聖人の首を斬るべき、依智の三郎直重は「どうも私は年を取つて御僧の首を斬ると云うことは心持が悪いから、あなたが平生仰しやる事を少し柔かになさつたならば命乞をして上げやう、頼綱殿は何と仰しやるか知らんけれども、直重命に替へてお助け申さう、どうか酷い事はモウ言はぬと仰しやつて戴きたい」と言つた。所が聖人は「この期に及んでモウ考へることはない、日蓮の言ふ勤王の大義、蒙古來に備へなければならぬ事、諸宗の謗法を戒めると云ふことは、首が飛んでも止

めることは出来ぬ、妥協と云ふ譯には行かぬ」と斷然と仰しやつた。それでも直重は『どうもあなたの首を斬るのは心持が悪し』と言ふので、聖人は『それは何も遠慮はない、お前は役目で首を斬るのだ、日蓮は日蓮の主張の爲に首を斬られるのだから、何の遠慮もないから、早速斬るが宜い、サア安心して斬りなさい』と言つた。『それではどうも己むを得ませぬ』と云ふことになつて、依智の三郎直重が刀を抜いて愈々振上げた、是て秋水一下すれば、聖人の頸は飛ぶべき筈の所である、直重は首を斬る役人であるからモウ始終首を斬つて居る、所謂首斬りの名人だから、振上げた刀をサツと下せばそれつきりである。

所が其處まで行つた時に、それこそ何とも言へぬ實に不思議な事で、丁度その振上げた所へ、江の島の方より一丈あまりの光りものが鞠の如くに飛來つた、是は何であらうか、實に不思議である、依智の三郎驚かざるを得ない、そこでダヂ／＼となつて力が脱けた所へ、非常に激しい雷が鳴つて來て、而も海岸の砂を捲上げ

天感と警吏の驚怖

て吹き付けた。時刻は今の午前二時頃にもなつて居るその場合に、急にさう云ふやうな嵐が起り、光りものが飛んで來たり砂が飛んだり雷が激しく鳴つたと云ふやうな譯で、『太刀取り目くらみ』と、聖人はお書きになつて居る、俗説では刀が折れたと云ひますけれども、さうは書いてない、依智の三郎目がくらんでヒヨロヒヨロとして、太刀を下さうとしても下すことが出来なくなつてしまつた。是は日蓮聖人のやうな偉い人に對しては、どうしても依智の三郎斬り付けることが出来ない。それは今日でもさうである、あの位の偉い人であつたならば中々首は斬れない、所謂自己催眠の作用で、『是は偉い坊さんである』と思ふ所へ、日蓮聖人は泰然として坐つて居るのであるから、刀を振上げても斬れないでマゴ／＼して居つたに違ひない、其處へ騒ぎが起つて來たものであるから、非常に驚いた。

太刀取り目くらみたふれ臥し、兵共おち怖れ、興さめて一町ばかりはせのさ、或は馬よりをりてかしてまゝり、或は馬の上にて、うづくまれるもあり、日蓮

當時の實況を叙せる聖訓

申すやう、いかに殿原、かゝる大禍なる召人には遠くのくど、近く打ちよれや打ちよれやと、高々と呼はれども、いそぎ寄る人もなし。

と聖人は自らその時の光景をお記しになつて居ります。依智の三郎初め兵士共は、皆大事な召人を置いて遠くのいてしまつたので、聖人は、「お前等そんなにそつちへ行かないでも宜い、近く寄れ〜」と言はれたけれども、みんな「へい〜」と言ふばかりで、近寄つて来ない。そこで又聖人は、

いそぎ切るべし

さて夜あけなばいかに〜、頸切るべくば、いそぎ切るべし、夜明けなばみぐるしかりなると、勸めしかども、兎角の返事もなし。

夜が明けてから頸を斬るのは見つともない、どうでも今夜の内に斬らねばならぬ役目であるから、サア怖がらないでモウ一遍傍へ来て心を落着けて、日蓮の頸を斬れと言つた、實に豪い事を言つたものであります。斬らるべき罪人は平然として居つて、警固の三百人の物具附けたる兵士共は戦き怖れて顔へて居る。

鎌倉より
の赦免状
來たる

さう斯うして再び頸を斬ると云ふこともしないで居る所へ、鎌倉から使が来た、北條の館にも何か非常な騒ぎ事があつて、是はどうも日蓮の首を斬らぬが宜いと云ふことになつた。是は元々頸を斬ると云ふことは考へものであつたので、泰時の式目には坊主の首を斬ると云ふ法律はない、どうしたものだらうと云ふ評議のあつた事でありましたから、そこで鎌倉の御殿の方から使が来た。又刑場の片瀬の方からも、斯う云ふ譯で首が斬れないと云ふ使をやつた、その使が或る川の所で行合つたと云ふので、今でも行合川と云ふ名が残つて居ると云ふのであります。が、そんな事は何うても宜いのであります。要するに頸が斬れぬ所へ使が来て、先づ斬れぬとすれば、それで宜いから依智の本間六郎の所に預けるが宜いと云ふ指圖であつた。頸を斬るなと云ふことではない、頸が斬れぬに依つて本間六郎に預けると云ふ使が来たものと思はれる。

依智へ御
預け

そこで『それでは依智の方へ』と云ふことになりましたが、誰も道案内する者

が無い、聖人も道がちよつと分らぬものであるから、誰か道案内せよと仰しやつたが、誰も前に立たない、この光景が頗る面白い、傍へ寄ると以前の光りものやつて來はせぬかと思ふから、道案内せよと云つても、唯だ背後の方から「あつちの方でございます」こつちの方でございます」と言ふだけで、一人も前に立つて案内する者もない。そこで聖人自ら考へて、あちらの方こちらの方と云ふ方へ、自ら道を辿つて依智の方へ行かれた、多勢の鎌倉武士共は後の方からビク／＼もので附いて行つた譯であります。

星下りと改信者

斯くて依智の六郎左衛門の館へ行かれましたその晩、星が降つたと云ふので、今でも星下りの靈場としてその跡が寺になつて居ります。この星下りと云ふことは、聖人の御文章にもあることでありまして、事實であらうと思ひます、即ちその晩、六郎左衛門の邸の庭の梅の樹に明星天子が下つたと云ふのであります、その光景を見て大勢の送つて來た侍共が、非常に感心をして火打袋より珠數取出

して之を打ちつて、以來念佛は申しませぬと云つて改宗した者が百何十人あつたと云ふ、實にえらい事であります。

聖人が此の依智に少し御坐つた時に、鎌倉の方から使が來た、再び頸斬るべしと云ふ使であるかと思つた所が、その時は本間六郎は不在でその代りをして居つた右馬丞と云ふ人が言ふには、此の御僧は大切にしなければならぬ、若し此の御僧を殺すやうな事があつたら大變であるから、氣を附けて大事にせよと云ふお使でありましたと云ふことである。そこで此處に御坐ること二十日餘りて、今度は愈々佐渡が島に御流罪と云ふことに極まりました。どうも頸を斬ることが出來ぬが、と云つて再び鎌倉へ戻して元の通り勤王の大義を唱道されては困るから、そこで當分事の落着するまで佐渡が島に流さうと云ふことになりました。

佐渡への左遷

鎌倉市中の放火

所がその頃鎌倉の府中に火を放けたり、人を殺したりする事が頻々としてあつた、さうして是は日蓮聖人を流すと云ふのを怨んで、日蓮門徒の弟子信者がやるの

聖人愛弟の情

てあると云ふ噂が専らであつた、そこで幕府に於て日蓮の弟子信者と云ふ者の名前を調べた所が、二百六十餘人あつたと云ふことである、即ち日蓮聖人の佐渡御流罪以前二百六十餘人の信者があつたのであります。所が日蓮門下の方には、そんな事をする者は一人もない、徒に火を放つて縁も怨もない人の家を焼いたりするやうなことはしないのであります、是は實はやはり念佛門徒等がやつたのであります、さうして却つて日蓮聖人の罪を重くし様と謀つたのであります。それから十月三日になりました、聖人は彼の有名な土籠御書と云ふものを弟子にお遣はしになりました、是は前に一寸述べましたが、聖人が龍の口で刑罰に遇はされた時に、日朗上人、日心上人と(別頭佛祖記に依れば、この日心上人は、初は日心と云と云ふ)坂郎入道、伊澤入道、得業寺殿といふ五人の弟子檀那が土の牢の中に入れたのであります、其の外信者もそれ／＼迫害を被むつたのであります、その土の牢に入れられた者に、聖人が文章をお送りになつた、是は有名な日朗土籠御書と云ふのと、五人土籠御書と云ふのと二通ありますが、世間に能く知れて居るのは日朗土籠御書であります。この二通の土籠御書は聖人が弟子共に同情せられて慰められたものであります、今夜の寒むきに就けても牢の中の事思ひやられて、いたはしく候へ、自分は佐渡の國へ流されるのは覺悟の前であるから、何とも思はないけれども、お前達は牢の中で嘸寒かろうと云ふことを仰しやつたのであります、即ち五人土籠御書には斯うあります、是は十月三日に書かれた御文章であります、

五人土籠御書

今月七日佐渡の國へまかるなり。各々は法華經一部づゝあそばして候へば、我身並に父母兄弟存亡等に回向しまし候らん。今夜の寒するにつけて、いよ／＼我身より心くるしさ申すばかりなし。お前等が日蓮に随つた爲に、牢の中に入れられたと云ふことを思うと、自分の流される苦みよりは、牢の中の寒い生活が思ひやられて堪へられないと仰せられる、

日朗土籠御書

實に有難い御言葉であります。又日朗土籠御書にも、日蓮は明日佐渡の國へまかるなり。今夜のさむきにつけても牢のうちのありさま思ひやられていたはしくこそ候へ。

佐渡への出發

とある、どちらとも土牢の冷たい事を思ひやられて、お歎きになつたのであります。斯くして愈々十月十日に依智をお發しになりまして、佐渡の國へ行くこと云ふことになつた。この時富木殿と妙一尼から、各一人宛の使をお附けになつて、それから武藏の糸川の方にお泊りになり、段々越後路を辿つて行つて、寺泊の津にお着きになつたのが十月二十二日であります。此處から寺泊御書と云ふものをお書きになつて、鎌倉から附けて寄越した從僕に持たして富木殿へお送りになるのであります。その御書の趣意はどうかと云ふと、是にも色々結構な事があります。が、要するに、

寺泊御書と迹化の代官

日蓮は八十萬億那由他の菩薩の代官として之を申す。

佐前と佐後の連鎖

日蓮は迹化の菩薩の代理として、この法門を陳ぶと仰せられて未だ本化の再身とは仰せられぬ、法華經を披いて見れば、上行菩薩が法華經の付囑をお受けになつて、末代に出て、法華經の爲に色々法難にお値ひなされると云ふことがある、日蓮が今まで首の座に坐り、流し者にされ、迫害を受けた事から考へれば、日蓮は上行菩薩の再誕であると云ふべきを、佐渡前故に迹化の代官と仰せられた所がそれが寺泊から一つ海を越えて向ふへ渡つて佐渡へ着くと云うと、その時から上行の再誕であると云ふことを明言し、且つ愈々上行の再誕として大事の法門、即ち開目鈔等を、その十一月から筆を起して「返る年の二月雪中に記して有縁の弟子に送れば」と云ふことになつて、佐渡が嶋に於て一大事の法門をお書きになるのあります。その寺泊と、佐渡が嶋にお着きになつて直ぐやはり富木殿へお遣はしになつた御書、又法華取要鈔との間の連鎖を考へて日蓮聖人の佐渡前、佐渡後の關係と云ふものを見るのであります、即ち三澤鈔に、

佐渡の國へ流され候し已前の法門は、たゞ佛の爾前の經とをばしめせ。と聖人が仰せられた通り、佐渡後に於て愈々一大事が現れて來るのであります。「斯くして日蓮聖人の龍の口の法難は、一つは蒙古が日本を襲うて來ると云ふ事、一つは北條が大義名分を破つて居ると云ふ事、即ち勤王の大義と蒙古來のこの二大問題に依つて、龍の口の首の座にお坐りになつたのであります。北條氏は上に朝廷の御威徳を抑へ、下に民心を收攬して、即ち多數心理さへ巧く誤魔化せば、我國の大義名分は廢つても宜いと云ふ考でやつたものであります。今の日本の思想界を動かさんとして居る多數思想と云ふものも、やはり其處に禍があるのであります、多數の者が承知さへすれば宜いと云つても、この日本の國體と云ふものは、今日日本人の多數が決議して變へることの出來るものでないものであります。法華經なら法華經の教義と云ふものは、ドンドコ法華の多數が寄つて、そんなものは嫌だと云つて決議しても、それは何にもならぬのであります、教と云ふものは

ちやんと萬世凜乎として極つて居るものである。日本の國體も亦同じく天壤と窮まりなく、儼然凜乎として極つて居る。若し萬一今の日本國民が誤つて他の思想に侵されて——左様な事もあるまいけれども、萬一多數がえらいと云ふやうな事になつても、それは動く奴が皆悉く間違ふのである。法華經の正義と云ふものは、多數に依つて決するものではない、我が國體も亦多數に依つて決するものではないのである。日蓮聖人ははつきり其處を御主張になつて、北條の如き勢力を得て居る者に對抗して戦はれた、一つ間違へば首の座に坐る、流し者になると云ふ命懸て、其の正義を御主張になつたのであるから、吾々は日本臣民である以上は僧侶と俗人とを問はず、日本の爲に内輪には勤王の大義を飽く迄も保守し、外には日本の國威國光を輝やかし、その上に法華經の正義を打立て、立正安國の大義よりして、一天四海皆歸妙法の實を擧げるやうに、國家的色彩に日蓮主義を發揚して行かなければならぬのであります。唯だ日蓮聖人の傳記を昔の事として語

龍口の法羅(下)

つて居るのでは何にもならぬ、聖人の御苦心をなされた血と涙は何の爲に流したか、吾々日本人は、その日蓮聖人の流した血と涙を今の時代に復活して、其通りにやつて行かなければならぬ。即ち法華經の正義と日本の國體とに依つて國民全體の覺醒を促す活動と云ふものが、日蓮主義者の生命である。この意味に於てお互に一分の努力をして、法と國とに捧げる様にして、生きては日蓮主義の菩薩の行を爲し、死しては日蓮聖人の御坐る所の靈山淨土に往詣して、日蓮聖人より『善い哉汝』と云ふ御稱賛を受けるを以て、吾々は理想としなければならぬ。吾は諸君と共にこの大正の御代に生れて、一分思想界に日蓮主義の功勳を立てることが出来るのは、こんな愉快な事はない。この思想の濁濁は、日蓮主義大勳の機運に際會して居るのである。この時を忘れては日蓮主義は何の役にも立たぬ、明治維新の際に日蓮主義が寢惚けて居つたのは慨歎に堪へぬが、大正の今日に日蓮主義が活躍せんければ、それ等の者は以後日蓮主義者と云はさぬ、南無妙法蓮

華經と云ふ以上は、日蓮聖人の御趣旨に適うて、この時代、この國家今日の場合に應じたる働きをしなければならぬのであります。どうぞ諸君と共に益々日蓮主義の正義の宣傳に従事致したいものであります。

十一 佐渡の謫居

十月十日に相摸の依智を立ちて、同二十八日に佐渡の國へ着きぬ。本間六郎左衛門の尉が後見の家より北に塚原と申して、洛陽の蓮臺野の様に死人を送る三味原の野邊に、垣もなき草堂に落着ぬ。夜は雪ふり風はげし、きれたる蓑を着て夜を明す。北國の習なれば北山の巔の山をろしのはげしき風身にしむ事をば但思ひやらせ給へ。

(波木井鈔)

同十月十日に依智を立つて、同十月二十八日に佐渡の國へ着きぬ。十一月一日に六郎左衛門が家のうしろみの家より塚原と申す山野

佐渡の謫居

三二六

の中に、洛陽の蓮臺野のやうに死人を捨つる所に、一間四面なる堂の佛もなし、上は板間あはず四壁はあばらに、雪ふりつもりて消ゆる事なし。かゝる所に敷皮打ちしき、糞うちきて、夜をあかし日をくらす。夜は雪霰雷電ひまなし、晝は日の光もささせ給はず、心細かるべきすまるなり。

(種々振舞鈔)

今月(十月)十日相州愛宕郡依智の郷を起つて、武蔵の國久目河の宿に付き、十二日を経て越後の國寺泊の津に付きぬ。此れより大海を亘りて佐渡の國に至らんと欲するに、順風定まらず其の期を知らず。道の間の事、心も及ぶこと莫く、又筆にも及ばず、但暗に推し度るべし。又本より存知の上なれば、始めて歎くべきに非ずと之を止む。

(寺泊書)

去年の十一月より勘へたる開目鈔と申す文二卷造りたり。頭切るるならば、日蓮が不思議をとどめんと思ひて勘へたり。此文の心は日蓮に依りて日本國の有無はあるべし、譬へば家に柱なければたも

日蓮聖人は文永八年十月二十七日越後の寺泊の津を船出なされたのであります。が、この日は非常に風が激しくて、傳説にはこの時波の上に題目を御書きになつて、漸く風が静まつたと稱して居るのであります。翌二十八日に佐渡の松が崎と云ふ所にお着きになりました、二十九日には小倉と云ふ所を過ぎて、さうして新穂と云ふ所に行つて御泊りになりました。この時の事は聖人自ら種々御振舞御書にお書きになつて居ります。(本節の首にその文を掲ぐ)

又同じ意味で妙法尼御返事には、斯うお書きになつて居ります。

佐渡の謫居

三二七

里より遙かにへだたれる野と山との中間に塚原と申す三昧所あり。彼處に一間四面の堂あり、そらは板間合はず、四壁はやぶれたり、雨そとの如し、雪は内に積る、佛はおはせず、窻疊は一枚もなし、然れども我根本より持ちまゐらせて候。教主釋尊を立てまゐらせ法華經を手ににぎり、蓑をさ笠をさして居たりしかども、人も見えず食もあたへずして四箇年なり。

翌十一月の朔日に大野村と云ふ所に、塚原と云ふ所があります、それは今の御文章にある通り、死人を葬る所で、詰り田舎に行きますと、三昧堂と云ふものがあります、葬式の時分に一寸休憩をします場所で、野原で引導を渡して、其處で焼くなり葬るなりするのでありますが、この三昧堂の大きさは一間四面と何處にもお書きになつて居りますから、洵に小さなもので、僅かに疊二疊敷しかないのであります。三昧堂の光景は首の御文章にもある通り「上は板間あはず」と云ふのは、何か板の古いやうなものが載せてあつたけれども、もう壞れてその間が隙が

空いて居るので、雪が降れば中へ雪が降り込むと云ふ、「四壁はあばらに」と云ふから、やはり何か板の古いやうなものが當てあつたけれども、その間が隙いて居るので、其處からも風が盛んに吹込むと云ふやうな譯であります、家と言へば家でありませけれども、小屋掛けのやうな詰らない所の、殊に一間四面と云ふことは、随分人心を刺戟することであらうと思ふのであります。周囲は三昧原でありまして、人家がある譯でもない、さうして其處に聳えて居る山があつて、その山から下して来る嵐が殊に寒く、板の間を通つて来るから、夜も「簑うちきて夜をあかし」と仰せられて居る。尙ほこの御文章にあります通り疊も窻も一枚も無いと云ふことであります、是もえらいことであります。随分佐渡が島は今でも寒い所でありませが、それが疊もなく、蒲團などは無論ない、火鉢がある譯でもないのである、其處に十一月の朔日に御着きになりました。さうして固より所持する所の釋尊を、何處か棚のやうなものを拵へてその隅に御安置なされた、さうし

教主釋尊
を奉安す

て持つて行つた法華經を手に握つて、其處で暮しになつたのであります、この
 『我根本より持ちまゐらせて 候 教主釋尊を立てまゐらせ』と云ふことは、記憶
 すべきことであります。後に至つて釋迦一尊の像などは不都合だから捨てし
 へ、と云ふ様な日蓮主義者が出来ましたけれども、日蓮聖人は弘長の伊豆の伊東
 の御流罪の時に、地頭朝高から海中出現の釋尊を捧げた、それを以來離さず奉持
 せられましたので、隨身佛と稱して居ります。日蓮聖人の御出でになる所にはこ
 の釋尊は離さず御所持になつたのであります。今度佐渡へ御出でになつても、こ
 の釋尊を自分の本尊として御持ちになつて、さうしてその一間四面の辻堂の何處
 かに立てたまふたのである、これが即ち日蓮聖人の御力の根元であります。教主
 釋尊の尊像を立てまゐらせて、さうして『法華經を手ににぎり、簑をさ、笠をさし
 て居たりしかども、人も見えず食もあたへずして四箇年なり』と言はれて居る。こ
 の四ヶ年の勇氣も、この一體の釋尊よりして與へられたものであります、そこを

阿佛房の
敵意

考へなければならぬ。宗學と言つても屁理窟ばかり並べて、この力の根元を忘れ
 るやうなことになるつては駄目です。茲に注意して置くのであります。』
 さうして其處に御坐る時に、彼の順徳天皇の御供をして參つた達藤爲盛と云ふ
 人があります、是は淨土宗の信仰の強い人で、殊に承久の亂後、あゝ云ふ風に京
 都が没落した譯でありますから、非常に厭世悲觀の思想になつた、一夫萬乗の君
 も佐渡が島に御出でになつて、さうして佐渡で順徳天皇は崩御になつたのであり
 ます、爲盛は忠節の人でありますから、順徳天皇の御陵を守つて、自分も佐渡の
 士になるべく決心して、毎日念佛修行をして居つた、さうして阿佛房と云つて居
 つた位であります、阿佛と云ふことは、南無阿彌陀佛から來て居るので、自分の
 名前を阿佛と稱する位、淨土の信仰の強い人であります。そこへ日蓮聖人が流さ
 れて行かれた、法然上人等の主張する南無阿彌陀佛に依つて法華經を捨つる人々
 は地獄に行くこと云ふことは、何時も日蓮聖人が主張するものであるから、その事

は佐渡へ行つてもやはり御主張になつて居つたらうと思ふ。それをこの遠藤爲盛が非常に怒つて、日蓮聖人を殺してしまはうと云ふ考を起して、さうして夜密かに塚原三昧堂を襲うて參つて、一打に日蓮聖人を斬つてしまはうと思つたけれども、元と武士であるから、名乗りも掛けず不意打をしようと云ふことは卑怯なことであるから、中へ入つて一通り話をして、不都合なことを言へば、その時言渡して觀念さして斬つてしまはうと考へた。殺すのが目的であるけれども、黙つてスバツと斬るのも、武士の道に背くと云ふので、大きな刀を持つて殺す決心で三昧堂の中に入つて来た、さうして『あなたは念佛無間と云ふことを言ふさうだが、本當か』、『無論さう云ふことは、自分の主張する所である』と云ふので、日蓮聖人のことであるから話されたが、さぞ危ないことであつたらうと思ふ。是は危険な奴だから少し慰めてやつてと云ふやうなことは御考へなさらなくて、峻烈に仰しやつたであらうけれども、併しその話の筋に感心したのでありまして、殊に日蓮聖

人の態度風采を一見して、爲盛は感心したのであります。日蓮聖人のやうな立派な精神に満ちて、命を捨て、法と國とに盡す、一切衆生を救ふと云ふやうな大神で、塚原三昧堂に籠を著て夜を明かしても、びくともしないと云ふやうな人の上に顯はれて居る所の一種の靈光と云ふものは、何とも言へないものでありますから、平然として日蓮聖人が言はれるその議論より、顔を見て居る間にスツカリ參つてしまつた。これに參らぬ人はないであらう、參らぬ奴は餘程の馬鹿か氣狂ひか、無茶な奴である、虎でも狼でも斯う云ふ聖者に向つたならば、頭を下げて足を舐りに行く位であるから、人間であるならば、斯う云ふ偉人に出會したら、一言二言いへばハーツとなつてしまふのが當り前である。この遠藤爲盛は別段にえらい譯でもなかつたらうけれども、日蓮聖人に出會つて即座に感心してしまつて、成程これはえらい人だと云ふことになつて、殺すどころのことではない、『洵に濟まぬ考であつた、實は貴方を殺しに来ただけけれども、私が悪かつた、許して下

千日尼の
供養

他宗徒の
謫居

「さい」と言つて、それから自分の家に歸つて女房の（是が後に千日尼と云ふのであるが、その名前にならぬ前は、お花さんと言つたかお梅さんと言つたか分らぬけれども、兎に角御文章に残つて居るのは、千日尼であります、何でも年は未だ若かつたのであるが）この千日尼に能く話をして、さうして二人心を併せて日蓮聖人に食物を送ることになるのであります。晝間行つては人目に立つと云ふので、御飯を炊いて置いて、夜密かにこの婦人即ち千日尼が、塚原三昧堂へ食物を持つて行つた。或る説に依ると、その供養を捧げる一日の功德は千日の功德にも優ると言ふので、日蓮聖人が千日尼と云ふ名を與へられたとも言ふて居る。今法華經の行者が天下に身を容るゝ所なくして、この三昧堂に捨てられ、食物を與へずして四ヶ年と云ふのであるから、日々食物も送つて呉れない、それなら自分で托鉢して食ふと云ふことも、日蓮聖人はしないのであるから、何を食つて居つたか殆んど分らぬ。悪口を言ふ他宗の者は、日蓮聖人は塚原三昧堂に生活して居つて、

彼は犬の死んだのを喰つて居つたか、人の糞を喰つて居つたかと言ふのである。この悪口を聞くに至つて、益々日蓮聖人の偉大が分るのであります、どう調べて見ても食物の行くべき途がない、佐渡が島で法華を信じた者は未だ一人も無い、地頭本間六郎左衛門も反對であるし、日蓮は泥棒することも出来まいし、托鉢をせぬのであるから、何を食つて居つたか分らぬ、どうしても犬の死んだのか人の糞を喰つたに違ひないと云つて、他宗の人は悪口をする、無慘とも言ふばかりなし、此に至つて日蓮聖人は萬世人心を動かす力がある。今の御文章にも「人も見えず」とある、人も見えずと云ふのは誰も訪ねて来ず、「食も與へずして四ヶ年なり」と言ふのであるから、一つ間違へばひぼしになつてしまふ、それは御飯を食へられなかつたこともあるでせうが「ナーニ是さきり餓えて死んでも構はぬ」と云ふ決心を有つて日蓮聖人は居つた。寧ろ遠藤爲盛が斬りに来て呉れたのが幸なことで、併しそれから夜々千日尼をして食物を送らしたと云ふことであります。

それからやはり浄土宗の坊さんの唯阿と云ふのが大分勢力もあり、悪い坊さんでありまして、日蓮聖人を法敵と見て之を殺さうとした。そこで百姓共を煽て、「彼處へ来て居る坊主が斯うく云ふことを言ふのだが、モウこの島に来て生きて歸る人間はないのであるから、窃かに暗殺してしまへ」と云ふ計畫をした、且つ地頭本間六郎も反對であるから、本間六郎の同意さへ得て置けば、殺しても御咎めはあるまいと云ふので、之を本間氏に話をした、「百姓を語らつて日蓮を暗殺するから、御承知置を願ひたい」と云ふやうなことを持込んだ。所が本間六郎重連は「それはいけない、是は鎌倉から預つた僧である、聞く處に依ると、鎌倉から依智に使があつた時分には、これは大事な科人である、國に置けないから佐渡へ流すけれども、粗末のことをしてはならぬと云ふことを仰付つて居る、殺すと云ふやうなことはいけない、それより問答をして法論の上にて、彼の言ふことが間違つて居ると云ふことを明かにさへすれば、彼も頭を下げてさう云ふ事を止める

だらうから、お前がそれほど思ふならば、えらい學者を集めて包圍攻撃をし、一つの宗旨でいかなければ、各宗皆寄つて、佐渡の坊さんだけでいけないければ、越後、信濃に使をやつて、ゆつくり支度をして、さうして彼を參らせてさへしまへば、宜いではないか」と言はれた。「大きにさうだ」と云ふことになつて、それから翌年の春に塚原問答と云ふことが起るのであります。

この十一月二十三日に日蓮聖人は初めて書を富木播磨守に御送りになつた、富木入道殿御返事と稱して遺文録に出て居りますが、佐渡最初の御書と云つて名高いものであります。佐渡前、佐渡後の違ひと云ふことは、ずつと後に書かれた三澤鈔と云ふ御書に、

佐渡の國へ流され候ひし以前の法門は、ただ佛の爾前の經と思召せ。

とある、「爾前の經」と云ふのは、佛が法華經へ来るまで方便を説いて居られたと同じこととて、日蓮は建長五年に題目を唱へ始めてより、この文永八年十月二十八日

大切

佐渡の謫居

佐渡の國に著くまで、前後十九ヶ年の間色々教養を説いたけれども、未だ眞實を顯はして居らぬ、まるきり嘘と云ふことは無論ないが、一番大事なることを未だ顯はして居らぬから、「佐渡の國に流されし以前の法門は、佛の爾前の經と思召せ」と、日蓮聖人は明言して居られる。佐渡へ渡つて愈々眞實を御顯はしになるのであるが、その眞實を顯はす前に、日蓮聖人御自身が自分は普通の人間では無い、日蓮は釋尊の高弟上行菩薩の再身であると云ふことを明かにせられる。それはどう云ふ御文章で現はれて居るかと思ひますと、

去る十月十日に付られ候し入道、寺泊より還し候し時、法門を書き遣はし候し。推量候らむ、已に眼前也。佛滅後二千二百餘年に月氏、漢土、日本、一閻浮提の内に天親龍樹内鑑冷然外適時宜云云。天台傳教は粗釋し給へども、之を弘め殘せる一大事の秘法を、此國に初て之を弘む。日蓮豈に其の人に非ず乎。

上行菩薩の自任

初めて此處に於て天台、傳教も未だ弘めない大事な法門を日蓮が明かにする、「豈に其の人に非ず乎」と云ふことは、上行菩薩が末法に法華經の付囑を受けて出られると經文にあるから、日蓮がその上行菩薩ではあるまいか、今まで法華經の爲に様々迫害に出會つて居る事實から見て、勸持品二十行の偈を身に讀んだ事實から見て、略々貴方は推量してござつたらう、唯の坊主ではないと云ふことを。日蓮はハッキリ言はぬけれども、貴殿は心の中には既に推量をして、日蓮は上行菩薩の再身なるべしと御考へになつたてでありませう。「推量候らん已に眼前なり」と云ふことは、勸持品の二十行の偈を適切に讀んだと云ふ事である。それはもう今まで屢々話して居ることであるから、勸持品の二十行の偈と云ふことは、どうだと云ふことを御承知になつて居れば、その味ひが分る、此處で再びそんなことまで言つて居つては話が進まぬから「日蓮豈に其の人に非ず乎」と云ふ一言で分るべき次第であります。

佐渡の謫居

愈々翌文永九年になりまして、日蓮聖人の御歳は五十一歳、この正月に前さの唯阿の催しに依つて越後、信濃あたりより、色々の宗旨の人々が集つて、さうして茲に塚原問答と云ふことが起つた。本間重連もその席に列つて、さうして愈々日蓮が負けるならば、もう再びえらさうなことは言はさぬという決心で控へて居る、その時の光景は、聖人自分で御書さになつて居ります。

念佛者等、或は淨土の三部經、或は止觀、或は眞言等を、小法師等の頸にかけさせ、或は脇に挟ませて、正月十六日に集まる。(色々の宗旨の者が、小僧に書物を持たしたりして段々やつて來たのであります) 佐渡の國のみならず、越後、越中、出羽、奥州、信濃等の國々より集まれる法師等なれば、塚原の堂の大庭、山野に數百人、六郎左衛門尉兄弟一家、さならぬ者、百姓の入道等、數を知らず集まりたり。念佛者は口々に惡口をなし、眞言師は面々に色を失ひ、天台宗を勝つべき由をのゝしる、在家の者共は、聞ふる阿彌陀佛のかたきよ

とのゝしり、さわぎ響くこと震動雷電の如し。(ワイ／＼言つて愈々今日は、やられると云ふやうな譯である) 日蓮は暫く騒がせて後、各々静まらせたまへ、法門の御爲にこそ御渡りあるらめ、惡口等よしなしと申せしかば、六郎左衛門を始め諸人然るべしとて、惡口せし念佛者をば素首を突出しぬ。(何時までも惡口言ふ奴は、それはいかぬからと言つて向ふの仲間へ抛り出した) さて止觀、眞言、念佛の法門、一々に彼が申す様を牒し揚げて承伏させては、丁とは詰め丁とは詰め一言二言には過ぎず。鎌倉の眞言師、禪宗、念佛者、天台の者よりも、はかなき者共なれば、只思ひやらせ給へ。(種種御振舞鈔遺文錄一四〇一頁)

貴方は鎌倉に居て知つて居るだらう、鎌倉の他宗の者でもモウ皆あかぬのだから、それより學問の足らぬやうな奴が寄つて來たのであるから、「一言二言に過ぎず」問答と言つた所て一言か二言で行詰つてしまふ、「焙烙千に槌一つなるべし」、日蓮聖人は槌を持つて居る、焙烙が幾ら來てもポン／＼割られてしまふ、或は「利劍

重連への
誠告

を以て瓜をさくが如し』庖丁で南瓜を叩き切るやうなものだ。それは確かに斯う云ふ有様のものでありましたらう、そこで皆やられてしまった、即ち焙烙が皆割られてしまった、南瓜が切られて仕舞うた譯であります。その時に日蓮聖人は、重連に向つて言はれるには「鎌倉に今や事が起るに依つて、貴方は田舎に田を作つて居つた爲に戦に遅れたと云ふことでは、武士の名折だに依つて早く支度をして、鎌倉に行つて武士の本分を盡さなければならぬ」と云ふことを言はれた、それは豫言見たやうな譯であるけれども、重連は左様なこともあるかなと思つて歸つたのであります。

最蓮房の
歸伏

この二月一日に、前きの塚原問答の結果でありましたか、天台宗の先づ一番佐渡に於ての學者であつた最蓮房と云ふ人は、珠數を切つて日蓮聖人の弟子となつて、後に日淨と云ふ名を與へられた。この最蓮房と云ふのは名高い人でありまして、御遺文の中に澤山之に與へられた結構なる御書があります。二月の十一日に

生死一大
事の血脈

至つて血脈鈔と云ふ御書を之に御與へになつて居ります、この中に彼の有名なる異體同心の教訓と云ふのがある。血脈と云ふことは、人間の親から血統を傳へると云ふことで、牛の子は大きくなれば牛になり、馬の子は大きくなれば馬になる、幾らえらい者でも羊の子が人間になりさうなことはない、虎の子が師子にはならぬ、吾々が佛様になるには、佛様の血を享けて、即ち佛様になるべき血脈と云ふものを享けなければならぬと云ふことであります。その場合に日蓮聖人は、その佛の血と云ふものは何處から享けるかと云ふことに就て、即ち異體同心の教訓と云ふものを與へられた。日蓮が一類の血と云ふのは、釋尊を戴き、法華經を信ずる信仰を基にして、小さな争などは捨て、この佛様の大神を戴いて心を一にして、さうして世の人々を救ふと云ふ、この法華弘通の大活動に就く、そこに血脈と云ふものがあるのである。自分一人の信心を極め込んで一人々々別々になつて居るやうな、異體同心、水魚の思ひを捨てたならば、其處からは佛になるべき

血脈が切れると云ふことを説いたものであります。それは近頃の者は少しばかり法門でも聴くと、直ちに慢心して詰らないことに、たぶらかされて生煮になり、法義を宣傳する上に嫉妬を起し、詰らない悪口などを言ふのであるが、淺間しき限りである。大體に於て思想の牆壁を除つて、自ら任じて傳道に従事する者は、互に握手して異體同心になつて行かなければならぬものである。併し異體同心になるからと言つて、骨も力も捨てしまつて、グニャ／＼になつて、米が溶けて御粥になつて、それが又溶けて一緒になつたやうなドロ／＼になつて一つになるのでは、それは何にもならぬ。銘々主張があり、信念があり、自ら任ずる所があつて、而して堂々たる主義精神の爲に同心して盡すと云ふことではなければならぬ、それが日蓮聖人の仰せられて居る所の血脈である。その文章は有名なもので大抵御承知でありませう。

異體同心の聖訓

總じて日蓮が弟子檀那等、自他彼此の心なく水魚の思を成して、異體同心に

して南無妙法蓮華經と唱奉る處を、生死一大事の血脈とは云ふ也。然かも今日蓮が弘通する處の所詮是也。若し然らば廣宣流布の大願も可叶歟。剩へ日蓮が弟子の中に異體異心の者有之、例せば城者として城を破るが如し。

(生死一大事血脈鈔)
遺文録七四三頁

城を守るべき者が敵と通じて味方の城を破るやうなものがある、日蓮が弟子となつた以上は、此の法華經の信念に依つて同心してやらなければならぬ。今でも日蓮主義が弘まらないのは他宗の邪魔ではない、日蓮主義者の中に僻見な奴、下らぬ奴があつて、この正義の發揚を妨害して居るのである。城者城を破ると云ふ戒めは、今明かに日蓮主義者——日蓮宗の坊主とか信者の頭に懸つて居る。その下らない奴が無くならうものならば、日蓮主義は滔々として天下に弘まつて行くのである。尙ほこの御書に、やはり上行菩薩出現のことを言はれて居る、是は前さ

上行出現の聖訓

一大事のことになつて來るのであります。

上行菩薩、末法今の時此法門を弘めんが爲に御出現可有之由。經文には見え候へども如何が候やらん。上行菩薩出現すとやせん出現せずとやせん。

日蓮先づ粗弘め候なり。(血脈鈔)

即ち上行菩薩が出て居られるか出て居られぬか、日蓮は上行菩薩であるかないか知らぬけれども、上行菩薩の爲さる仕事を、日蓮が引受けてやると云ふのであります。此に於て日蓮聖人自身が上行菩薩だと云ふ意味を仄かされて居るのであります。それも俺が上行ぢや〜と言ふやうなことはまづい、上行菩薩出現すとやせん出現せずとやせん」と言へば、それて説明し終つて居るのであります。

京都六波羅の叛亂

それからこの文永九年の二月十一日に、日蓮聖人が先きに重連に告げられた通り、内亂が起りました。京都の六波羅を治めに、鎌倉の方から名代に行つて居りました時宗の兄である時輔と云ふ者が、叛亂を起して、鎌倉の言ふことを肯かない

豫言の中と法弟の赦免

ことになつた、そこで時宗は義宗と云ふ者に命じて京都を撃つことになりました。それは一つの騒ぎである、所謂自界叛逆難と云ふて、日蓮聖人が同志打を始めると言はれた豫言が的中した譯でありますから、時宗は非常に感じた。日蓮聖人が法華經の行者をば惱ます時は自界叛逆と他國侵逼の二難が起ると言つたが、それは今年の九月のこと、然るに翌年二月十一日に至つて京都六波羅叛すと云ふことてありますから『成る程』と時宗が感心して、日朗上人以下五人の士の牢に入れて居つた者を、この時許すのであります。京都の叛逆と言ふことに就て、是は日蓮聖人の言ふことは中々重んずべき點があると云ふのもつて、士の牢に入れて居つた弟子達を赦免したのであります。重連も佐渡に於て大いに感心しました、前きに塚原問答の時に、早く鎌倉にお出でにならぬと、武士が戦に遅れては、是程恥づべきことはない、田を作つて居つて、戦に遅れると云ふことは愧づべきだと言つたが、果せる哉、僅か一ヶ月を出でない内に、京都六波羅叛すと云ふことで非

重連誠告の適中感

常に感心しまして、法門のことも日蓮聖人の仰しやることは本當であらう、念佛無間も間違ひあるまいと云ふことになつた、「早く鎌倉へ行かなければならぬ」と言つたその近い豫言——僅か一ヶ月を経たない豫言の中に驚いて、重連は感心して日蓮聖人に歸依することになつた譯であります。此處で地頭が信者になつた、日蓮聖人流されて未だ四ヶ月経たない、十一月の一日から二月の十一日でありまして、すから三ヶ月と十一日に於て、斯かる事變が現はれた結果、遂に地頭を生捕つてしまつた、是はえらいことであります。

この二月二十日最蓮房に贈られた草木成佛に關する御書があります、それにも名高い名句があります。

一念三千の法門を振り濯ぎ立てたる大曼茶羅なり。當世の習ひそこなひの學者、夢にも知らざる法門なり。(遺文錄 七四六)

振り濯ぎたる法門

と云ふことが書いてある。是は詳しく言へば長い話であります、一念三千の法

二種の邊見

門と云ふ佛教の中の深い真理を説明したる教も、それが唯だ理窟のみに流れては何にもならぬ、その深い真理を活かして、それが温かい信仰の方に導かれて、一念三千の真理を土臺にしたものが、有難い本尊の意味に建設されて來なければならぬ。天台宗のやうに一念三千は言ふて居つても、何を拜んで宜いか分らぬて觀音様を拜んだり、藥師様を拜んだりして居つてはいけない。日蓮聖人は佛教の一番深い真理、「一念三千の法門を振り濯ぎ立てたる大曼茶羅」と言はれた。振り濯ぐと云ふことは、着物の汚れて居るものを洗濯して垢を落すことである、さうすれば少しも垢の無い洗濯し抜いたものになる。一念三千の真理は結構だけれども、垢が附いたり汚染が附いたりしてゴタ／＼になつて居るから、日蓮聖人が之を石鹼を附けてスツカリ垢を落してザブ／＼と洗濯をした、ふりすゝぎたてたる大曼茶羅（即ち信仰の本尊）と云ふものを説いて居られる。是は深い法門であるから、普通のならひ損ひの學者——智力を説けば智力に偏し、信仰を説けば信仰に偏す

る、天台の理智に偏したる學者と、淨土門の盲目滅法の信心に傾いたる者、即ち智に偏し信に偏したる學者は夢にも知ることの出来ない教である。是は實に立派な事でありませう、今の法華學者は、やはり一念三千の法門をふりすゝぎ立てたることは、分らぬことになつて、ならひ損ひの學者、ならひ損ひの信者の夢にも知らない所に、日蓮聖人の正義があることになる。斯う云ふ言葉は日蓮主義者が忘れてならぬ事である、教訓は数多いけれども忘れてならぬ事である、一遍聞いたら胸に入れて、忘れてはならぬ事である、この言葉などは學問の方針になる事である、ペラ／＼澤山書物を讀んで居つても、肝腎の要の所を忘れて居つては何にもならぬのであります。

開目鈔の撰述

この二月に有名な開目鈔が出来上つたのであります。「返る年の二月雪中にして、有縁の弟子におくれば、畏しくておそろしからず」と言はれた開目鈔、即ち文永九年二月であります。丁度四條金吾から日蓮聖人の塚原三昧堂の生活や如

何と云ふ安否を訪ふべき使をお遣はしになつたので、その使に託して、この開目鈔を四條金吾に遣はされるのであります。それは今度はモウこの塚原三昧堂で日蓮は死ぬかも知れぬ、併し日蓮の一大事の教義は此處に書き置いたに依つて、死んでも遺憾はない、之を持つて歸つて四條金吾に渡せと云ふことで、使に託せられたのが、この開目鈔であります。開目鈔が如何に大事なものと云ふことは今更言ふまでもなく、開目鈔の事は後からも度々書きになつて居ります。

去年の十一月より勤へたる開目鈔と申す文、二卷造りたり。

十一月からと云ふのは、十一月一日に佐渡が島塚原三昧堂にお着きになつた、その時から考へてお書きになつたと云ふ。

頸斬らるゝならば、日蓮が不思議をとゞめんと思ひて勤へたり。(種々御振舞鈔 一四〇三頁)

この『頸斬らるゝならば』と云ふのは、龍の口のことではない、龍の口に於ては、斬れず済んでしまつたのであるから、『斬らるゝならば』と云ふ未來に關する疑

頸切らるるならば

はない、こゝに『頸斬らるゝならば』といふことは、この佐渡の國に於ての事を指すのである、その證文は、報恩鈔に『又いかにやありけん佐渡の國までゆく。今日切る、あす切ると、いひしほどに、四箇年というに』云々とある。佐渡へは表面流すと云ひ、愈々佐渡が島に來れば、今日切る明日切ると云ふから、何時殺されて仕舞ふか分らぬと云ふ考があるから、『頸斬らるゝならば、日蓮が不思議を止めんと思ひて勘へたり』即ち是で死んでも宜い、頸斬られても宜いと云ふので書かれたのが開目鈔である、日蓮聖人の大事な教義は開目鈔の中に書き記された事が、是で分る次第であります、假令頸斬られても開目鈔さへ残れば、日蓮の主義主張は儼存する譯であるから、頸斬られても宜いと云ふ考で書かれた。然るにこの開目鈔にある所の事を十分味はぬ人もある、開目鈔はそんなに有難くないナと言ふ、それは皆地獄の底に沈む人達であります。

開目鈔の大要

この開目鈔にはどう云ふ事が書いてあるかと云ふに、中々簡単に言へない、上下

主師親に對する忠敬

現在の三徳者

二卷あつて、日蓮聖人の御遺文中一番大事な御書であるが、唯だその要點を少し申しますと云ふと、初めに先づ總べての人が大切にせねばならぬものが、主人と師匠と親と三つある、是は世間に於ても、主人に對しては忠義、親に對しては孝行、師匠に對しては恭敬、この忠孝敬と云ふ三つの道徳と云ふものは、是は人道の根本である、即ちこの主師親の三徳に對する忠孝敬を忘れたらば、問題にならぬと云ふことを、初めに日蓮聖人は書いて居られる。さうしてその思想を土臺にして段々進め行いて、現在肉身のこの儘、現在の肉體に屬する三徳は、モウ論のない事であるけれども、この吾々の生命の屬する所の親、この無限の自己の屬する師匠と云ふものに推及んで行つて、人間の全體に及んで行つて考へて見ると云うと、この絶對の主師親と云ふものは誰であるか、是は一人にして三つを兼ねた者がある。肉體の方からは、日本の天子様が即ちそれである、天皇陛下は吾々の御主人であつて、親と同じ温か味を有つて御坐つて、又吾等の思想を導く所の

宇宙的の
三徳者

師匠であらせられる、明治天皇は賢明なる帝王であつて、又臣民を子の如く愛したまふ大御心があり、又有ゆる勅語を發せられて國民の精神を指導せられた、主師親の三徳と云ふものは、明治天皇に依つて最も明白に現はれて居る。宇宙全體の上にも一人て主人であり、親であり、師匠であるべき三徳兼備の大人格者がある、それは誰であるか、何を鏡にして、何を眼鏡に掛けて眺めたならば、絶對の主師親を認め得るかと云うと、即ち儒教も宜しい、婆羅門の教も宜しい、佛敎も宜しい、皆取出して、これを眺めて段々推及んで行くと、法華經と云ふ鏡に掛ければ、本當の意味が分らぬと云ふことになる、併し是は世間の學問を捨つるのでなくして、三道貫串と云つて、儒外内の三道を悉くその特長を用ゐられて居る。法華經の中で何處が有難いかと云うと、一切の者に皆佛性があると云ふこと、本佛が顯はれたと云ふ、この二つを取つて、女人も成佛が出来る、惡人も成佛が出来る、二乗も闡提も成佛が出来る、それは佛性があるからである、併しそ

二乗作佛
と久遠實
成

大事を抑
止せし理
由

言ふに甲
斐なき禪
念佛

の佛性を有つて居る者が、引上げられて行くべき本佛は誰であるか、是が又外には顯はれて居らぬ。法華經の中に於ても、壽量品に於て、初めてこの本佛の顯本と云ふことがあるのである、故に一切經の中に壽量品がなければ、天に日月なく人に魂なきが如きものである、この壽量品の心髓を發揮して本佛を光顯したのが開目鈔の精神である。

然らば何故之を佐渡が島に来るまで言はなかつたかと云うと、眞言と云ふものが一方に控へて居つたからである、即ち眞言に於ては、大日如來と云ふものがあつて、お釋迦様よりえらい、斯う云ふ主張であります。淨土宗の阿彌陀様がえらいと云つても唯だ願がえらいからとか、吾々はあかんからと云つてへこたれた方から出て来る、だから淨土門は大したものではない、日蓮聖人も「言ふに甲斐なき禪念佛」と言つて居られる通り、思想上の研究では何でもない。所が眞言の大日如來はサウではない、釋迦如來はあかない、大日如來は法身如來てえらいものだ

云つてドン／＼主張したので、天台の學者も皆之に降服したのであります、天台宗から眞言の方へ段々頭を下げて行つて、慈覺大師、智證大師、何れも眞言の思想に捉はれて、釋迦如來はあかんと云うと同時に、釋迦如來の説かれた一切經は人間を相手にしたものだからあかん、人間は詰らぬ者だから、詰らぬ奴に話したお經は皆詰らぬ、大日如來は雲の上で法身の菩薩ばかり相手に話した、それが大日經と云ふもので非常にえらい、斯う云ふのであります、併し之を能く考へて見ると、そのえらいものが、人間界に傳はつて來て分ると云ふのは不思議である。人間に分るやうに説いたお經は詰らぬ、釋迦の説法は詰らぬと云ふならば、大日經は今でも雲の上の宗教として置くべき譯ではないか、人間に直接説いて分らぬやうなものが、大日經と云ふお經になつて人間に分ると云ふのは矛盾である、人間を馬鹿にした宗教を、人間が頭を下げて迎へるのも愚である、サウ人間を馬鹿にして人間に間に合はぬやうな宗教は、吾輩關せず焉て斥けてしまへば宜いてない

雲の上の宗教

弘法の私見と聖人の鋭鋒

か、それは弘法大師が少し學問があつたものだから、當時の日本人が瞞されたのである、弘法大師の云草は能く味つて見ると矛盾滑稽至極であるけれども、ちよいとそれに瞞された。そこで日蓮聖人は極力之を斥けやうとしたけれども、併しお釋迦様の絶對價值——お釋迦様の非常にえらい意味合が分らぬと云うと、大日如來にやられてしまふから、そこで眞言に對してこの壽量顯本の意味を盛んに説いたならば、彼等は恐れて公場對決に出て來ないであらう、それより暫く天台が言つたやうな思想で、唯だ外のお經より法華經が有難いぞと云ふやうな事を言つて居れば、愈この場合には眞言の者は、大日如來に依つて釋迦如來を抑へ付けてやらうと云ふ考で、自惚れて出て來るであらう、さうすれば公場對決即ち公けに優劣を決すべき場所に出て來た時に、初めて日蓮聖人が壽量顯本の思想を以て、眞言の大日如來の間違つて居る事を明かにして、彼等を屈服せしめてやらう、斯う云ふ考へて、暫く壽量顯本と云ふ奥の手を隠して居られたのであります。それ

公場對決の旨趣

壽量顯本の奥義

は三澤鈔に明かに、

弟子等にも内々申すならば、披露して彼等知りなんず。さらばよも召し合はせじと思ひて、各々にも申さざりしなり。

と言はれてある、敵には己れの戦の最上の秘訣と云ふものは知らさぬものである、之を知れば向ふが恐れ戦に來ないから、一番大切な戦術と云ふものは知らさぬ、それには「敵を欺くには味方より」て、先づ味方の者にも知らさずに置かなければならぬ。彼の位の艦隊ならば打壊せと云つて、向ふが勢よくやつて來る所をバツとやつつけやうと云ふ計略で、今まで言はなかつたけれども、さう斯う言うて居る内に、佐渡が島に流されて、是で日蓮命が無くなるかも知れぬと云ふことになつたから、是で自分が死んだのでは、天台の袋かつぎ位になつて、この書量顯本の大神想と云ふものを、日蓮が上行の再身でありながら弘めずに終つては、相濟まぬと云ふので「今度頭斬らるるならば、日蓮が不思議を止めん」と云ふ、斯

戦術の要諦

本佛顯本の力説

出數々見擯

かる理由に於て開目鈔の本佛顯本と云ふことが、一番に大切だと云ふと分るのでありませう。南無妙法蓮華經と唱へたのは、それもえらいけれども、淨土宗は南無阿彌陀佛と言つた、こつちは南無妙法蓮華經と言つたと云ふやうな事では、特色が明かならぬ。眞の書量品の顯本の本佛を主張したる所が、宗教學の上に於ても、信仰意識の上に於ても、是が日蓮聖人の誇るべき特色であります、それがこの開目鈔に能く現はれて居るのであります。

それから段々それに伴うて日蓮聖人が上行菩薩であると云ふことを御説明になつた。それは法華の行者は頸の座にも坐る、寺も焼かれる、處も逐拂はれる、流し者にもなるが、その流し者になる事が一度でないことと云ふことがお經にある、しばしば流されると云ふことがある。嘗ては伊豆の伊東に流されたけれども、一遍では數くと云ふ字が讀めない、お經文には「數々見擯出」とあるのであります、擯出と云ふのは逐出されることである、即ち自分の住んで居る國を逐出される事が

數々あるとある、この「數々」の二字が、我が日蓮の身には讀めて居らぬ、人は口に法華經を讀めども心に讀まず、心に讀めども身に讀まず、日蓮が「類は法華經の一言一句と雖も、之を身に實際に讀むのである、數々逐出されると云ふ數々の二字が讀めて居らぬ、それではいけないと云ふので、佐渡が島に流されるのを待つて居つて、松が崎に着くや否や、

前には伊豆の伊東に流され、後には佐渡が島に流され、數々擯出せられると云ふ數々の二字を讀み得た、數々の二字を奈何がせん。

と開目鈔に於て言はれて居る。頸の座に坐ることもある、惡口も言はれる、痰もひつかげられた、それは既にある、モウこの上は、數々の二字を讀み了れば、勸持品二十行の偈は一字一點もなく讀み了るのである、若し日蓮が無ければ、法華經は反古になる、法華の行者には斯くくの事起るべしと豫言せられたる法華經の事柄が、日蓮がなければ反古になる、日蓮は釋尊の教化を助け奉るものである。」

數々の二字を奈何がせん

日蓮この國に生まれずば

日蓮だにもこの國に生れずば、殆んど世尊は妄語の人。

日蓮がなければ、お釋迦様も法華經も皆嘘になつてしまふ、日蓮に依つて法華經は生かされたものである、身を以て法華經を活かしたものである、と云ふことを書かれました。それは決して威張るのではない、さう書いたのを、お釋迦様を馬鹿にしたと思ふのは、無學にして書物を讀むことの出来ないドングリ頭である、日蓮聖人が斯う言はれたからと云つて、お釋迦様を尻に敷いたと云ふのではない、「日蓮だにもこの國に生れずば、殆んど世尊は妄語の人」と云ふ所に、忠節の貫いて居る所があるのであります。日蓮は有難い事である、身を以て釋尊の金言を生かし奉つたと云ふ喜びを現はして居る。開目鈔には未だ澤山良い事がありますけれども、開目鈔の事ばかり申して居つては、話が進みませぬから次に移ります。

この年三月十一日に至りまして、又阿佛房が法門の事を尋ねました、その時にやはり日蓮聖人が色々その法門に答へると同時に、日蓮は上行の再誕であると云

ふやうな意味を、やはりそこで述べられて居るのであります。開目鈔にもはつきり述べられて居ります、それは、

三類の敵人あるならば、法華經の行者は必ずある、誰であらうか、訪ねて師とすべし。

と云つて、暗に日蓮聖人は、三類の敵人が明かにある、縦から見ても横から見ても法華經の行者であると云ふことは、否認することが出来ないではないかと云ふことがありますが、この阿佛房書にも、やはりその意味を述べられて居ります。

上行出現の聖訓

淨行菩薩うまれかわり給ひてや、日蓮を御とふらひ給ふか、不思議なり不思議なり、此御志をば日蓮はしらず、上行菩薩の御出現の力に任せ奉り候ぞ。あなたが今日蓮を助けて法華經の味方をせられる、今までは念佛門徒で順徳天皇の御陵を守つて居られたけれども、それが日蓮この島に来るに及んで、日蓮を殺さうとすることになつた、然るに心を離へして日蓮を助けられる、あなたも思ふ

一名上行と三名淨行

に本化の菩薩の一人であつたであらう、あなたも斯う云ふ島に日蓮が来るのを待ち設けて居つて、表は斬りに來たけれども、一晚の中に心を離して夜な夜な食物を送られると云ふのは、淨行菩薩の生れ代らせたまふにや、あなたは三名淨行菩薩として佐渡が島に待ち構へて居つて、一名上行菩薩が鎌倉から流されるのを待ち受けて居つたか、日蓮は禮は言はぬけれども、あなたが助けられると云ふことは、一名上行菩薩の御方に委せる、あなたは三名淨行菩薩であらうと云つて、非常に尊とい意味を現はして居られるのであります。

佐渡御書の要旨

三月二十日に至つて鎌倉に於ける弟子信者に對して送られた佐渡鈔と云ふ有名な御書がある。この中には法華經の行者は剛健なる氣力を有たなければならぬ、迫害に倒れたり、反對に恐れたり、悪口位にびくついてはいけない、世の中の悪口なんと云ふものは當てにならぬ、自分が悪い爲に言はれるのは、それは反省しなければならぬ、けれども正義を守る者に向つて言ふ悪口などは何でもない、問

師子王の如き心

題にする必要はないのである、それは必ずどんなえらい人でも——お釋迦様のやうなえらい人でも、外道婆羅門は到る處に悪口を吐いたものである、悪い奴が悪口を言ふのを恐れてはいけない。裁判官に向つて泥棒は必ず悪口を言ふ。

師子王の如くなる心を持てる者必ず佛になるべし。

師子は諸獸の王であつて、他のものが幾ら吼えても少しも驚かぬ、ガタツと云つてもビクともしない。さう云ふやうに法華經の行者は決して驚いてはいけない、世の中の下らない奴の毀譽褒貶などに精神を動かしてはいけない、省るべき所は己れの精神が正義に適ふや否や、法華經の意義に適ふや否や、日蓮聖人の導きに適ふや否やと云ふことには、戦々競々として従はんければならぬけれども、天下の馬鹿者の批評には少しも心を動かしてはならぬ。教を弘め正義を布く者は、周圍の詰らない奴に、彼方へ向けと言はれれば、彼方を向くと云ふ、そんな事では駄目である。然るに今の學者と云ふものは詰らない、當世の學者等は畜生の如しと言はれた。

當世の學者

當世の學者等は畜生の如し、智者の弱さをあなづり、王法の邪をそる、諛臣と申すは是れ也、強敵を伏せて始めて力士をしる。

王法と云ふのは政治的權力である、勢力である、智者の弱さを侮り、正義を守る者を侮つて、権力や勢力から睨まれることを恐れて、鎌倉幕府の勢力がある爲にそれを怖がつてビク／＼して居る、諛ひ侍と云ふものである、人間は強い敵を伏せて初めて力士と言へる。實に好い教訓である、平生強い事ばかり言つて居つても駄目である、俗に影辨慶と云ふ奴があるが、それでは駄目である、史記を讀んでみると、彼の荆軻と云ふ者が、秦王を刺しに行く時分に、年の若い秦舞陽と云ふ奴が、ナニニあんな奴位乃公が一人て引受けてやつつけると云ふやうな事を言つて、年は十九位で法螺ばかり吹いて居つたけれども、人が信用して非常に強がりと言ふから、あれを敵を刺し殺しに行く所の附添としてやつたら宜からうと云ふことになつた、所が愈々秦の國の咸陽宮と云ふ御殿へ行くと澤山の人が居る、そ

荆軻と秦舞陽

の中を段々進んで行つて、愈々隙があつたら刺殺さうと云ふ所に、その若い奴が平生の高言にも似合はず顛へ出した、そこで敵が氣附いて通常に謁見するのに、あんなに顛へると云ふのは怪しい、彼奴を調べろ〜と云ふことになつて、調べられて是は怪しからぬと云ふので、到頭目的を達せず殺されてしまつたと云ふことがある。平生強がりやを言うて居つても、愈々の時にブル〜顛へ上る者が非常に多い、是は日蓮聖人の最も嫌ひな所である、それを日蓮聖人が言はれるのである、今の法華行者は事ある時分に於て足腰が立たない、平生は強がりやを言つたり大きな聲を出して居るけれども、イザと云ふ時になつたならば、足腰が立たなくなつてしまふ、是は日蓮聖人非常に嫌ひである。

強敵を伏せて力士を知る

強敵を伏せて初めて力士を知る。

空論は駄目である、事實強い敵と戦場に取組合つて向ふの勇將を振り伏せて、初めて強いと云ふことが言はれる、事實勇將を振り伏せないでは強いも弱いもあつ

例せば日蓮の如し

例せば日蓮の如し。

たものでない。色々政治上の壓迫、或は宗教上の壓迫、馬鹿共の團結勢力の壓迫に出遇つて而も怖れず、正義を守る事、師子王の如くなる者にして、初めて佛になることが出来る。その例は別に引くことはない。

驕る者は強敵に値ふて怖る

とある、實に簡單であります、日蓮のやうにやれ、正義を以て恐れない事日蓮の如くあれよ、斯く言うたならば、日蓮は慢心だと言ふだらうけれども、慢心と、正義に生きて居る眞の勇氣と云ふものとを、見別ける標準があるかどうかと云ふ。慢心で言ふ奴と云ふものは、愈々事がある時分は、恐れて顛へ出す。

聖人遭難の態度

おごる者は必ず強敵に値ふておそろしく心出來する也、例せば脩羅のおごり帝釋に責められて無熱池の蓮の中に小身と成つて隠れしが如し。

豪らさうに言つても本當のものでないのは、敵に出遇つた時に恐れる、日蓮は迫害に出遇つて恐れた事があるか、日蓮が龍の口の頭の座斷頭場裡に坐つた時、そ